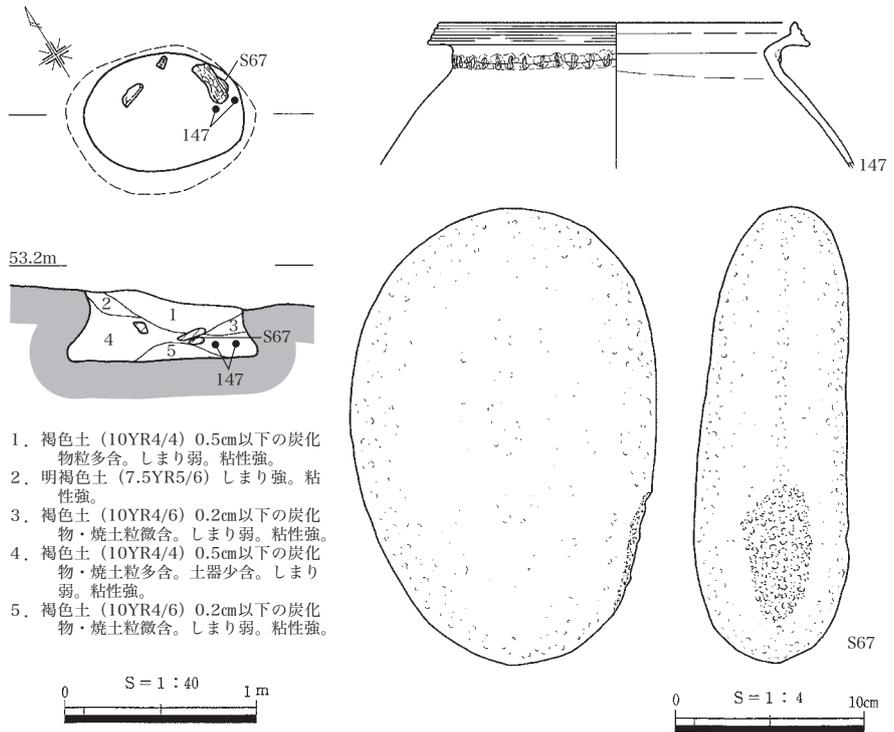


埋土と遺物の出土状況 土層断面をみると、土坑中央付近には炭化物と地山ブロックを含む褐色土がレンズ状に堆積し、壁沿いには地山ブロックを含む褐色～明褐色土が堆積するという傾向が看取される。本土坑は上方からの土砂の流入と壁体の崩落を繰り返しながら自然堆積によって埋没したと考えられる。5層、6層、11層、20層、最下層の22層には小片化した土器が少量ずつ含まれ、同層には比較的径の大きい地山ブロックと炭片の混入も目立つ。一方、上層の1～4層にはいずれも少量ずつではあるが焼土粒が混じる。上層が堆積する時に近傍で焼土が生成されるような状況にあったことが推測でき、短期間のうちに埋没したことがわかる。

出土遺物 出土した土器片のうち甕 137 を図化した。台石 S65 は北東側の底面直上で出土したものである。この他、最下層付近の20層・22層では赤彩土器片もわずかに混入していた。図化した土器以外は磨滅した小片がほとんどで、流れ込みによるものである。

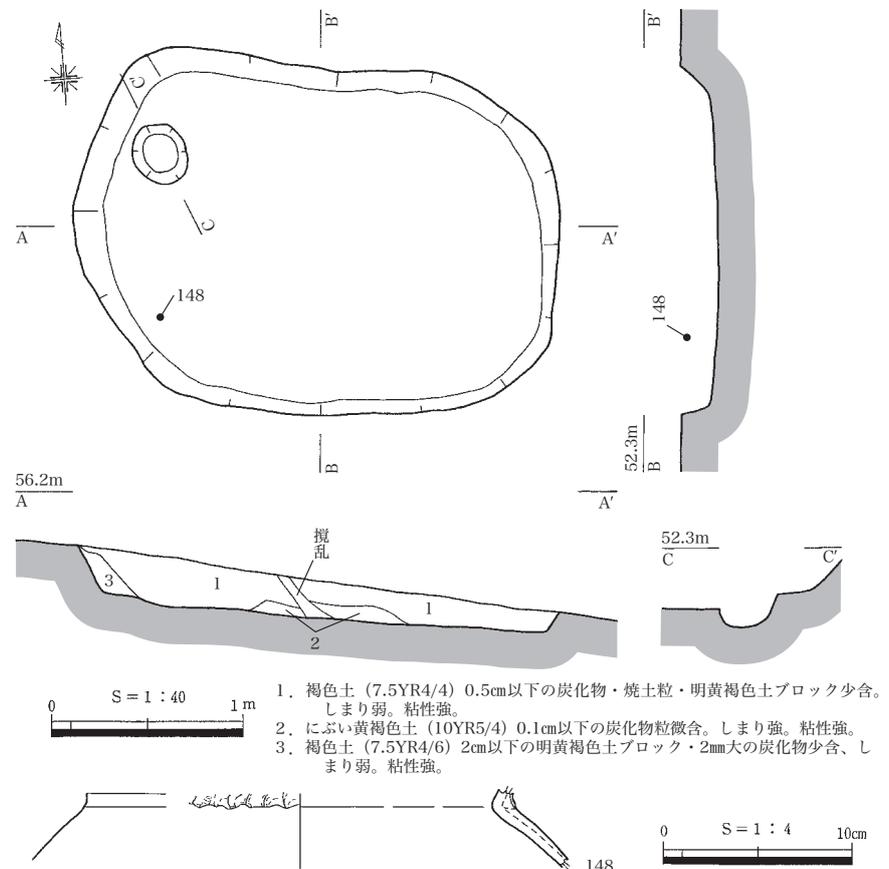
時期 本遺構の時期は、出土土器から弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。形態的に貯蔵穴であろう。

(高尾)

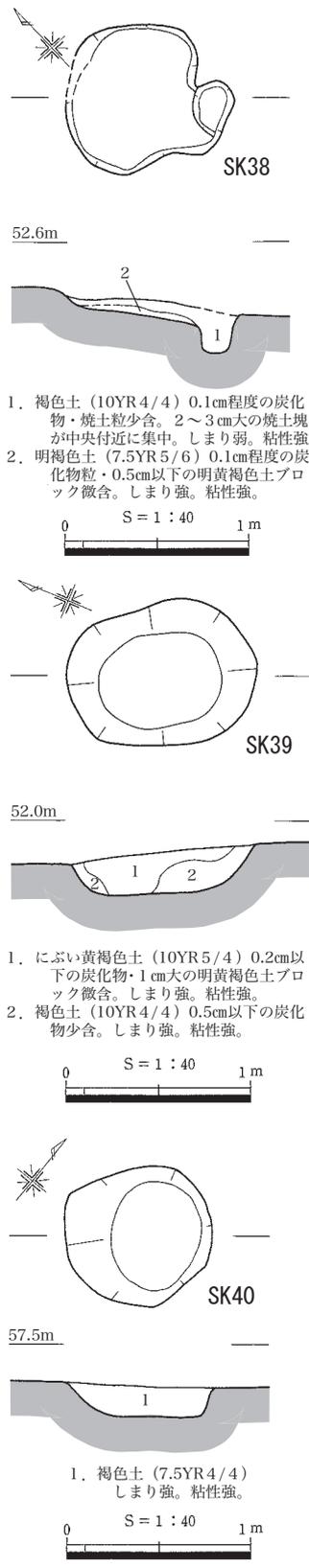


1. 褐色土 (10YR4/4) 0.5cm以下の炭化物粒多含。しまり弱。粘性強。
2. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり強。粘性強。
3. 褐色土 (10YR4/6) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒微含。しまり弱。粘性強。
4. 褐色土 (10YR4/4) 0.5cm以下の炭化物・焼土粒多含。土器少含。しまり弱。粘性強。
5. 褐色土 (10YR4/6) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒微含。しまり弱。粘性強。

第81図 SK36および出土遺物



第82図 SK37および出土遺物



第83図 SK38・39・40

SK34 (第79図、PL. 22・51～53)

位置 E10 グリッド、標高 56.4 m の平坦面に位置し、北側 2.1 m に SK35 が近接する。

規模と形態 平面形は長軸 3.1 m、短軸 1.6 m を測る不整隅丸長方形を呈す。壁面の立ち上がりは緩やかで、西壁の中位に三角形のテラスがあり、検出面からの底面までの深さは最大 45 cm を測る。底面には浅いピットを 2 基有すが柱穴ではない。

埋土と遺物の出土状況 埋土は 2 層に分かれ、両層とも焼土粒を含み土器を大量に包含していた。多くが小片で地山ブロックとともに出土することから、破碎した土器を土とともに廃棄したものと考えられる。

出土遺物 出土した土器のうち甕 138・139・141、壺 140、高坏 142 を図化した。138 は頸部に刺突文を連続して施す貼付突帯をめぐらせ、胴部最大径付近にかけて 3 条 1 単位の櫛描沈線による波状文・平行線で加飾し、外面全体を赤彩する。内面は底部付近まで細かいハケ目が残り丁寧に仕上げられている。全体形は復元できなかったが、肩が張るプロポーションの中～大型甕となろう。139 は頸部が隆起し刺突文を施しているが、この部分は口縁部と同一の粘土帯によって成形されたもので貼付突帯とは異なる。口縁部は逆 L 字状を呈して端部が下垂し、外面に 3 条の凹線をめぐらせる。142 は口縁部が内湾しながら短く立ち上がる浅い坏部をもつ高坏で、坏底部は円盤充填箇所を剥落している。

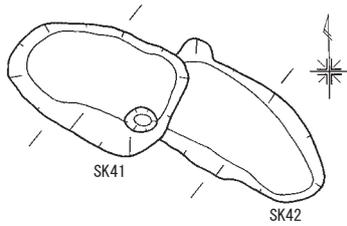
時期 本遺構の時期は出土土器より弥生時代中期後葉 (IV -1) と考える。
(高尾)

SK35 (第80図、PL. 22・52・53)

位置 E10 グリッド、標高 56.0 m の平坦面に位置し、南側 2.1 m に SK34、北側 2.1 m に SI6 が近接する。

規模と形態 平面形は長軸 3.5 m、短軸 2.5 m の隅丸方形を呈し、底面は平坦で長軸 3.1 m、短軸 1.8 m の隅丸長方形となる。浅い堅穴状の土坑で検出面からの深さは最大 32 cm を測る。底面には幅 5～16 cm、深さ 3 cm の溝がめぐるが断続的で、南側と北西側の 2 箇所を途切れる。またピットが 4 基検出され、P1～3 は直線的に並ぶとともに全体は T 字状の配置となるが、いずれも 10 cm 前後の深さしかないため通有の柱穴ではなく簡易な上屋を支える程度の柱穴と推測する。

埋土と遺物の出土状況 埋土は焼土粒と地山ブロックを含む褐色土を主体として多量の遺物を伴っており、底面および底面付近から甕 143・144 が出土した。他は埋土中の遺物である。143 は口縁部に 3 条の凹線をめぐらせる甕で、内面は下半をヘラケズリ、上半を指押さえによって仕上げる。144 の凹線は上端部のみで刻目を主体とする。146 は高坏脚部で、外面に貫通しない三角形透孔と凹線を 9 条施し、あまり拡張しない裾部にも 2 条の凹線をめぐらせる。S66 はサヌ



第86図 SK41・42切合模式図

カイト製の石鎌である。

時期 本遺構の時期は弥生時代中期後葉 (IV-1) と考える。(高尾)

SK36 (第81図、文中写真8、PL. 23・52)

位置 E5 グリッド、谷の開口部にあたる標高 52.1 m の傾斜変換点付近に位置し、北西 1.2 m に SK38 が近接する。

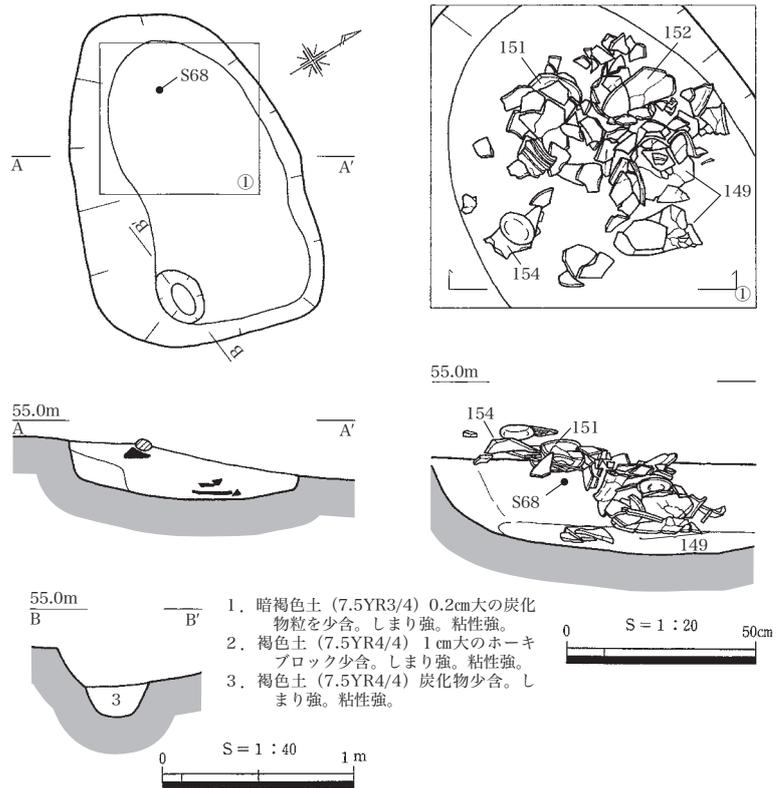
規模と形態 上縁部の平面形は長軸 85 cm、短軸 62 cm の楕円形を呈す。底部の平面形は長軸 100 cm、短軸 75 cm の楕円形で上縁部よりも広く、断面形はフラスコ状となる。

遺物と埋土の出土状況 自然堆積により埋没しており、下層にはいずれも炭化物・焼土粒を含む。東側壁際に 24 × 6 cm の薄い炭化材も出土している。

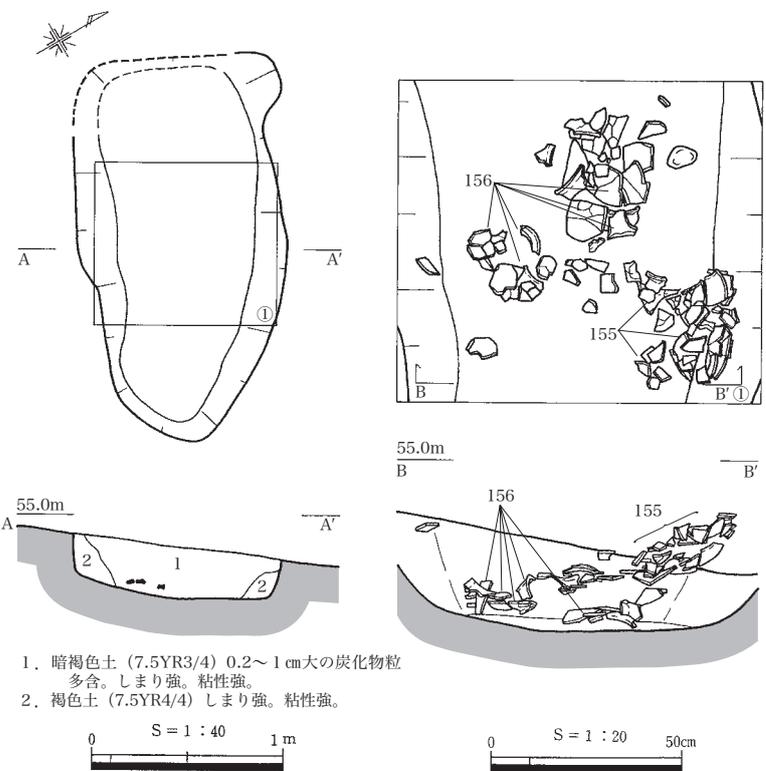
出土遺物 遺物はわずかで、すべて埋土中から出土しており、甕 147 と敲石 S67 を図化した。S67 は扁平な楕円礫の側面の一部を使用している。

時期 本遺構は形態的な特徴と出土土器から、弥生時代中期後葉 (IV-1) の貯蔵穴と考えられる。

(高尾)



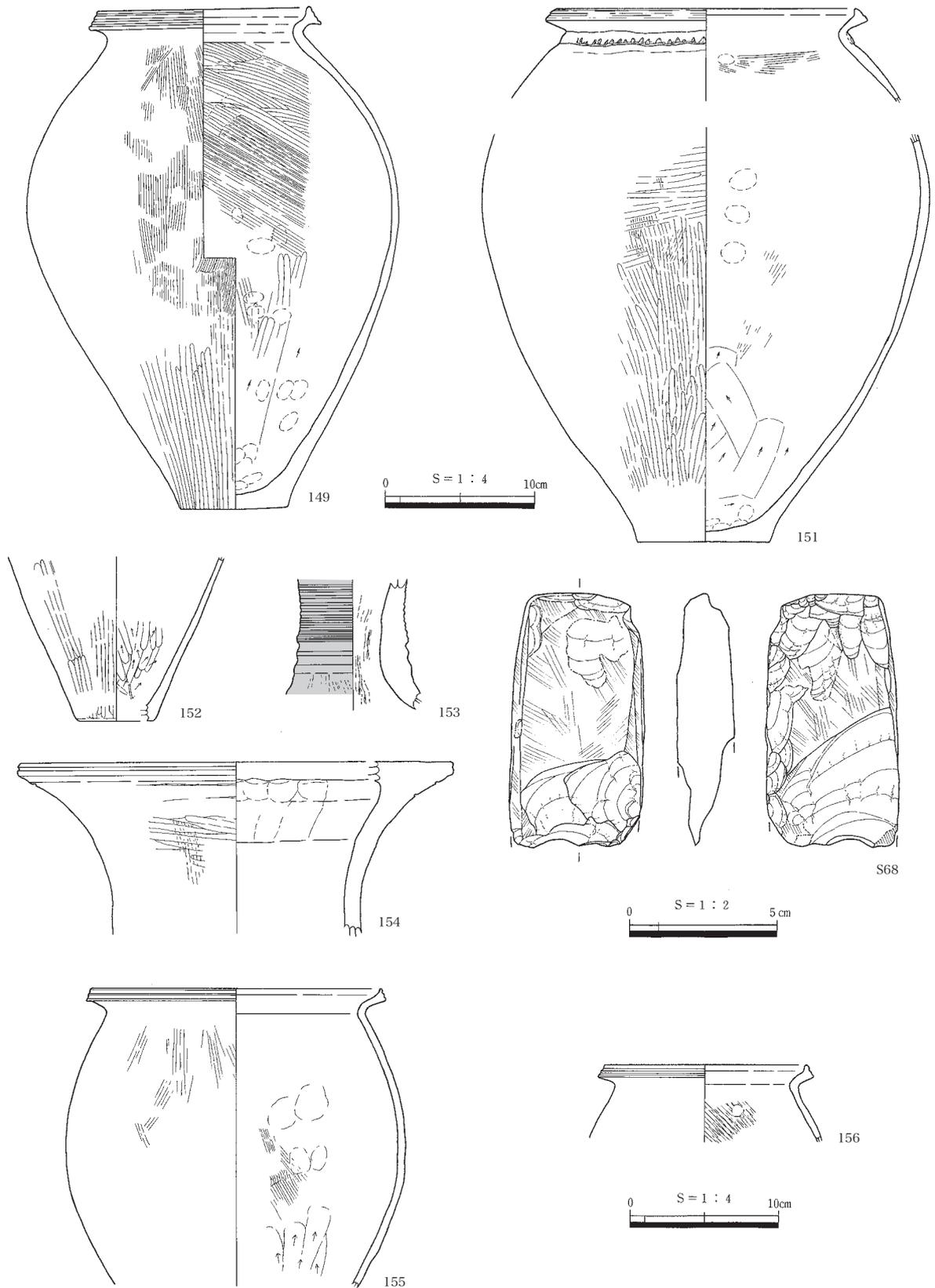
第84図 SK41



第85図 SK42

SK37 (第82図、PL. 23・52)

位置 E6 グリッド、谷の開口部にあたる標高 52.1 m の傾斜変換点付近に位置する。



第87図 SK41・42出土遺物

規模と形態 平面形は長軸 2.6 m、短軸 1.8 m の不整隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは最大で 31 cm を測る。西壁付近の底面に浅いピットを有す。本土坑に伴うものであろうが、柱穴ではない。

埋土と遺物の出土状況 自然堆積の 1 層を主体とし、流れ込みとみられる少量の遺物を伴う。いずれも細片で時期が判別できるものとして甕頸部 148 を図化した。

時期 出土土器から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。(高尾)

SK38 (第83図、PL.23)

位置 E5グリッド、谷の開口部にあたる標高52.3mの傾斜変換点付近に位置し、南東1.2mにSK36が近接する。

規模と形態 平面形は長軸92cm、短軸86cmのいびつな楕円形を呈す。中央部に焼土塊が集中するが被熱痕跡はなく、この場に廃棄されたものであると考える。

時期 遺物が出土しておらず時期は不明である。(高尾)

SK39 (第83図、PL.23)

位置 F5グリッド、標高52.3mの平坦面に位置し、北西2.6mにSK12がある。

規模と形態 平面形は長軸1.0m、短軸0.8mの楕円形で、検出面からの深さは最大22cmを測る。椀形を呈す土坑で、埋土は炭化物・地山ブロックを含む褐色土を主体とし、自然堆積によって埋没している。

時期 遺物が出土しておらず時期は不明である。(高尾)

SK40 (第83図、PL.23)

位置 E12グリッド、標高約57.5mの平坦地で調査区最高所付近にある。SX12の北側、SK27の南西側に位置する。

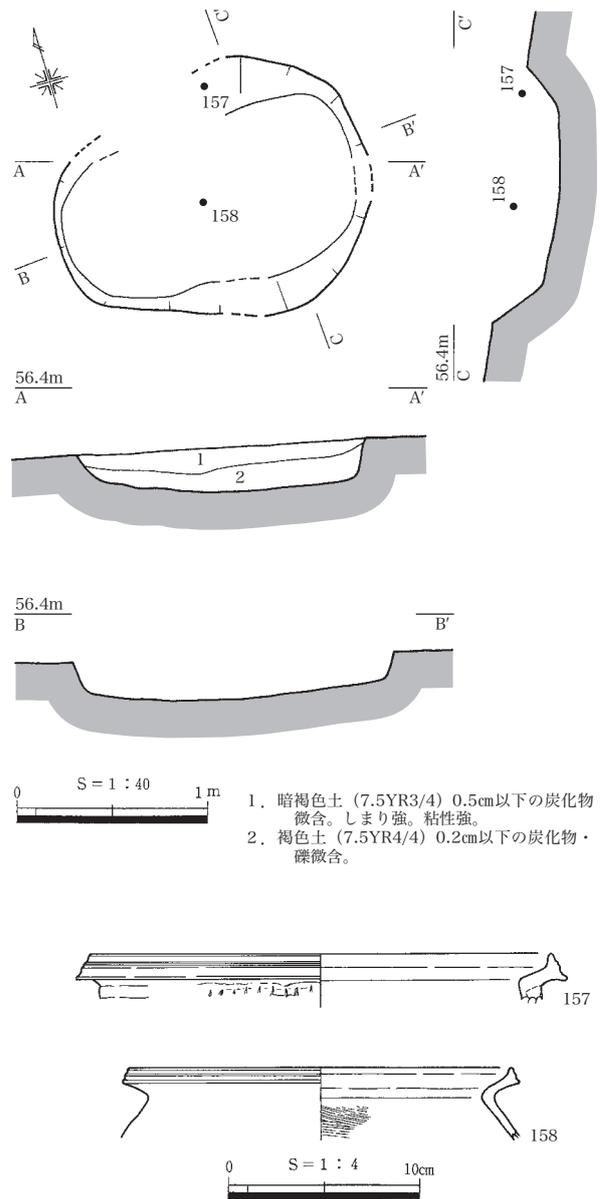
規模と形態 IV層上面において、しまりのよい褐色土の不整円形プランを検出した。検出規模は径80cmで、検出面から底面までの深さは8cmである。底面はほぼ平坦になっている。

時期 遺物は出土しておらず時期、用途は不明である。(浅田)

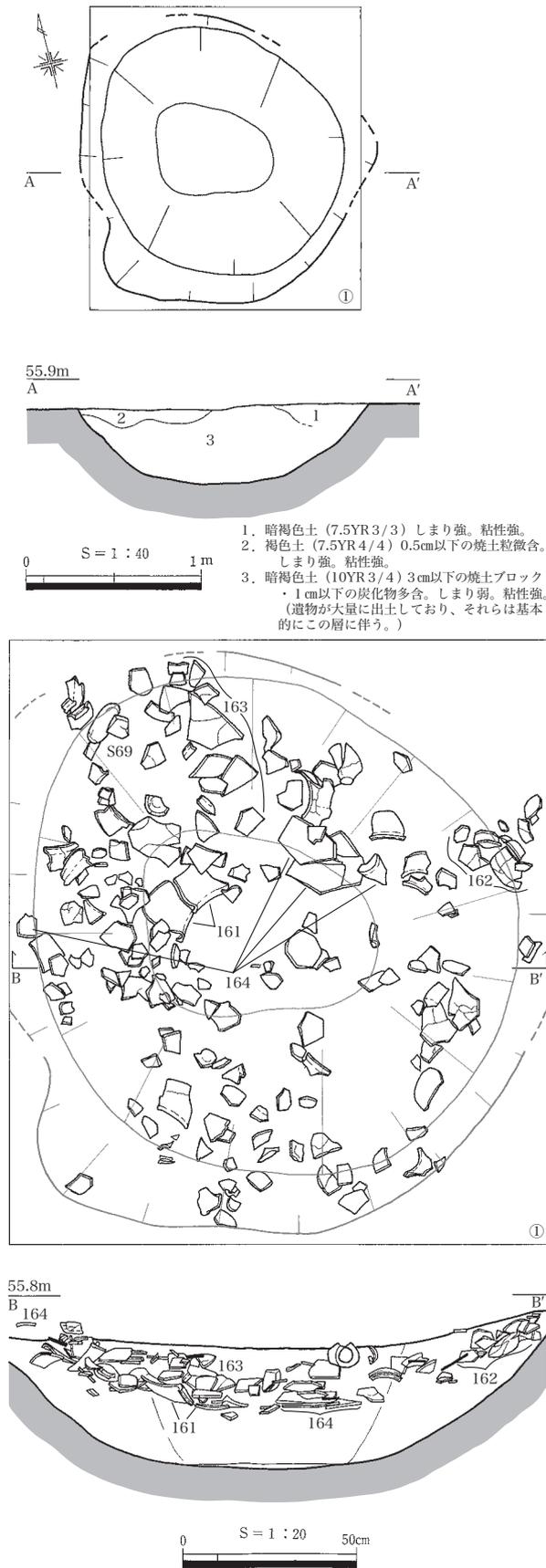
SK41 (第84図、PL.23)

位置 D8グリッド、標高約54.8mの北側の谷部に向かって緩やかに傾斜する緩斜面地にある。SS2の北東側に位置する。SK42と切合関係にあり、SK42を切る。

規模と形態 III層上面において、炭化物粒、焼土ブロックを含む暗褐色土の楕円形プランを検出した。検出規模は長軸1.77m、短軸1.21mである。検出面から底面までの深さは南側で最も深く26cmを測り、北側では15cmと浅い。南西側底面上でP1を検出した。平面形は楕円を呈し、その大きさは長



第88図 SK43および出土遺物



第89図 SK44

軸 35 cm、短軸 24 cm で、底面からの深さは約 13 cm である。

出土遺物 遺物は西側の掘り込み肩口から底面に向かって流れ込むように出土しており、遺物の出土状況から、遺構が廃棄された後に中へ投棄されたものと考えられる。149～152 は甕である。149 は口縁部に 3 条凹線が施され、胴部内面下半は上方向のへラケズリ後ミガキが施される。150 は口縁部に 1 条以上の凹線を持ち、頸部に刻目貼付突帯後にミガキが施される。151、152 はともに胴部から底部にかけてのもので、内面は胴下部に上方向のへラケズリが見られる。153 は高坏の脚部である。11 条以上の櫛描文が施され、その下部に 2 条の凹線が施される。内面にはシボリ痕が残る。154 は台形土器である。口縁部に 1 条の凹線が施される。S68 は扁平片刃石斧で、刃部付近は表裏面とも剥落している。

時期 出土遺物から、弥生時代中期後葉 (IV -1) である。用途については不明である。

(浅田)

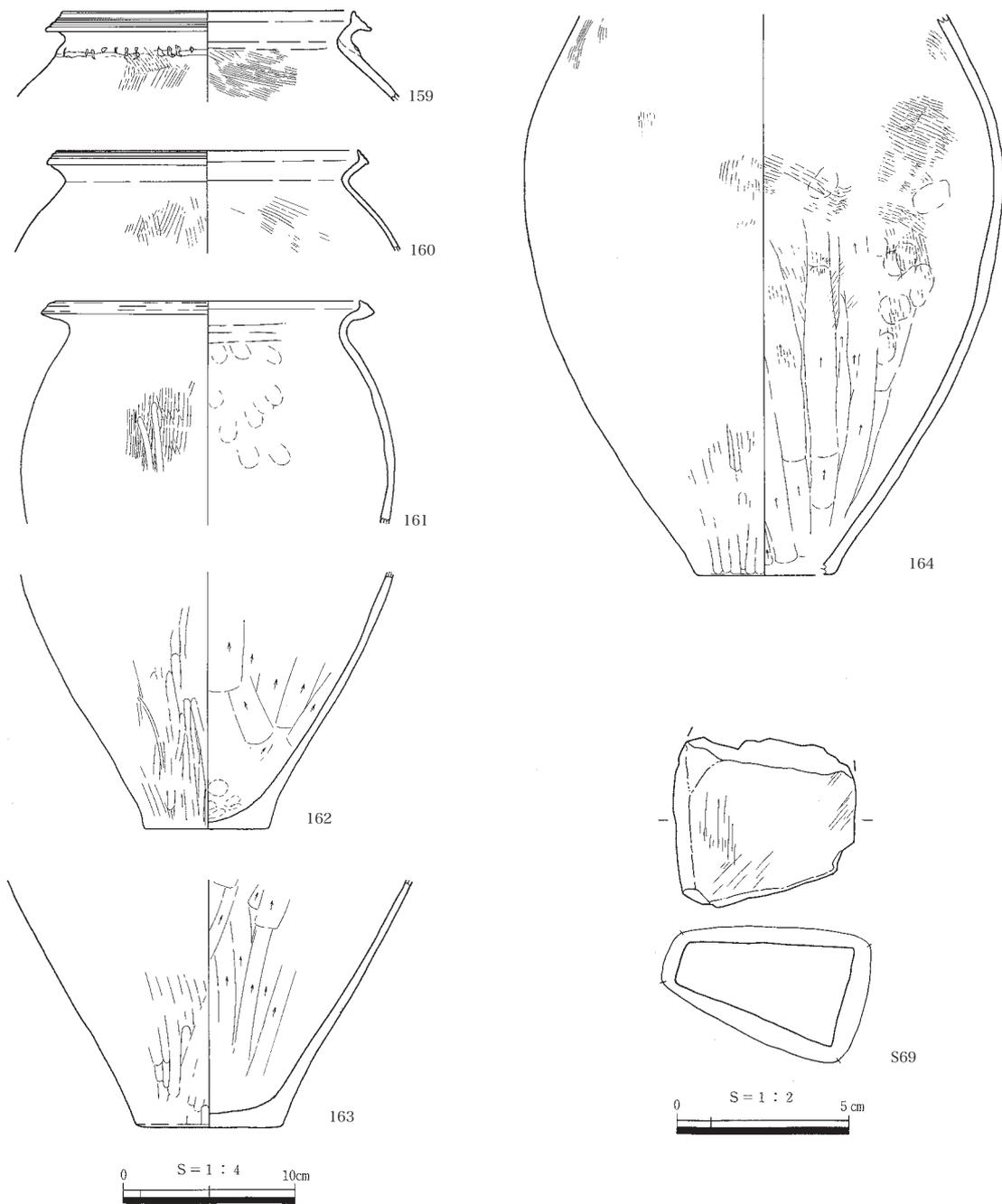
SK42 (第 85 図、PL. 24)

位置 D8～9 グリッド、標高約 54.8 m の北側谷部に向かって緩やかに傾斜する緩斜面地にある。SK41 と切合関係にあり、SK42 が切られる。

規模と形態 SK41 と同様Ⅲ層上面において検出した。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸 2.0 m、短軸 1.1 m である。検出面から底面までの深さは 27 cm である。

出土遺物 遺物は多量の土器片が北側壁面肩口から底面に向かって流れ込むように出土している。SK41 と同様に遺構が廃棄された後に中へ投棄されたものと考えられる。これらのうち、ある程度の大きさに接合でき、図化できたものは 2 点である。155、156 は甕で、ともに口縁部に凹線が施される。IV -1 様式の様相を呈するものである。

時期 出土遺物から、弥生時代中期後葉である。用途については不明である。(浅田)



第90図 SK44出土遺物

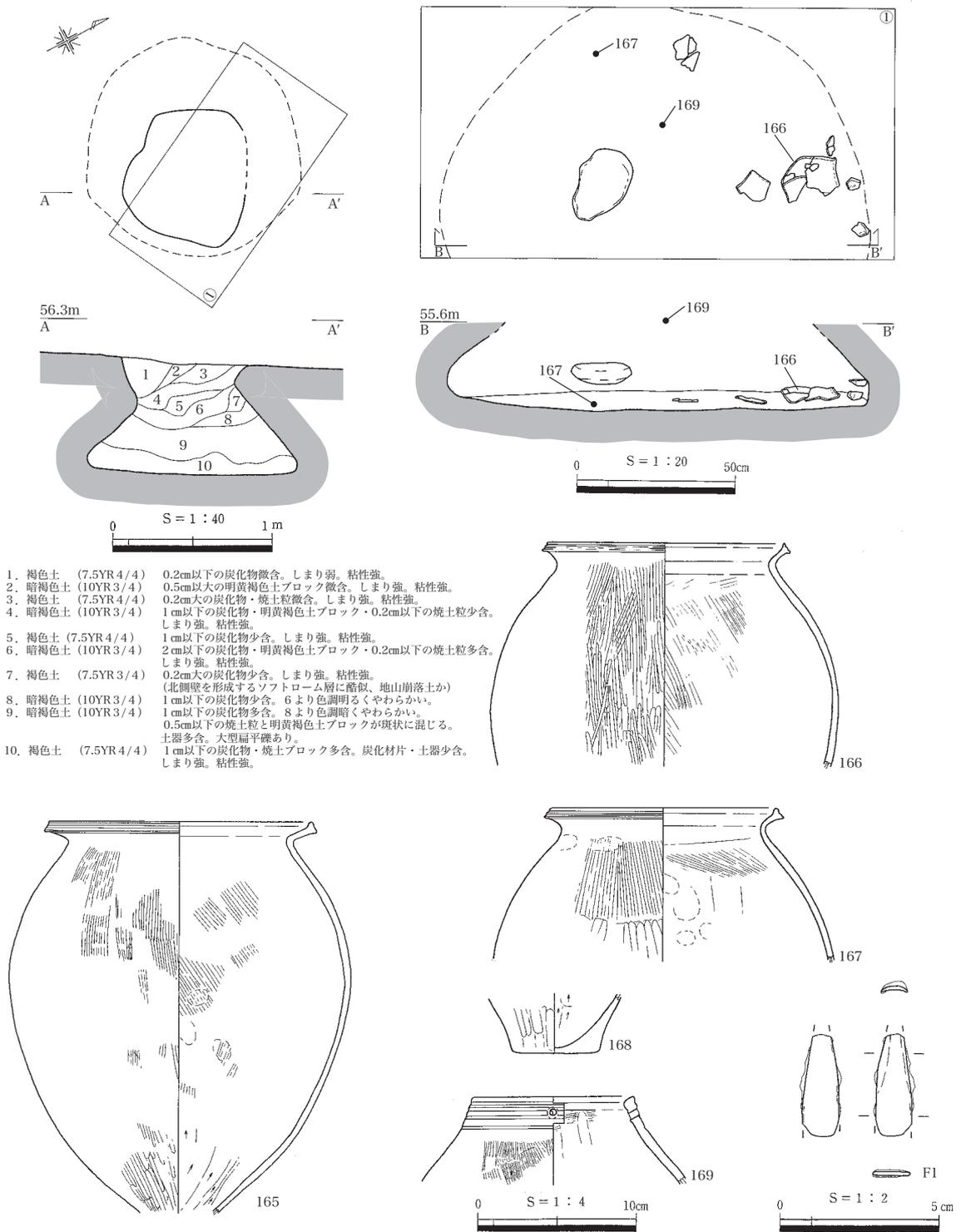
SK43 (第88図、PL. 24・54)

位置 E9 グリッド、標高 55.0 m の緩斜面に位置する。南側に SI6 が隣接し、SK52 を切る。
規模と形態 平面形は長軸 1.7 m、短軸 1.4 m の不整楕円形を呈し、検出面からの深さは最大 22 cm を測る。皿状の土坑で、埋土はレンズ状の堆積を示し自然堆積したものと考える。上方に多量の土器片が集中しておりプランも不明確だったため、それらを取り上げた



写真11 SK44完掘状況 (南東から)

第2節 遺構の調査



第91図 SK45および出土遺物

後全体を掘り下げて検出した。

出土遺物 本遺構に伴うとみられる土器 157・158 を図化した。

時期 本遺構の時期は弥生時代中期後葉 (IV -1) と考える。

(高尾)

SK44 (第 89 図、写真 11、PL. 25)

位置 D9 グリッド、標高約 55.7 m の緩斜面地に位置する。SI9 の南東側、SI10 の南西側にある。

調査の経過 III層上面において、しまりの弱い暗褐色土の不整円形プランを検出した。トレンチを設

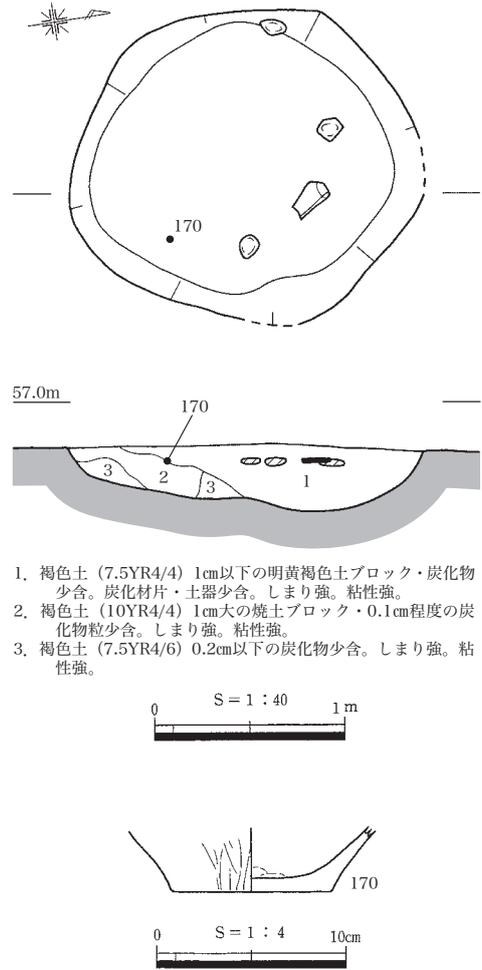
定して掘り下げたところ、椀状の掘り方を持ち、埋土中位から底面にかけて多量の土器が堆積することを確認した。

規模と形態 平面形は径 1.7 m を測る不整形円形を呈し、検出面から底面までの深さは約 54 cm である。

埋土と遺物の出土状況 遺物は土器片が主で、3層中から出土している。また3層は土器片の他にも、3 cm 大の焼土ブロックや 1 cm 大の炭化物を多量に含んでいる。遺物はそのほとんどが壁面肩口から、土坑中央に向かって落ち込むように堆積している。図化までは至っていないが、底面付近でも多量の土器が出土している。土坑が廃棄された後、窪地状になったところへ投棄されたものと考えられる。土器は遺存状況が悪く、一固体分を完形に復元できるものはなかった。

出土遺物 159～164 は甕である。159～161 は口縁部に 2～3 条の凹線が施される。また 161 は口縁を形成する粘土帯の下端を刺突し、指頭圧痕貼付突帯状を呈す。162～164 は胴部から底部にかけてのもので、いずれも内面下半部に上方向のヘラケズリが見られる。164 はヘラケズリが胴部最大径付近まで及んでいる。S69 は砥石である。

時期 遺構の時期は、出土遺物が IV-1～2 様式の様相を呈することから、弥生時代中期後葉と考えられる。用途は不明である。
(浅田)



1. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の明黄褐色土ブロック・炭化物少含。炭化材片・土器少含。しまり強。粘性強。
2. 褐色土 (10YR4/4) 1cm大の焼土ブロック・0.1cm程度の炭化物粒少含。しまり強。粘性強。
3. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.2cm以下の炭化物少含。しまり強。粘性強。

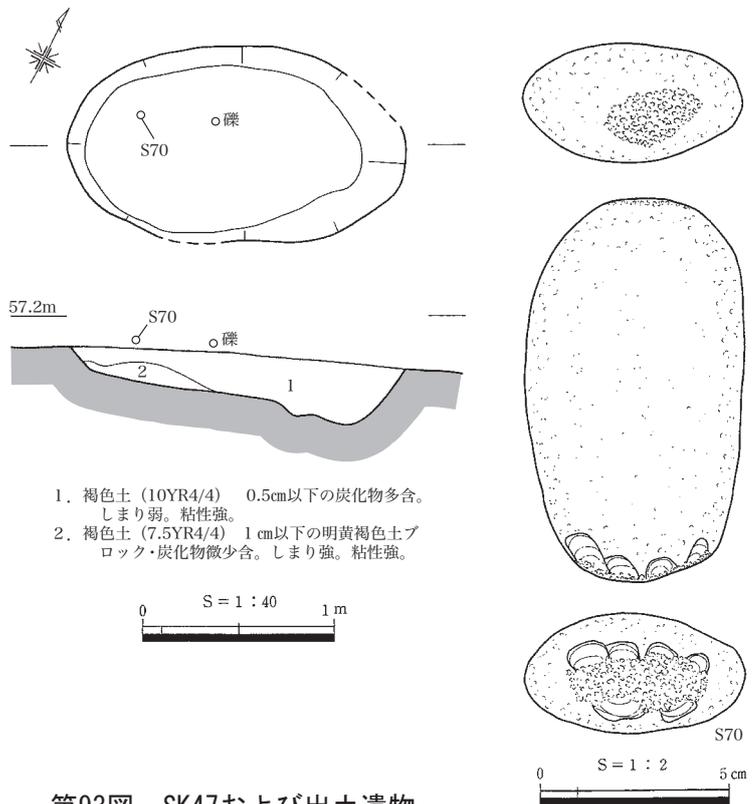
第92図 SK46および出土遺物

SK45 (第91図、PL. 24・54・56・62)

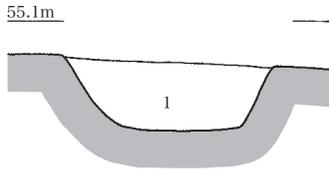
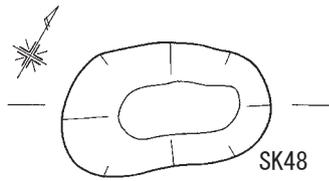
位置 D10 グリッド、標高 56.0 m の平坦面に位置し、北側 1.5 m に SK44 が近接する。

規模と形態 平面形は上縁部が長軸 90 cm、短軸 80 cm の不整形隅丸方形、底部が径 1.4 m の不整形円形を呈す。上縁部よりも底部がかなり広いフラスコ状となる土坑で形態的な特徴から貯蔵穴とみられ、検出面からの深さは最大 70 cm を測る。

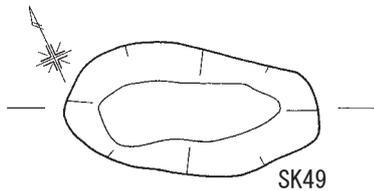
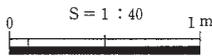
埋土と遺物の出土状況 埋土は 10 層に分けられ、最上層と壁体崩落土とみられる 7 層以外は焼土粒と炭化物を含む土によって埋没している。特に下層の 9・10 層は焼土塊、炭化材碎片とともに土器や礫も多く含んでおり、地山ブロックも少量混じ



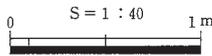
第93図 SK47および出土遺物



1. 褐色土 (7.5YR4/4) しまり強。粘性強。



1. 褐色土 (7.5YR4/6) しまり強。



第94図 SK48・49

ることから、本遺構は廃棄土坑として利用され埋まったと推測される。
出土遺物 最下層を中心に甕 165～168、無頸壺 169 が出土した。166・167 は底面直上、165・169 は9層から出土している。165～167ともあまり拡張しない口縁に2～3条の凹線を入れる。外面は上半ハケ・下半ヘラミガキ、内面は上半ハケで調整する点で共通しており、頸部に貼付突帯はみられない。169は蓋留の円孔を口縁部に入れる。鉋F1は6層から出土しており、作業部にはわずかな裏すきを有す。

時期 出土土器より、本遺構は弥生時代中期後葉 (IV -1) に廃絶・埋没したと考える。 (高尾)

SK46 (第92図、PL. 24)

位置 D・E11 グリッドにまたがり、標高 56.8 m の平坦面に位置し、南西 1 m に SK47 が隣接する。

規模と形態 平面形は長軸 1.9 m、短軸 1.7 m の不整円形を呈し、検出面からの深さは最大 35 cm を測る。埋土は地山小ブロックの混じる褐色土を主体とする。

埋土と遺物の出土状況 検出面上で少量の土器片とともに円礫・板石が出土したが、埋土中に遺物は含まれない。

時期 本遺構に伴うとみられる壺底部 170 などから、時期は弥生時代中期後葉と考える。 (高尾)

SK47 (第93図、PL. 25)

位置 E11 グリッド、標高 57.0 m の平坦面に位置し、北東 1 m に SK46、西側 2.4 m に SK29 が近接する。

規模と形態 平面形は長軸 1.8 m、短軸 1.0 m の楕円形で、検出面からの深さは 31 cm を測る。

埋土と遺物の出土状況 埋土は炭化物を多く含む褐色土を主体とする。検出面付近で遺物が少量出土したが、土器は小片ばかりで敲石 S70 以外は図化できなかった。

時期 出土遺物および埋土の状況より、本遺構の時期は弥生時代中期後葉である可能性が高い。

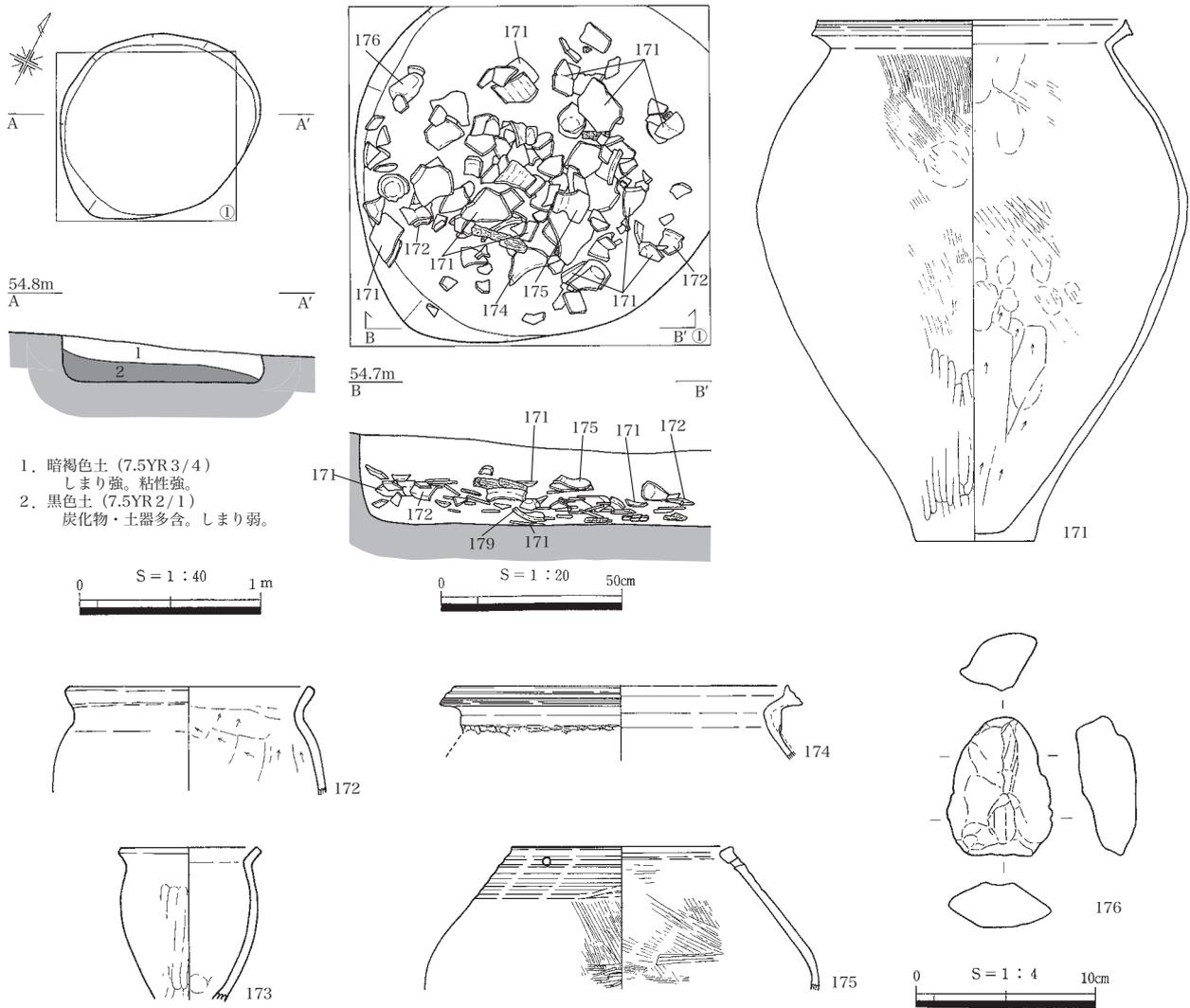
(高尾)

SK48 (第94図、PL. 25)

位置 C9 グリッド、標高約 54.8 m の北東側に向かって緩やかに傾斜する緩斜面地あり、SK49 の南側に位置する。

規模と形態 III層上面において、しまりのよい褐色土の楕円形プランを検出した。検出規模は長軸 1.1 m、短軸 0.7 m で、検出面から底面までの深さは南西側で最も深く 37 cm である。壁面は外側に傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平坦になっている。

時期 遺物が出土していないため詳細な時期については不明だが、周囲の遺構の状況から、弥生時代中期後葉と思われる。用途については不明である。 (浅田)



第95図 SK50および出土遺物

SK49 (第94図、PL. 27)

位置 C9 グリッド、標高約 54.6 m の北東側になだらかに傾斜する緩斜面地にあり、SK48 の北側に位置する。

調査の経過 III層上面でしまりのよい褐色土の楕円形プランを検出した。

規模と形態 検出規模は長軸 1.3 m、短軸 0.7 m、検出面から底面までの深さは 13 cm である。底面はほぼ平坦で、掘り方断面は皿状を呈する。

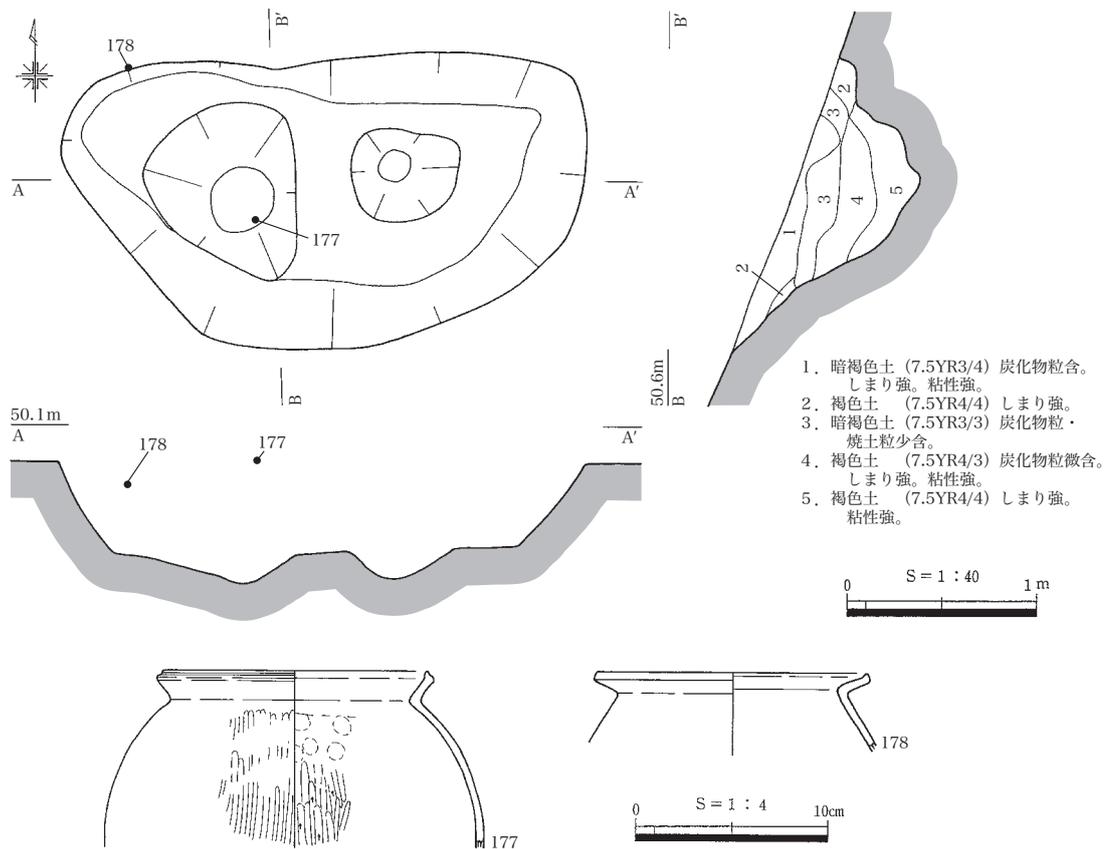
時期 遺物が出土していないため時期についての詳細は不明であるが、周囲の遺構の状況から弥生時代中期後葉と思われる。用途は不明である。(浅田)

SK50 (第95図、PL. 26、27)

位置 C8 グリッド、標高約 45.6 m の緩斜面地に位置する。SK41 の東側、SK49 の北西側にある。

規模と形態 III層上面で、1 cm 前後の炭化物や焼土粒を多く含む暗褐色土の円形プランを検出した。検出規模は径約 1.1 m、検出面から底面までの深さは、南側で最も深く、最大 34 cm である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦になっている。

埋土と遺物の出土状況 埋土は暗褐色土と黒色土の 2 層からなり、このうち 2 層とした黒色土は炭化



第96図 SK51および出土遺物

物と土器片を多量に含む層である。下層の2層に多量の炭化物が含まれるものの、土坑の壁面、および底面には被熱の痕跡は認められなかった。多量の土器が出土したとはいえ、一個体分を復元できるものは少なかった。以上のことから、SK44と同様に他の場所で破壊された土器が、使用されなくなった土坑に炭化物と共に廃棄されたものであると考えた。

土器片と共に多量の炭化物がみられること、出土している土器が煮炊きに使用されたと考えられる甕が主であることから、儀式的な共同炊餐等に用いた土器を破碎し、燃料材の燃え滓を土器片と共に投棄したものと推察する。ただ、強い被熱によって色調が白色化し、外面が剥離した土器片も多く見られ、通常の炊餐行為とは異なる使用法も想定される。

出土遺物 171はわずかに拡張した口縁端部に2条の凹線を施す甕で、胴部2/3の位置に最大径を持つ。内面は底部からヘラケズリで調整しているが、胴部最大径には及ばない。174は頸部に刺突を入れた突帯を強くナデつけて貼り付ける甕で、強い被熱によって白色化している。176は粘土塊で、横断面は凸レンズ状を呈し部分的にナデたような溝状の凹みを有す。性格・用途は不明である。

時期 出土遺物から、弥生時代中期後葉(IV-1)である。(浅田)

SK51 (第96図、PL. 27)

位置 C6グリッド、標高約50mの北側に向かって傾斜する谷部に位置する。

規模と形態 III層上面にて、炭化物粒を含む暗褐色土の不整楕円形プランを検出した。検出規模は長軸2.8m、短軸1.5m、検出面から底面までの深さは約60cmである。底面にはピット状に落ち込む部分が2か所あり、東西方向での掘り方断面は「W」字状を呈し、南北方向では播鉢状を呈する。

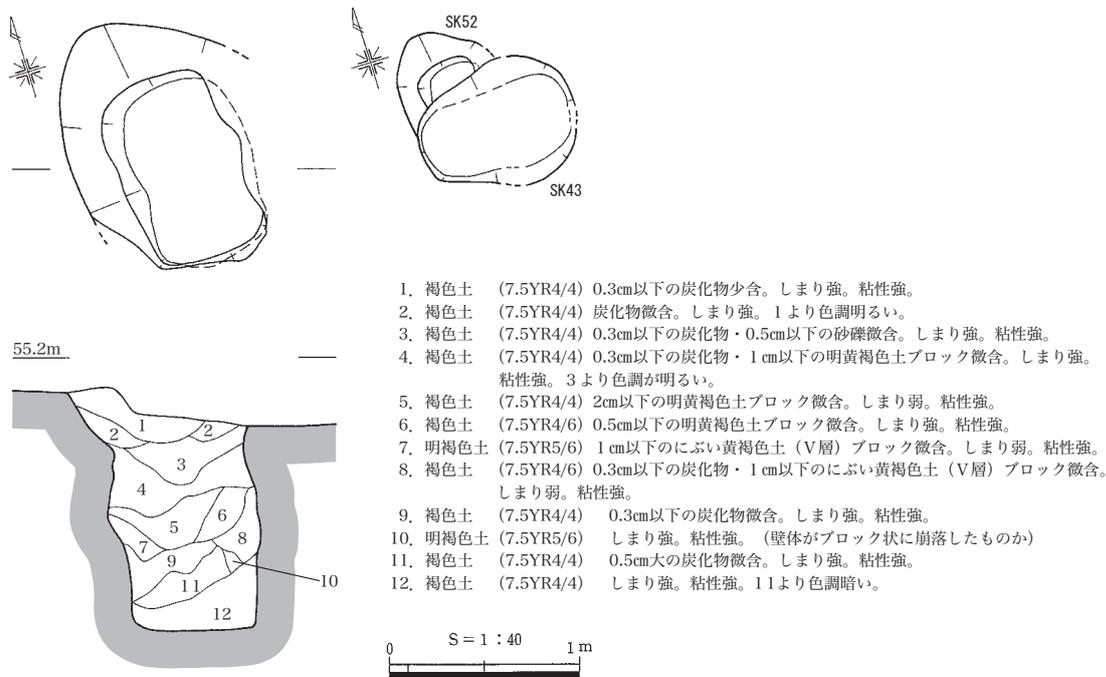
遺物と埋土の状況 土層断面の観察から、埋土はレンズ状の堆積を呈しており、自然堆積による埋没である。遺物は検出面から1層中に限られることから、遺構がほぼ埋没を終えわずかに窪地になっている部分へ流入したものであると思われる。

出土遺物 177、178は甕である。これらはその特徴からⅢ-3様式、弥生時代中期中葉のものである。

時期 遺構の時期は、出土遺物および出土層位から弥生時代中期中葉以降に埋没したものであると思われる。

用途は不明である。

(浅田)



第97図 SK52および模式図

SK52 (第97図、PL. 27)

位置 E9グリッド、標高55.0mの緩斜面に位置する。南側にSI6が隣接し、SK43に切られる。

規模と形態 平面形は上縁部が長軸1.5m以上、短軸1.2mの不整楕円形と推測され、底部が長軸0.9m、短軸0.6mの隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは最大1.26mを測り、断面形は中位付近が膨らむが概ね長方形となる。

遺物と埋土の状況 埋土は12層に分けられ、上層は炭化物を比較的多く含む層が堆積し、中層～下層にかけては炭化物以外に壁体となるIV～VI層の崩落に由来するブロックを含む層が堆積する。壁体崩落土を主とする層はしまりが無い。本遺構は壁体の崩落を繰り返しながら自然堆積によって埋没したと理解される。

時期 遺物は出土しておらず時期不明であるが、形態的な特徴から落とし穴もしくは貯蔵穴の可能性が考えられる。

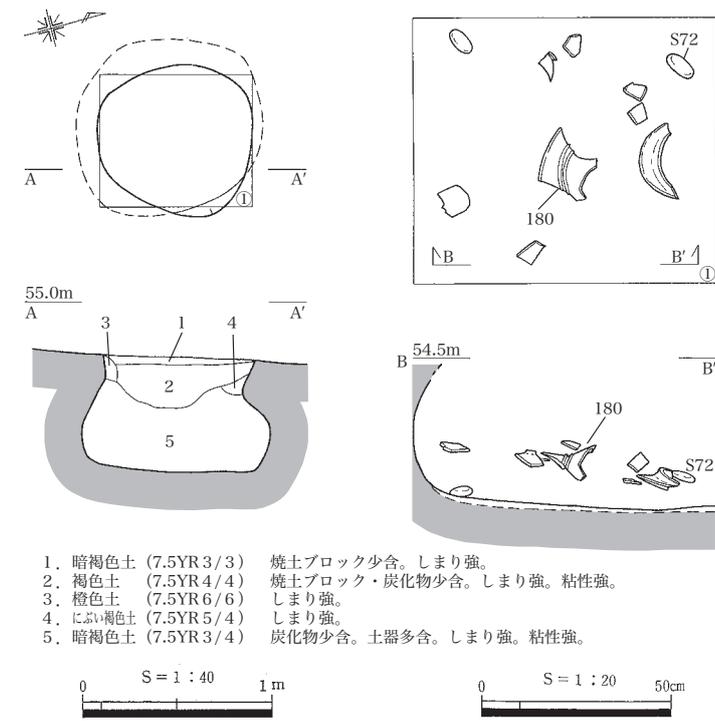
(高尾)

SK53 (第98図、写真8、PL. 27)

位置 C9グリッド、標高約54.7mの緩斜面に位置する。SK54の北東側に隣接する。

調査の経過 C9～10グリッドは遺構が希薄な部分となっており、また根の攪乱が多く、Ⅲ層上面において遺構検出が明瞭にできなかった。そこでサブトレンチを設定し遺構の有無を確認したところ、

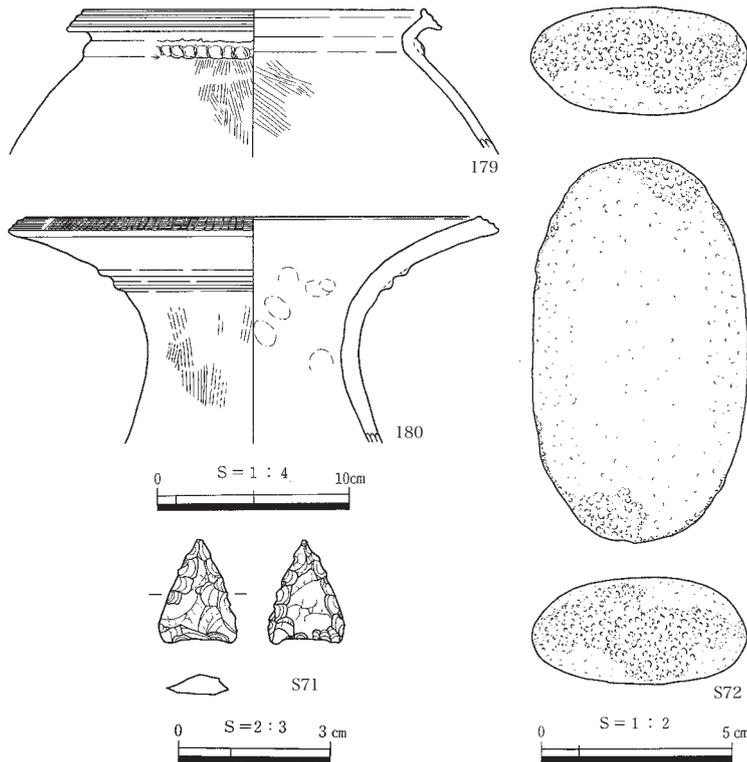
第2節 遺構の調査



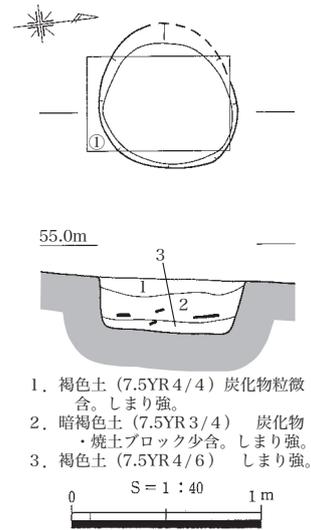
- 1. 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 焼土ブロック少含。しまり強。
- 2. 褐色土 (7.5YR 4/4) 焼土ブロック・炭化物少含。しまり強。粘性強。
- 3. 橙色土 (7.5YR 6/6) しまり強。
- 4. にぶい褐色土 (7.5YR 5/4) しまり強。
- 5. 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 炭化物少含。土器多含。しまり強。粘性強。

0 S = 1 : 40 1 m

0 S = 1 : 20 50 cm

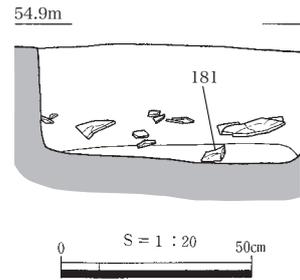
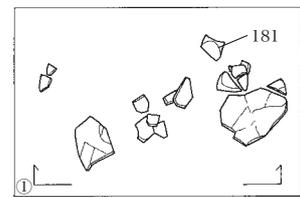


第98図 SK53および出土遺物

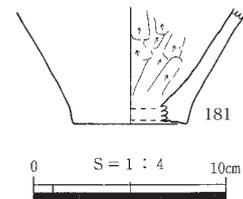


- 1. 褐色土 (7.5YR 4/4) 炭化物粒微含。しまり強。
- 2. 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 炭化物・焼土ブロック少含。しまり強。
- 3. 褐色土 (7.5YR 4/6) しまり強。

0 S = 1 : 40 1 m



0 S = 1 : 20 50 cm



0 S = 1 : 4 10 cm

第99図 SK54および出土遺物

SK53、54 が存在することが判明した。トレンチ壁面の観察からⅢ層上面からの掘り込みであることを確認した。

規模と形態 平面形は円形を呈する。検出規模は径 0.8 m で、検出面から底面までの深さ 0.6 m である。底面はほぼ平坦になっている。掘り方断面はフラスコ状を呈し、胴部最大形は約 1 m である。

埋土と遺物の出土状況 遺物は主に 5 層から床面にかけて出土している。5 層は不用となった土器等

の廃棄に伴う堆積で、一度に埋まった可能性が高い。

出土遺物 179は甕で口縁部に3条の凹線が施され、頸部に指頭圧痕貼付突帯を持つ。180は広口壺である。口縁部に3条の凹線後、刻目が施される。頸部に2条の断面三角形を呈す低い貼付突帯を持ち、突帯間を凹線状にナデている。S71はサヌカイト製の凹基式石鏃、S72は敲石である。

時期 遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式のものであることから弥生時代中期後葉である。用途は、その形態から貯蔵穴と思われる。(浅田)

SK54 (第99図、PL.27)

位置 C9グリッド、標高約54.8mの緩斜面に位置する。SK53の南西側に隣接する。

調査の経過 SK53同様、トレンチにより存在を確認した。Ⅲ層上面からの掘り込みである。

規模と形態 平面形は円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦になっている。検出規模は径0.8m、掘り込み面から底面までの深さは28cmである。底面はほぼ平坦になっている。

遺物と埋土の状況 遺物は主に2～3層、底面上から出土している。甕もしくは壺と思われる土器片が出土している。

出土遺物 181は甕もしくは壺の底部である。床面上からの出土である。181を含め、出土した土器片は一個体分に復元できるものは無かったことから、土坑を使用しなくなってから破片となったものを投げ入れたものと思われる。

時期 遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。用途については不明である。(浅田)

(4) 木棺墓・土坑墓

本遺跡では、形態的特徴および埋土の状況などから木棺墓あるいは土坑墓と考えられる遺構を15基検出した。木棺墓・土坑墓は尾根北側の鞍部付近と南側の調査区最高所にあたる平坦面付近の大きく2箇所小群を形成しており、特に南側の一群は数的にも多く、形態、規模、供献土器の有無等多様なあり方を示す(第100図)。

SX1 (第101図、巻頭図版8、PL.29)

位置 C3グリッド、標高50.0～50.2mの東側斜面部に位置する。

調査の経過 斜面部でⅢ層上面の精査中に、いびつで扁平な礫とその下で長さ約3mにわたる褐色土の広がりを確認した。斜面に直交する方向でサブトレンチ(B-B')をいれたところ木棺痕跡と思われる5層を検出したため、木棺墓と判断して調査をすすめた。

規模と形態 墓壇の主軸は等高線に沿って北東方向N-29°-Eを向く。全体形は、斜面の低位にあたる東側を除いて二段掘り状となるため上段部は長軸2.9m、短軸1.2mのいびつな隅丸長方形を呈し、斜面西側の最高所から底面までの高低差は最大で60cmとなる。墓壇上面付近で26×26cmの扁平な礫が出土しており、標石と考えられる。掘り方の下段部分は長軸2.3m、短軸0.96mの隅丸長方形で、底面までの深さは26cmを測る。底面は長軸2.2m、短軸0.6mを測り、南西壁際に長さ50cm、幅15cm、深さ6cm、北東壁際に長さ48cm、幅15cm、深さ11cmの小口穴が掘り込まれ、わずかに南西側が広い。標石位置および底面形態から埋葬頭位は南西方向と考えられる。

埋土と遺物の出土状況 墓壇は1層によって被覆されており、墓壇内には地山に近似した2～6層が堆積していた。5層は壁面に平行する厚さ4cmのしまりの悪い層で、小口穴内にも垂直に入り込むことから、木棺痕跡であろう。4層は両小口穴と東西壁面に囲まれた範囲の床面上に4～5cmの厚さで堆積する層で、棺床もしくは倒伏した東の側板が土に置換したものと推測する。6層はⅥ層ブロックを含み粘性・しまりともに強い層で、木棺の裏込め土と考えられる。3層はⅣ・Ⅵ層ブロックを少量含みしまりも悪く、棺上に被せた墓壇掘削時の土が棺の腐朽に伴って崩落した堆積であろう。小口穴および埋土の状況からすれば、木棺は長さ190cm、幅46cm前後に推定復元される。埋土上層から甕182のほか流れ込みとみられる土器片が少量出土した。

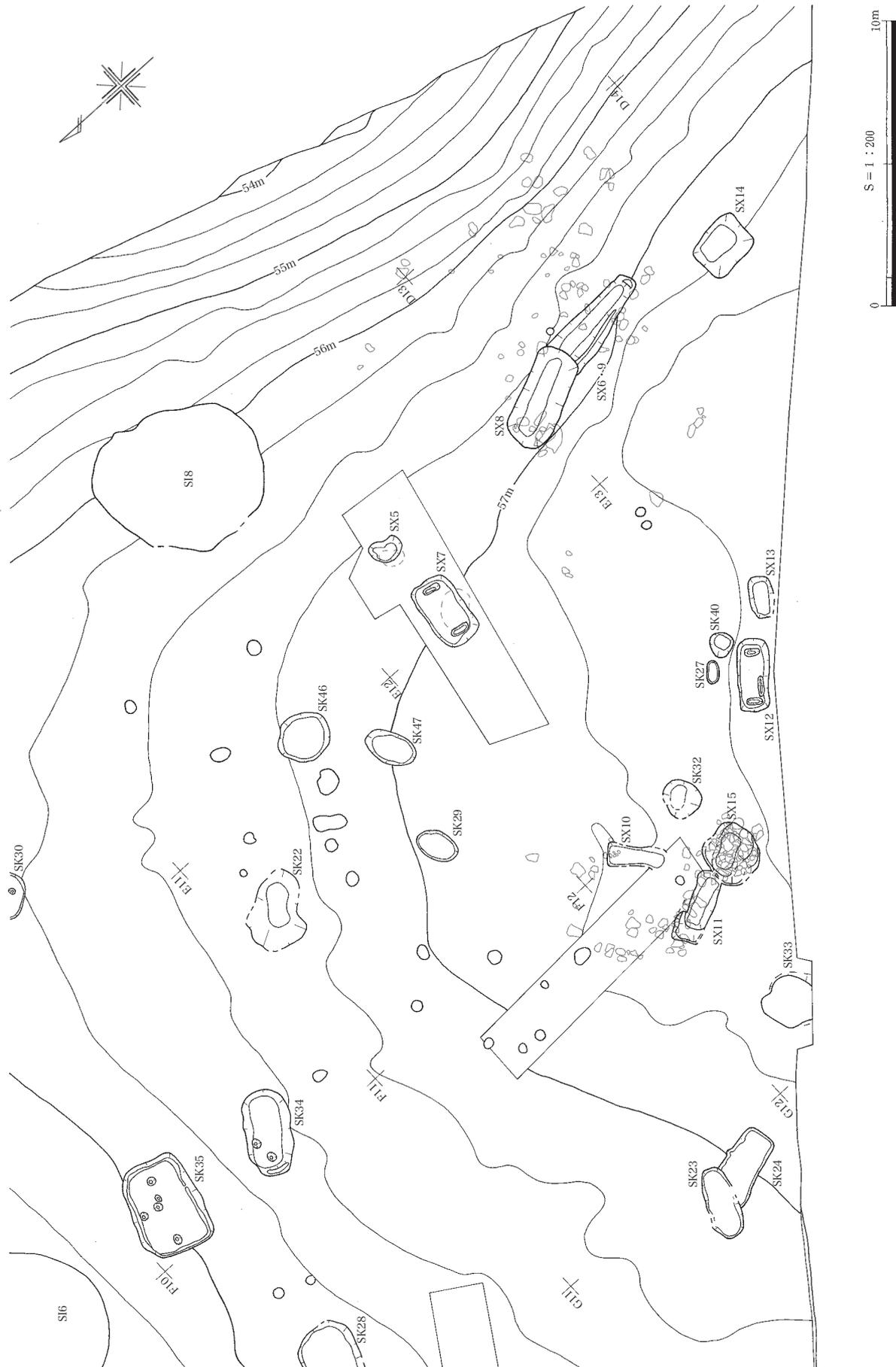
時期 本遺構の時期は出土土器より弥生時代中期後葉(Ⅳ-2)と考える。(高尾)

SX2 (第102図、巻頭図版8、PL.29・61)

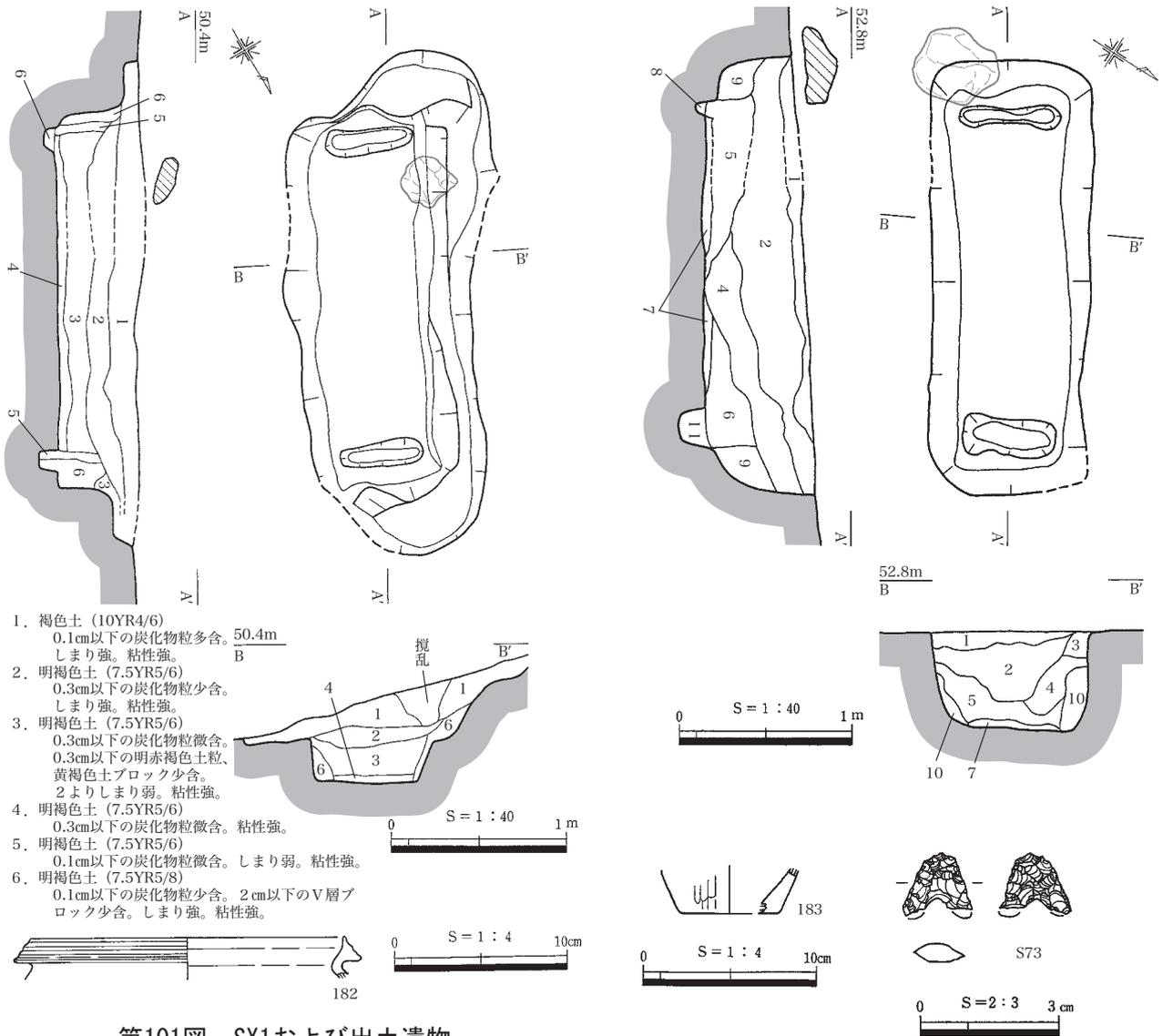
位置 F4グリッド、尾根の緩やかな鞍部となる標高52.6mの平坦面に位置し、北側0.7mにSX4、西側0.2mにSK10が隣接する。

調査の経過 表土剥ぎ終了時点で、本墓の標石となる大型礫の頭が既に露出しており、下位に土坑墓が存在すると予想されていた。しかし、後述するように埋土が地山に酷似しており平面検出が困難で、礫を基点として任意に設定したサブトレンチで遺構のプラン等の確認を行った。その結果、Ⅶ層を掘り込む墓壇プランの一部を検出したため、土層と平行する両側壁を手がかりに墓壇全体の検出を行った。

規模と形態 平面形は長軸2.5m、短軸0.94mの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは最大で58cmを測る。墓壇の主軸は北東方向N-58°-Eを向く。底面は長軸2.2m、短軸0.6mを測り、



第100図 調査区南側木棺墓・土坑墓群全体図



第101図 SX1および出土遺物

北東壁際に長さ 58 cm、幅 14 cm、深さ 6 cm、南西壁際に長さ 52 cm、幅 22 cm、深さ 16 cm の小口穴が掘りこまれている。壁面は底面からわずかに開きながら直線的に立ち上がるが、北東壁のみ湾曲しながら緩やかに立ち上がる。墓壇南東隅上面に 54 × 50 cm、厚さ約 20 cm の礫がのっており、本墓の標石であろう。底面形状および標石位置からすれば埋葬頭位は南西方向だったと考える。

埋土と遺物の出土状況 小口穴の存在から本墓には木棺が使用されたと考えられるが、土層断面では明確な棺痕跡は認められなかった。埋土 9 層は地山である V・VI 層の混合土でしまりがよく、位置的にも棺の裏込め土と想定される。10 層も同様の土で性格は同じであろう。その 9 層に挟まれた内側に堆積した 2～6 層は IV～VI 層のブロックを含んでしまりが悪く、木棺の埋納に使用した墓壇掘削土が棺腐朽後に崩落したものと考えられる。埋土中から底部 183 が、検出面から黒曜石製石鏃 S73 が出土している。

時期 本遺構の時期は出土土器より弥生時代中期後葉と考える。

(高尾)

第102図 SX2および出土遺物

1. 褐色土 (7.5YR4/6) 0.1cm以下の炭化物少含。しまり強。粘性強。
2. 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm以下の明黄褐色土・赤褐色土ブロック、炭化物少含。しまり強。粘性強。
3. 明赤褐色土 (5YR5/6) 0.5cm以下の白色砂礫微含。しまり強。粘性強。
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 3cm以下の赤褐色土・にぶい黄褐色土ブロック多量に含む。しまり弱。粘性強。
5. 褐色土 (7.5YR4/4) 0.2cm以下の赤褐色土ブロック・炭化物微含。しまり弱。粘性強。
6. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の赤褐色土ブロック・0.3cm以下の炭化物少含。しまり弱。粘性強。
7. 明褐色土 (7.5YR5/6) 0.3cm以下の赤褐色土ブロック微含。しまり強。粘性強。
8. 褐色土 (7.5YR5/6) しまり弱。粘性強。
9. 明褐色土 (7.5YR5/8) 1cm以下の赤褐色土・にぶい黄褐色土ブロック多含。(V・VI層の混合土) しまり強。粘性強。
10. 明褐色土 (7.5YR5/8) 3cm以下の赤褐色土ブロック・炭化物微含。しまり弱。粘性強。
11. 明赤褐色土 (5YR5/6) V層粒少含。(主体VI層) しまり弱。粘性強。

SX3 (第103図、PL.30)

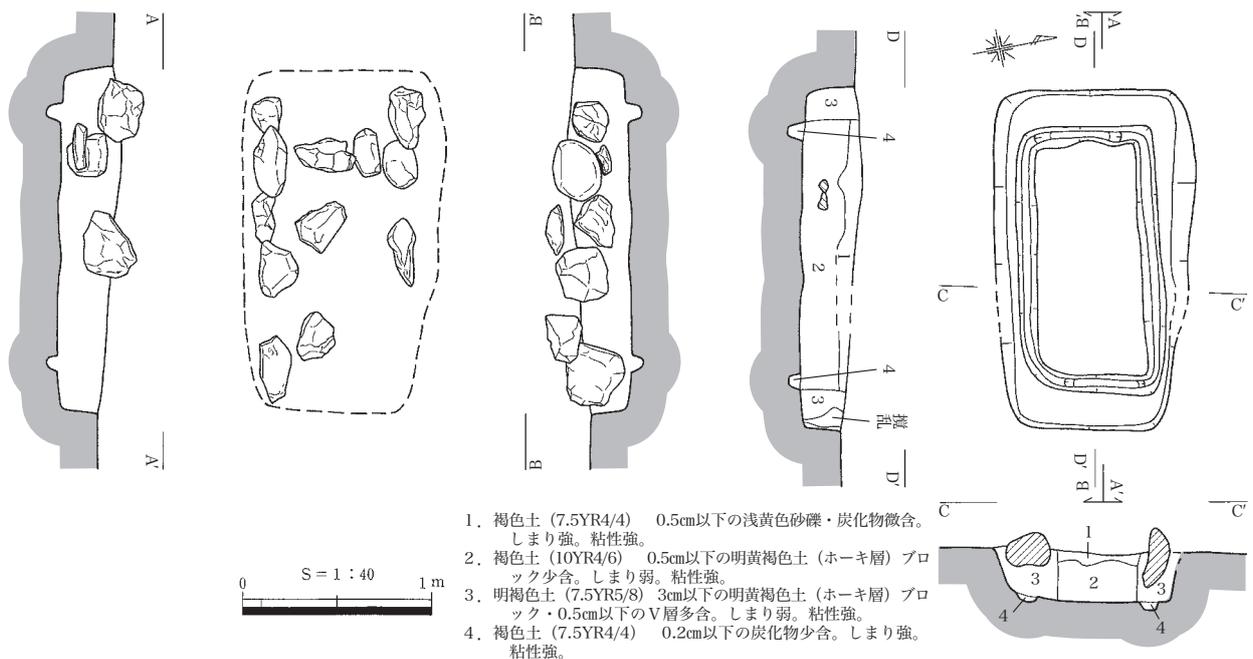
位置 F6グリッド、尾根の緩やかな鞍部となる標高52.6mの平坦面に位置する。北西側6mにはSI3がある。

調査の経過 III層上面で複数の礫の一部が露出している状態を検出した。露出部分からすれば、礫群は南北2列あり、長軸方向を揃えて直線的に並び平行関係にあった。礫群の内側に広がる褐色土と合わせ全体は方形プランを呈しており、礫石使用墓であると考え調査にあたった。

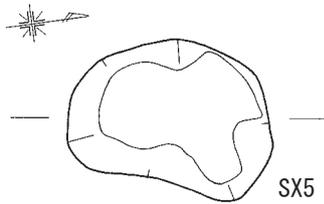
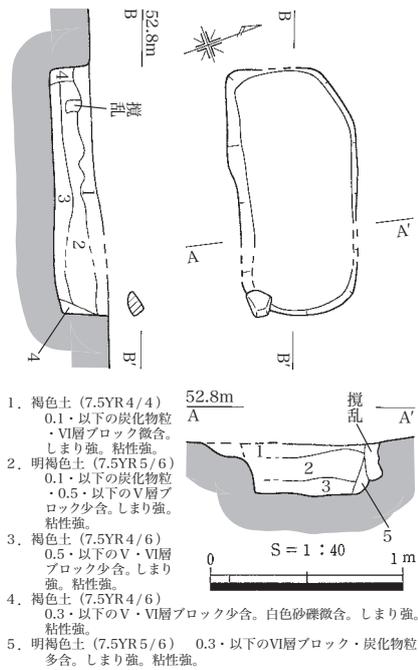
規模と形態 平面形は長軸1.8m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは最大28cmを測る。墓壇は主軸をN-80°-Wに向ける。墓壇内には両長側辺沿いに20~40cm大の扁平な礫を長軸方向を揃えて配すが、北側は礫数が少なくやや粗となる。礫間の幅は45~50cmである。墓壇中央付近に底面から10~25cm浮いた状態で礫が2点出土しており、出土位置からすれば標石と考えられる。また、西側には厚さ6~8cmの扁平な礫を2つ並べて配し、上面レベルを揃えている。概ね平坦といえる礫2点の上面レベルは53.1mとなる。墓壇底面には長軸1.4m、短軸0.7mの長さで口字状に深さ2~4cmの浅い溝をめぐらせており、短辺となる東西辺のみ深さが7~9cmと一段深くなって小口穴状を呈す。

埋土の状況 3層は墓壇掘削時に生じたIII・IV層の混合土とみられ、礫を包括し周壁沿いに堆積している。4層は底面に掘られた溝に入る層で、1・2層は礫および3層に囲まれた内側しか認められない。埋土の所見と底面をめぐる溝の存在から、本墓には木棺が使用されたと考えられる。溝の短辺側は小口穴として機能したとみられるが、両長側辺沿いの溝は礫および裏込め土で塞がれており、結局は側板の固定に使用されなかったと推測する。木棺は溝の小口穴状部分と側壁沿いの礫に囲まれた内法部分、1.2×0.5m程度の規模だったと想定され、礫間の幅がわずかに広くなり枕石状の礫を配した西側が頭位方向と考える。

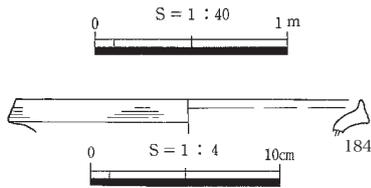
時期 遺物は出土しておらず時期比定は困難だが、周囲の遺構群との関係からすれば弥生時代中期後葉の墓である可能性が高い。(高尾)



第103図 SX3



1. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の明黄褐色土ブロック・炭化物多含。しまり弱。粘性強。
 2. 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下のホーキブロック多含。しまり強。粘性強。
 3. 褐色土 (10YR4/6) 0.2cm以下の炭化物・焼土粒少含。しまり強。粘性強。



第104図
SX4・5および出土遺物

SX4 (第104図、PL. 30)

位置 F4グリッド、尾根の緩やかな鞍部となる標高52.6mの平坦面に位置し、南側0.7mにSX2、南西側0.8mにSK10が隣接する。

調査の経過 本遺構周辺に複数の礫が散在しており、下位にはそれらに伴う墓壇が存在するものと予想された。そこで任意にサブトレンチを設定して掘り下げた結果、VI層を掘り込む遺構の肩と、埋土とみられる褐色土の広がりによる礫を検出したため、墓壇であると想定して調査を進めた。なお、周囲に散在していた他の礫はII層にのっており、下位でも遺構は検出されなかった。

規模と形態 墓壇は主軸をN-70°-Wに向ける。平面形は長軸1.3m、短軸0.7mの隅丸長方形を呈し、検出面から底面までの深さは最大26cmを測る。底面は長軸1.3m、短軸0.5mでほぼ平坦となり、小口穴はみられない。墓壇上面南東隅にかかるように16×12cmの小礫が出土しており、標石の可能性が高いと考える。

埋土の状況 小口穴はないが、土層断面からすると4・5層は裏込め土と推測され、埋葬施設として木棺が使用されていた可能性もある。2・3層は4・5層の内法部分に堆積するもので、覆土が崩落したものと想定される。1層もVI層ブロックを含み、墓壇掘削土に由来すると考える。

時期 遺物は出土しておらず本遺構の明確な時期は不明であるが、周囲の状況等からすれば弥生時代中期後葉である可能性が高い。(高尾)

SX5 (第104図、PL. 37)

位置 D12グリッドの尾根頂部平坦面に位置し、西側1.2mにSX7が近接する。

調査の経過 本遺構は赤碕町教育委員会による試掘トレンチ中で既に検出されており、土坑墓(SX-02)と想定して報告されている(小泉・石賀2004)。半截結果から通常の土坑とも考えたが、

試掘時に出土した礫や周辺遺構群との関係から墓壇であると判断した。

規模と形態 試掘トレンチ底面で検出されたこともあってか底部付近しか遺存しておらず、検出面で1.1×0.8mを測る不整楕円形となり浅い皿状を呈す。遺存する深さは10cmである。長軸方向を主軸とすれば、本墓はN-8°-Eを向く。

埋土と遺物の出土状況 褐色土を主体とし、1層はしまりが悪い。木棺痕跡等は不明である。底面付近で土器片が数点出土しており、時期比定が可能な甕184を図化した。また、本遺構の上位で30～50cm大の礫が2点出土しており、標石であった可能性が高い。

時期 本遺構の時期は出土土器より弥生時代中期後葉(IV-1)と考えられる。

(高尾)

SX7 (第105図、巻頭図版8、PL.33)

位置 D・E12グリッドにまたがり尾根頂部平坦面に位置し、東側1.2mにSX5が近接する。

調査の経過 本遺構は赤碕町教育委員会による試掘トレンチ中で既に検出されており、土坑墓(SX-01)と想定して報告されている(小泉・石賀2004)。

規模と形態 試掘トレンチ底面で検出されているため、遺存する底面までの深さは最大36cmである。平面形は長軸2.5m、短軸1.4mの隅丸長方形を呈し、主軸はN-81°-Wを向く。底面は長軸2.3m、短軸1.3mを測り、壁は底面から外傾しながら立ち上がる。両短辺側には小口穴が掘り込まれており、木棺が使用されたと考えられる。小口穴は西側が幅65cm、長さ20cm、東側が幅52cm、長さ16cmを測り、どちらも深さは18cmとなる。埋葬頭位は小口穴が幅広となる西側であろう。

埋土と遺物の出土状況 周壁沿いと小口穴は墓壇掘削時に生じたIV~VI層の混合土3・4層が裏込め土として充填されている。その内側に堆積する1層はIV層ブロックを多量に含むしまりの悪い土で、木棺腐朽後に崩落した墓壇埋め戻し土である。同層は空洞化した西側の木棺痕にも入り込んでいた。本墓は試掘時に上位で20~30cm大の礫が7点検出されていることから、標石を伴っていたと考える。その他、甕185など混入品とみられる土器片が1・4層でわずかに出土している。

出土遺物 185はあまり拡張しない口縁に凹線を施すものだが、風化が著しく不明瞭である。

時期 本遺構の時期は出土遺物より弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。

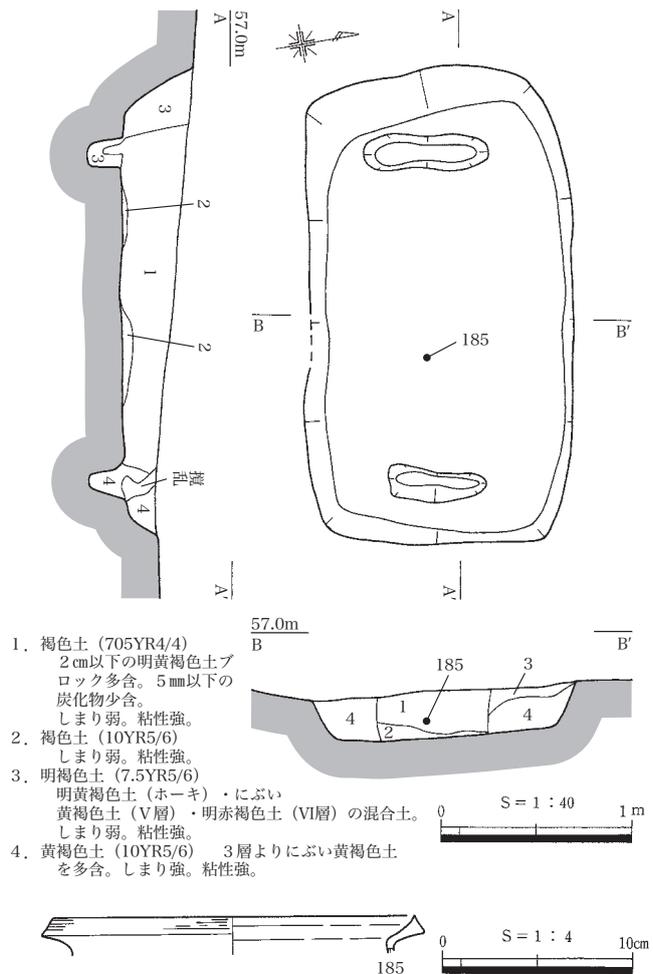
(高尾)

SX10 (第106図、PL.33)

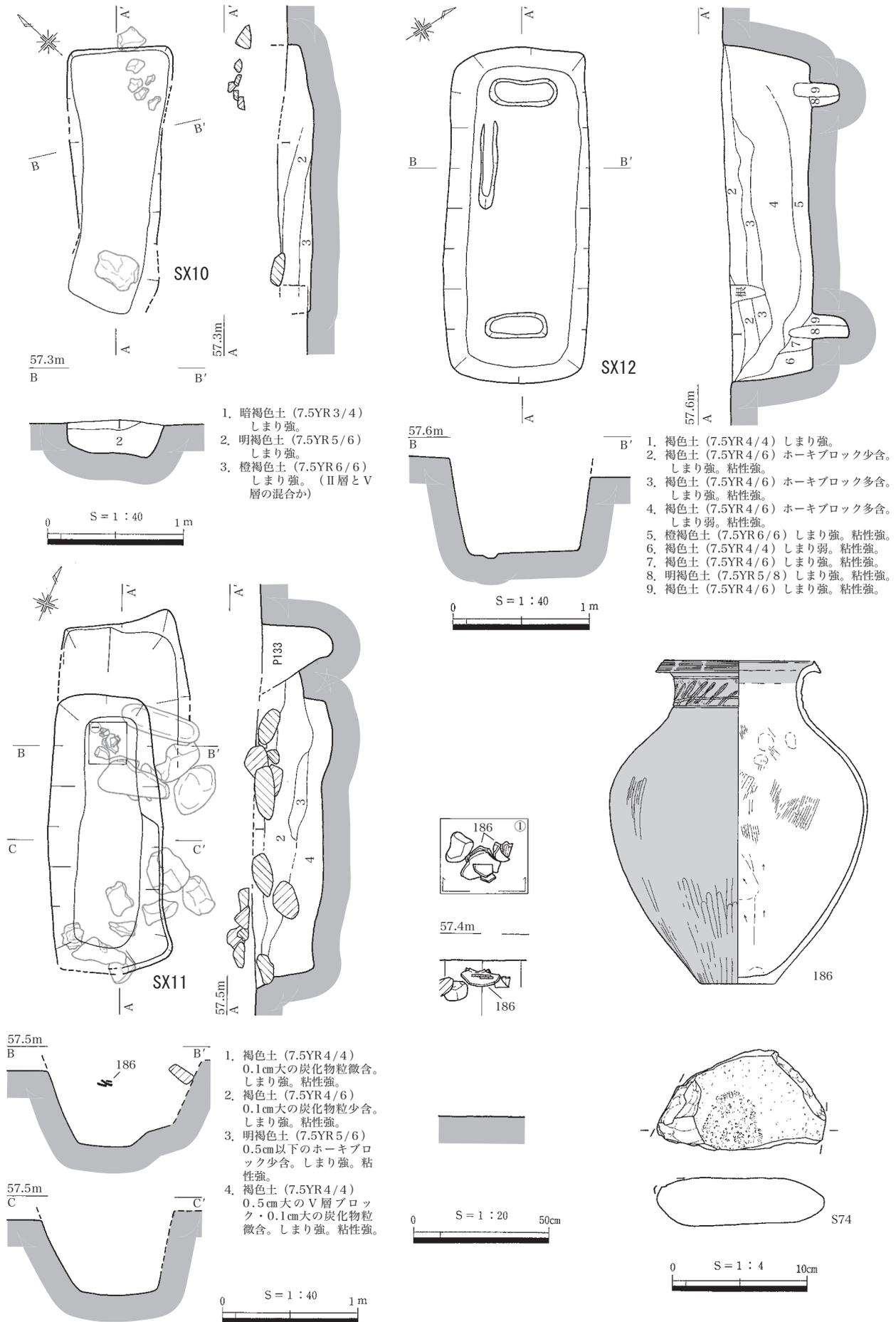
位置 E12~F12グリッド、標高約57.3m、調査区南端の平坦地に位置する。南西側にSX15、西側にSX11がある。

調査の経過 表土除去後、II層を除去したところ、F12グリッド杭南側周辺に礫が検出され、また隣接する試掘トレンチ内の壁面において、標石と思われる礫が落ち込むように埋没している部分を確認した。周辺の遺構の検出状況を踏まえると、II層上面で遺構が検出できるはずであるが、プランがはっきりとせず、明瞭に検出することができなかった。そのため、礫が検出されている部分を中心に、II層上面をさらに10cmほど掘り下げ、長方形のプランを検出した。トレンチ(B-B')により、箱状の掘り込みを確認し、墓と判断して調査を行った。

規模と形態 平面形は長方形を呈し、規模は長辺2m、短辺0.8mを測る。検出面から底面までの深



第105図 SX7および出土遺物



第106図 SX10～12および出土遺物

さは、最大 29 cm であり、断面は方形である。主軸を N-48°-E にとる。周辺の遺構の検出状況から、本来はⅡ層上面からの掘り込みと考えられる。標石は長軸 32 cm、短軸 22 cm、最大厚 12 cm の角礫が用いられていた。底面はほぼ平坦で基本層序Ⅳ層まで掘り込まれている。底面には小口痕は確認できなかった。また、土層断面の観察においても木棺の痕跡は確認できなかった。標石のある南西側は試掘トレンチにより掘り下げられていたため、わずかに底面を確認したのみである。

埋土と遺物の出土状況 埋土は3層からなる。一部試掘トレンチで掘り下げられていたため、堆積を明確につかむことはできないが、標石のある南西側から北東側に向かって堆積した様子が伺われる。堆積の様子からは、木棺の腐敗による陥没があり、それに伴う埋土の堆積を伺うことはできない。

出土遺物 墓坑内から遺物は出土していない。ただ、試掘調査時に SX-10 北側に隣接して赤色塗彩された器台が出土しており、本墓に伴う供献土器の可能性ある^(註)。また、東側で標石の可能性のある礫が数点みられ、うち一点は敲石 S74 であった。

時期 周辺の遺構との関係から、弥生時代中期後葉のものと考えられる。(浅田)

(註) 報告書 P22 の Po12 が該当しよう。武尾美則、石賀 太編 2002 『赤崎町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』

SX11 (第 106 図、巻頭図版 7、PL. 36)

位置 F12 グリッド、標高約 57.3 m、調査区南端の平坦地に位置する。南側に SX15、東側に SX10 がある。北西側で P133 と、南側で SX15 と重複しており、P133、SX15 に切られる。

調査の経過 Ⅱ層除去後、試掘トレンチ西側で礫の集中する部分と、炭化物を含む褐色土が分布する部分を検出した。また、試掘トレンチ内西壁面および底面を精査したところ、遺構の南東隅に相当する底面付近を検出した。そこでサブトレンチを設定したところ、標石および掘り方を確認したため墓と判断して調査を行った。Ⅲ層上面では後世の植林による木の根の張り出しやその影響を受けた土の変色が顕著であり、プランを明瞭に検出することが困難であった。そこでⅢ層を面的に掘り下げ、プランを検出した。

規模と形態 平面形は長方形を呈する。規模は長辺 2.4 m、短辺 0.9 m であり、検出面から底面までの深さは最大 58.2 cm である。断面形は、試掘トレンチで消失している部分があるものの、残存する部分から想定すると逆台形を呈するものと考えられる。底面はほぼ平坦であり、基本層序Ⅳ層まで掘り込まれている。主軸は N-24°-W にとる。底面には小口穴は認められなかった。また、土層断面の観察においても木棺の痕跡を認めることはできなかった。

標石の中に長楕円礫が一点含まれており、埋土 1 層中において東西方向に横たわって出土している。同じ形態の石が SX8 からも出土している。標石として用いられている礫は角礫がほとんどである中、長楕円礫がそれぞれ一点ずつ使用されている点は興味が持たれる。この礫の西端は墓壇の中心軸に位置している。出土状況から標柱状に立て置かれていた可能性もあろう。固定するための礫が見当たらないため、おそらく直接墓壇上面に突き立てていたものが、埋没過程で倒れたものと推測する。また、このすぐ横から朱塗りの壺が出土している。標石は主に 1 層上面および 1 層中において検出されたが、中には 4 層にまで落ち込んでいるものもあることから、本遺構には木棺が使用されており、木棺の腐朽とともに覆土が落ち、それに伴い標石も埋没したものと推察できる。

埋土と遺物の出土状況 赤彩された壺の破片が、検出面から埋土 1 層中にかけて出土している。この他に遺物は認められなかった。埋土 3、4 層は地山層のⅣ層・Ⅴ層ブロックを含むことから、これら

の土は木棺埋設時に覆土として入れられたもので、これらの層が木棺の腐朽により底面まで落下し、窪地状になったところへ1、2層が堆積したものと考える。

出土遺物 赤色塗彩された壺 186 が主に1層中からほぼ一個体分出土しており、これを図示した。外面は、口縁部に4条の凹線を施す。頸部上段に1条の凹線を施し、その下に板状工具による連続刺突文施文後2条の凹線を施す。胴部は縦方向のヘラミガキが施される。口縁部～胴中位まで赤色塗彩の痕跡が認められるが、本来は底部も含め器体全体が赤彩されていたものと思われる。内面は口縁部～頸部上半まで赤色塗彩が見られる。調整は主に工具によるナデである。

時期 出土遺物が清水編年IV-1様式に相当することから、弥生時代中期後葉と考えられる。

(浅田)

SX12 (第106図、PL.36)

位置 E12～13グリッド、標高約57.5mの調査区内で最も高い平坦地に位置する。北東側にSK27、40が位置し、南東側にSX13がある。

調査の経過 F12グリッド周辺で墓がまとまって検出されたため、同じ平坦面が続くE12～13グリッドにかけても墓群が展開することが予想された。Ⅲ層の上面では遺構の確認ができなかったため、さらに5cmほど掘り下げたところ、当遺構のプランを検出した。トレンチ(B-B')により掘り方を確認したため、墓と判断して調査を行った。

規模と形態 平面形は長方形を呈し、検出面での規模は長軸2.5m、短軸1.1mを測る。検出面から底面までの深さは最大62cmである。断面はやや逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であり、基本層序IV層まで掘り込まれていた。底面では小口穴が検出され、側板の痕跡も一部確認された。土層断面の観察においても小口板の痕跡を確認することができた。小口穴の規模は南東側で幅18cm、長さ45cm、底面からの深さ25cmであり、北西側で幅19cm、長さ50cm、底面からの深さ22cmである。ほぼ同規模で頭位方向は不明である。小口穴の心々距離は1.5mを測る。側板の痕跡は南西側壁面下に認められ、確認した規模は幅12cm、長さ67cm、底面からの深さ2.5cmである。主軸はN-55°-Wにとる。

埋土と遺物の出土状況 埋土は主に粘質の強い褐色土からなる。10層は小口痕である。6～8層はしよりの非常に強い埋土であり、裏込め土と考えられる。3～5層は、地山のブロックを含むものもあることから木棺の上部を覆っていた覆土で、木棺の腐朽による陥没時に底面まで落ち込んだものと考えられる。窪地状になったところへ、1、2層が堆積することにより、埋没を終えたものと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 周辺に展開する墓群との関係から、弥生時代中期後葉のものとして推測する。

(浅田)

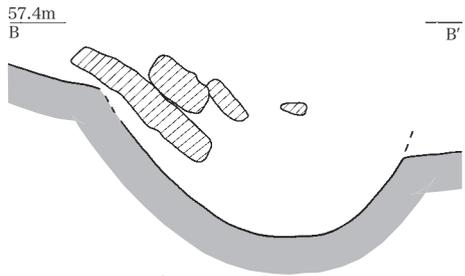
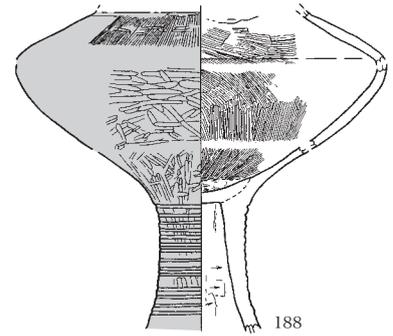
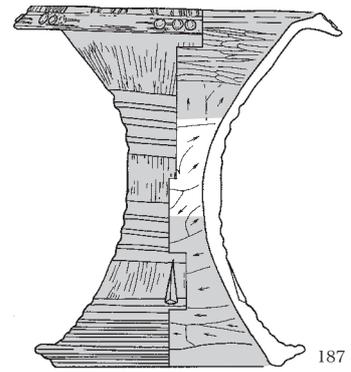
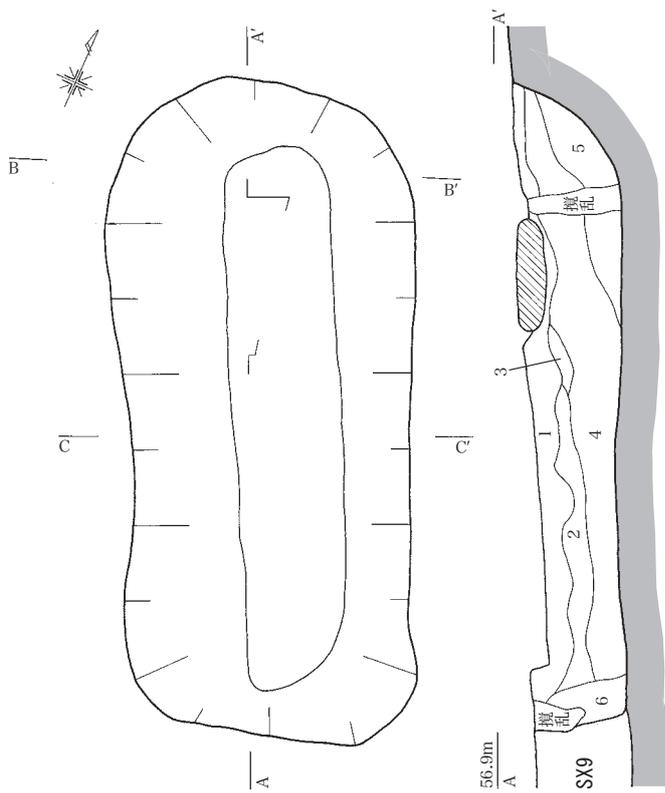
SX6・8・9 (第107～110図、巻頭図版7・8、PL.34～36・57)

位置 D12グリッド、傾斜変換点にあたる標高56.8～57.0mの緩斜面に位置し、北側5mにSX5・7があり南側2mにSX14が近接する。SX6・8・9は主軸をわずかにずらしながら重複して築造されており、土層断面等の所見からすればSX8がSX9を切り、SX9はSX6を切る。

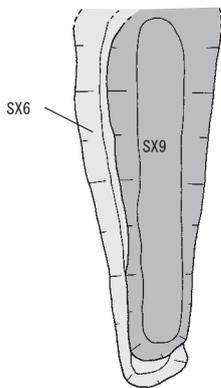
調査の経過 調査区南側の尾根傾斜変換点から東斜面において同グリッドを中心として20～50cm大の礫が多数散在していた(第107図)。礫の形状・規格のばらつきが大きく墳丘の貼石や列石とは考え難く、当初はそれらを斜面部に展開する墓壇群の標石と想定していたが、記録・除去作業の過程で



第107図 SX6・8・9標石および周辺礫群出土状況

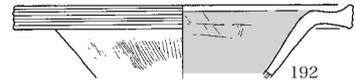
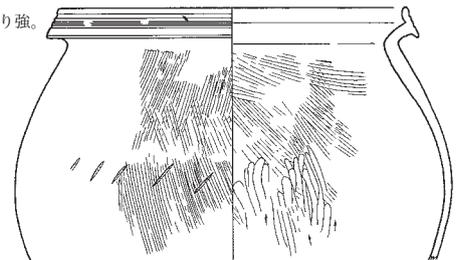
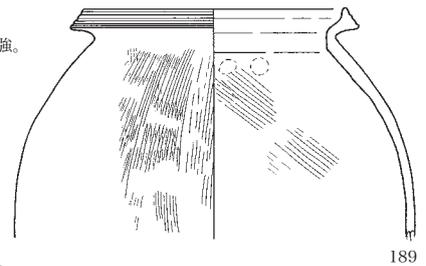


S = 1 : 40 1m

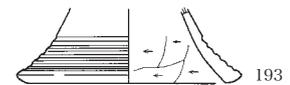


S = 1 : 80

- B'
1. 褐色土 (7.5YR 4/4)
1cm以下のホーキブロック・0.7cm
大の炭化物粒少含。しまり強。粘性強。
 2. 褐色土 (7.5YR 4/4)
1より色調が暗い。1cm以下のホー
キブロックおよび炭化物 粒少含。
しまり強。粘性強。
 3. 褐色土 (7.5YR 4/6)
0.1cm大の炭化物粒微含。しまり強。
粘性強。
 4. 褐色土 (7.5YR 4/4)
1より色調が明るい。ホーキブロッ
ク多含。しまり強。粘性強。
 5. 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
0.3cm以下の炭化物粒多含。しまり強。
粘性強。
 6. 明褐色土 (7.5YR 5/8)
V・VI層混合の裏込めの土。しまり強。
粘性強。

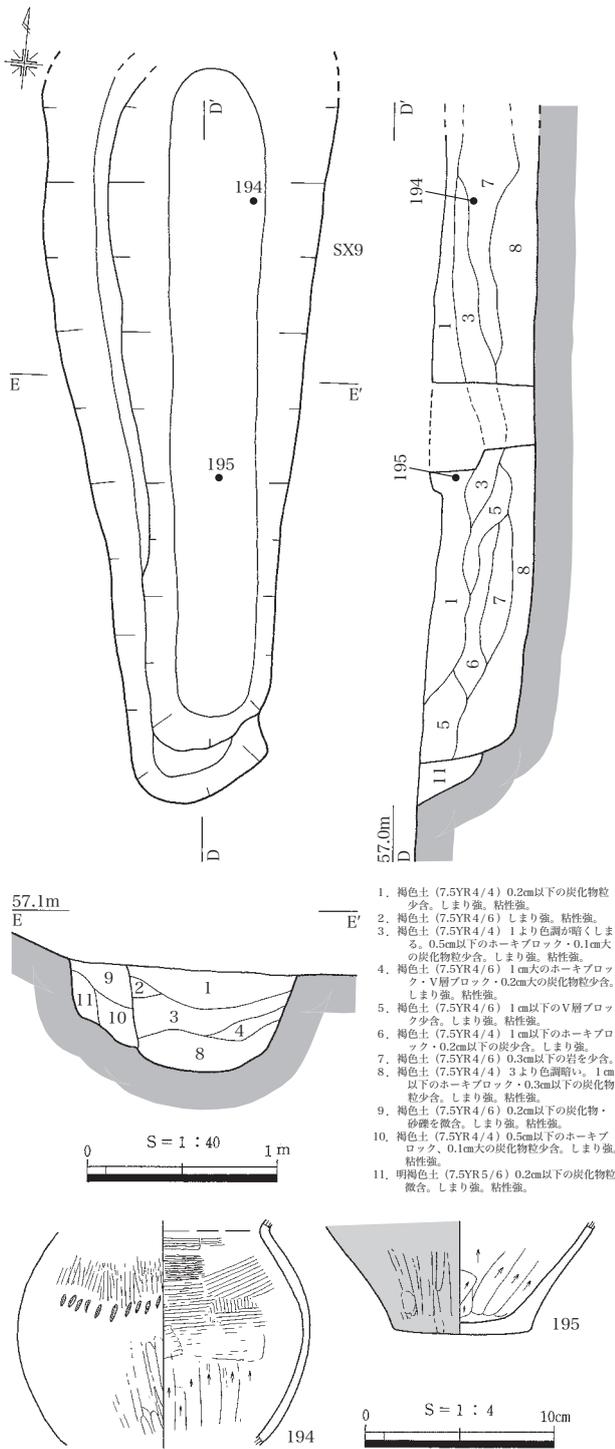


S = 1 : 4 10cm



第108図 SX6・8・9切合関係模式図

第109図 SX8および出土遺物



第110図 SX6・9および出土遺物

礫群の大半がⅡ層もしくはⅡ層より上位で部分的に堆積する黒褐色土にのっていることが明らかとなり、弥生時代以降のものか標石等であったとしても原位置を留めていないと判断した。一方、Ⅲ層上面にのるかⅢ層下へ落ち込むような状態で検出された礫も存在し、それらは標石になり得ると考え精査したところ、当該墓壙群を検出した。Ⅲ層上面を検出した時点で概ねその範囲に暗褐色土～黒褐色土が薄く広がっていたが、これは墓壙上面が陥没して浅い窪地となった場所に堆積したものと理解できる。SX6・8・9とも埋土がⅢ層に近似しプランが明瞭に把握できなかったため、サブトレンチで立ち上がりを確認して全体の範囲を推測し、同範囲のみⅣ層まで下げて平面検出を行った。以下、各墓壙について詳述する。

SX8

規模と形態 平面形は上縁部が長軸3.5 m、短軸1.6 mを測る隅丸長方形だが全体的にかなり丸みをもつ。墓壙の主軸はN-23°-Wを向く。墓壙の深さは50 cmであるが、墓壙西側肩から底面までの高低差は最大78 cmを測る。底面は長軸2.9 m、短軸0.6 mの細長い隅丸長方形を呈し、そこから壁は緩やかに立ち上がるため横断面形は湾曲して開くU字形となる。

埋土と遺物の出土状況 本墓には複数の礫を用いた標石が置かれていた。北西隅付近には長さ約90 cm、幅70 cmの板石や、長さ65 cm、厚さ16 cmの柱状の長楕円礫、台石状の扁平な円礫等で構成される標石を配す。長楕円礫は墓壙中心線上で長軸と主軸方向が概ね揃った状態で出土している。これらに対し墓壙中央付近の標石は中心線上に位置するものの単体である。埋土は6層に分かれ、上層の1～4層は褐色土でⅣ層ブロックを含み、墓壙掘削土に由来するものと考えられる。6層はV・Ⅵ層の混合土で、垂直方向の立ち上がりが認められるため裏込め土であろう。そうすると、埋葬施設として木棺が使用された可能性が高いが、土層および底面形状から通有の組み合わせ木棺は想定しにくい。本墓には土器が供献されており、検出面付近の1層中から多数出土した。器台187はほぼ完形で、脚付壺188・甕189・190は破砕した状態でそれぞれ出土している。

出土遺物 187は口縁部に刻目を入れた後3条の凹線と円形浮文を施す。筒部・脚部とも4条単位の凹線で飾り、その間に貫通しない三角形透孔を入れる。188は頸部以上が不明だが、算盤玉状の扁平

な胴部に細長い脚部がつくもので、脚部外面は凹線で飾る。内面は細かい単位の花ケ目を放射状に施す。189・190は断面が肥厚した三角形もしくはT字形となる口縁部に3条の凹線を施す甕で、190は胴部最大径付近に小口による刺突をめぐらせる。191は壺で、断面逆L字形に拡張した口縁部に刻目を施した後凹線を4条めぐらせる。頸部以下の大半を欠失しているが破面付近に凹線が1条だけ認められる。192・193は胎土等から同一個体とみられ、破面に残るカーブからすれば高坏であろう。坏部は水平方向に拡張した口縁部をもち、上下にわずかに拡張させた口縁外面に3条の凹線をめぐらせる。なお、187・188・191・192は赤褐色の顔料で塗彩されていた。

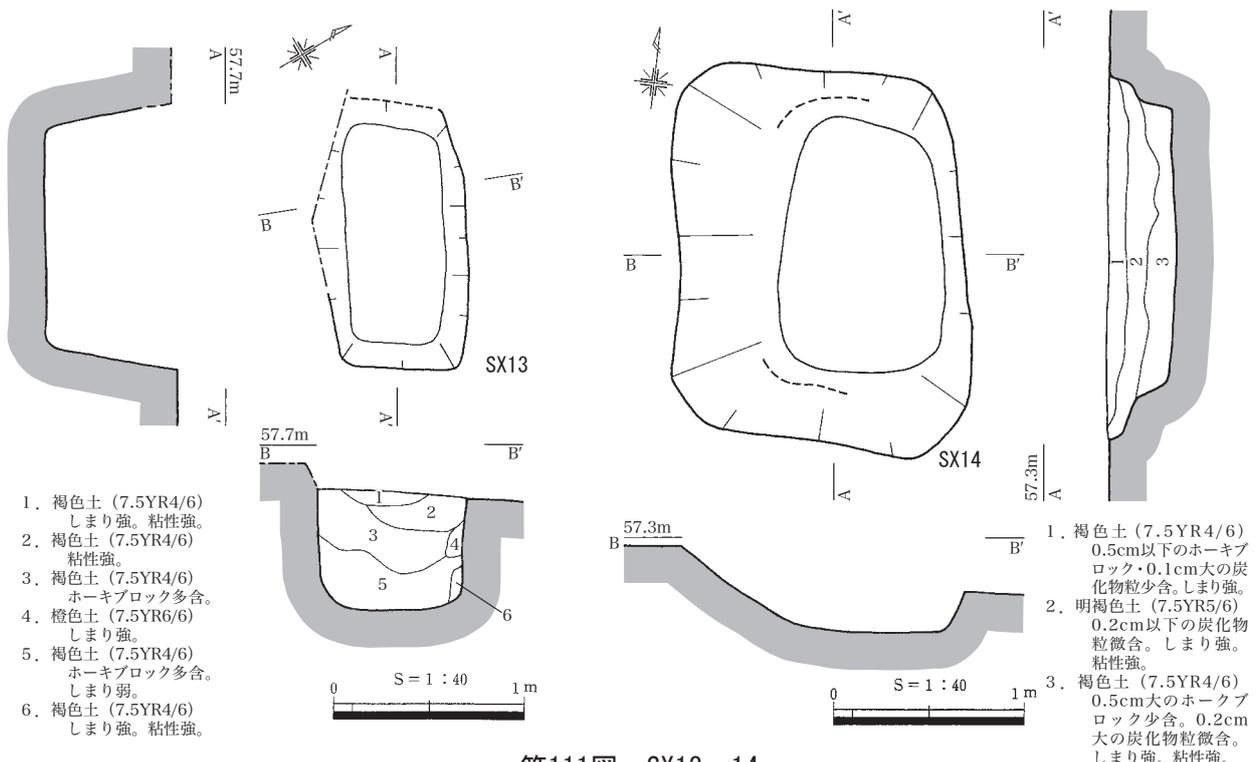
SX6・9

規模と形態 どちらも他の墓壇に切られており全体形は不明であるが、SX9が長軸3.6m以上、短軸1.2m以上を測る隅丸長方形、SX6が3.9m以上、短軸0.7m以上を測る隅丸長方形を呈すと推測する。土層断面からは不明だが、SX6は1基にしては長軸だけ長くなりすぎ南側で軸がややずれることを勘案すれば、軸をわずかに変えて重複する2基を1基として捉えている可能性もある。SX9はN-7°-Wに、SX6はN-9°~10°-Wに主軸を向ける。SX9の底面は長軸3.44m、短軸0.5mを測る細長い隅丸長方形で、緩やかに湾曲してカーブをもつため墓壇の横断面形はU字形を呈す。墓壇の深さはSX9が最大54cm、SX6が最大44cm以上となる。

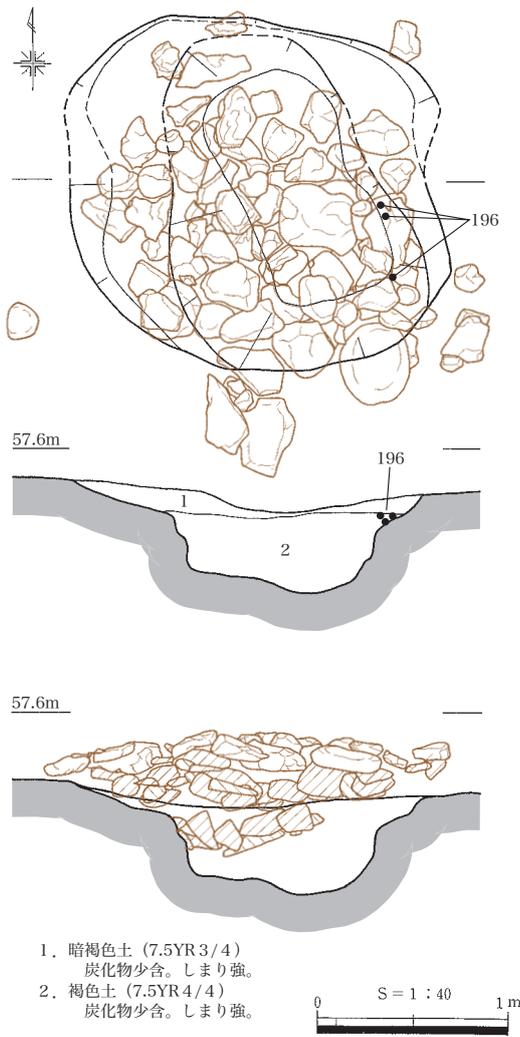
埋土と遺物の出土状況 SX9は褐色土を主体とし、上層はIV・V層ブロックを含み墓壇掘削土とみられる。各断面とも中央にかけて窪むレンズ状の堆積を示す。SX6も同様だが、裏込め土と考えられる11層が壁沿いに認められる。SX9では甕194や底部195など供献されたと思われる土器が少量出土している。

出土遺物 194は胴部中位に最大径をもち外面に刺突を連続して施す。195は外面を赤色塗彩された底部で、底面からの立ち上がり早くに開く形態となるため小型の壺の可能性もある。

時期 SX6・8・9の築造順序はSX6→SX9→SX8である。SX8の築造時期は出土土器から弥生時代中



第111図 SX13・14



期後葉 (IV - 2) と考えられ、SX6・9の時期も中期後葉の範疇で捉えられよう。

(高尾)

SX13 (第111図、PL.37)

位置 E13グリッド、標高約57.5mの調査区内で最も高い平坦地に位置する。SX12の南東側に位置する。

調査の経過 F12グリッド周辺で墓がまとまって検出されたため、同じ平坦面が続くE12～13グリッドにかけても墓の存在することが十分に予想された。Ⅲ層の上面では遺構の確認ができなかったため、さらに5cmほど掘り下げたところ長方形のプランを検出した。トレンチ(B-B')により掘り方を確認したため、墓と判断して調査を行った。南西隅は調査地外に続くため、プラン全体を確認することはできなかった。

規模と形態 平面形は長方形を呈し、検出面での規模は長辺1.4m、短辺0.8mを測る。検出面から底面までの深さは最大72cmである。断面は方形を呈する。底面はほぼ平坦であり、基本層序Ⅵ層まで掘り込まれていた。底面上において小口穴は検出されなかった。土層断面の観察からも木棺の痕跡は確認できなかった。しかし、埋土中には裏込め土と考えられる堆積が認められることから、木棺墓の可能性はある。

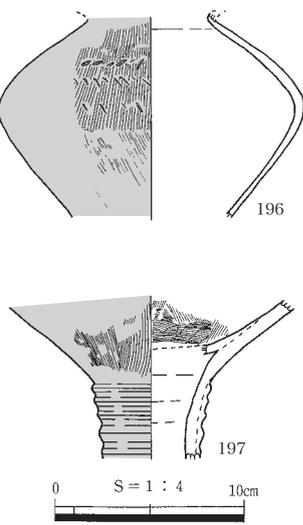
埋土と遺物の出土状況 埋土は主に粘質の強い褐色土からなる。6層はしまりの強い土であり、底面に対しほぼ垂直に堆積していることから、裏込め土の可能性が考えられる。3、5層はしまりが弱く、また地山のホーキブロックを多く含むことから、埋設時の覆土と思われる。4層は壁体の崩落によるもので、木棺が腐朽し陥没した際に3、5層の崩落と同時に壁体の一部も崩れて堆積したものと判断した。その後窪地状になったところへ1、2層が堆積し、埋没を終えたものとする。

主軸はN-60°-Wで、SX12と軸をほぼ同じ方向にとる。

出土遺物 3層中から甕もしくは壺の胴部と思われる弥生土器片が1点出土している。小片で図化には至っていない。

時期 出土した土器片が弥生土器であり、周囲の墓群との関係から、弥生時代中期後葉のものと推定される。

(浅田)



第112図
SX15および出土遺物

SX14 (第111図、PL.37)

位置 D13グリッド、傾斜変換点にあたる標高57.0～57.2mの緩斜面に位置する。

調査の経過 SX9 南側 2 m のⅢ層上面で隅丸長方形プランの褐色土を検出し、位置的に墓壙の可能性が高いと考え調査にあたった。

規模と形態 平面形は検出面で長軸 1.98 m、短軸 1.56 m、底面で長軸 1.35 m、短軸 0.86 m を測る不整隅丸長方形で、底面までの深さは最大 36 cm である。標石は無く、土層断面でも墓を示唆する所見は得られていないが、築造位置・形態等から墓壙と推測する。墓壙は主軸を N -5° - W に向け、南北壁で二段掘り状となるが、西側は不明確で検出できず東壁はそのまま緩やかに立ち上がる。

埋土の状況 3 層に分かれ、中央がわずかに窪むレンズ状の堆積を示す。木棺痕跡もなく自然堆積状の土層断面であるため、土坑墓だった可能性がある。

時期 混入品とみられる弥生土器の胴部小片が 1 点出土しただけだが、本遺構の時期は周囲の遺構群の状況から弥生時代中期後葉と推定する。 (高尾)

SX15 (第 112 図、PL. 31、32)

位置 F12 グリッド、標高約 57.5 m、調査区南端の平坦部に位置する。北東側に SX10 が、北西側に SX11 がある。

調査の経過 E12 ~ F12 グリッドにかけ、表土除去後に人頭大の礫が集積する部分を検出した。試掘調査により、墓の存在が指摘されており、ある程度検出される位置を予測しながら周囲のⅡ層を除去した。標石として形成されている集石を検出したため、墓と判断して調査を行った。後世の杉の植林により、根が集石に部分的に入り込む箇所があり礫の下まで表土が混じる部分もあったものの、集石に大きく崩れた形跡は認められなかった。そのため、ほぼ原形を留めているものと判断した。

規模と形態 標石は径 10 ~ 40 cm の礫が集められて形成されていた。規則性は認められなかったが、東側は南北方向に平行になるようにほぼ直線状に辺が形成されており、平面形は方形を指向する。標石を全て除去したところで、墓壙のプランを検出した。墓壙の形態は上面と底面で異なり、上面の規模は一辺約 1.8 m の不整隅丸方形であり、底面は短辺 0.6 m、長辺 1.2 m の不整長方形となっている。掘り方はいびつな二段掘り状となり、断面は逆台形を呈する。底面プランからすれば主軸を N -27° - W にとる。また、墓壙のプランが北西側で接する SX11 のプランを切っていることから、SX11 が SX5 より先行する。

埋土と遺物の出土状況 埋土は暗褐色土と褐色土の 2 層からなる。暗褐色土は礫の隙間及び墓穴上面に堆積していた。ともにしまりがよく、炭化物を少し含んでいる。礫は埋土中にも見られ、底面近くにおいても検出された。このことから、墓壙には底面プランに見られるような方形の棺が納められており、棺の腐朽により、標石が墓壙内に落ち込んだものと判断した。

出土遺物 遺物は、少数であるが標石の間及び褐色土中から赤彩された土器が出土している。

時期 埋土中の出土遺物はⅣ -1 様式に比定されることから、弥生時代中期後葉に造られたものと考ええる。 (浅田)

(5) 土器溜り・ピット

土器溜り1 (第114図、PL.57)

F・G5グリッド、傾斜変換点に近い標高52.1mの平坦面に位置する。周囲には約3m離れてSI3やSK12・39がある。Ⅲ層がわずかに低くなった窪地に、弥生時代前期の土器が1.1m×0.7mの範囲で集中していた。同グリッドから西側緩斜面に堆積している褐色土に覆われる。完形になる個体は無いが、散在する土器片の中には接合するものもある。出土した土器は壺198～200、甕201・202である。198は頸部にヘラ描沈線を1条めぐらせる。199はラップ状に開く口縁の端部に刻目を施す。201は頸部直下の外面にヘラ描沈線を3条施す。201・201とも内面はハケ調整を主体とし、上半は指押さえで最終的に仕上げる。土器はいずれも弥生時代前期後葉(I-3)のものである。(高尾)

土器溜り2・3については第3節で後述する。

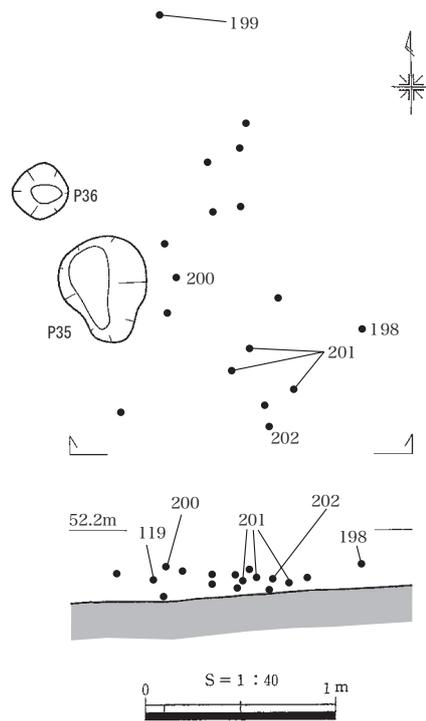
P11 (第115・118図、PL.55)

E2グリッドのSK4と切り合うが新旧関係は不明である。平面形は長軸60cm、短軸40cmの不整楕円形で、深さは30cmを測る。埋土中から甕204が破砕した状態で出土し、その中央には径約10cmの円礫がのる。土器の特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉(IV-1)と考える。

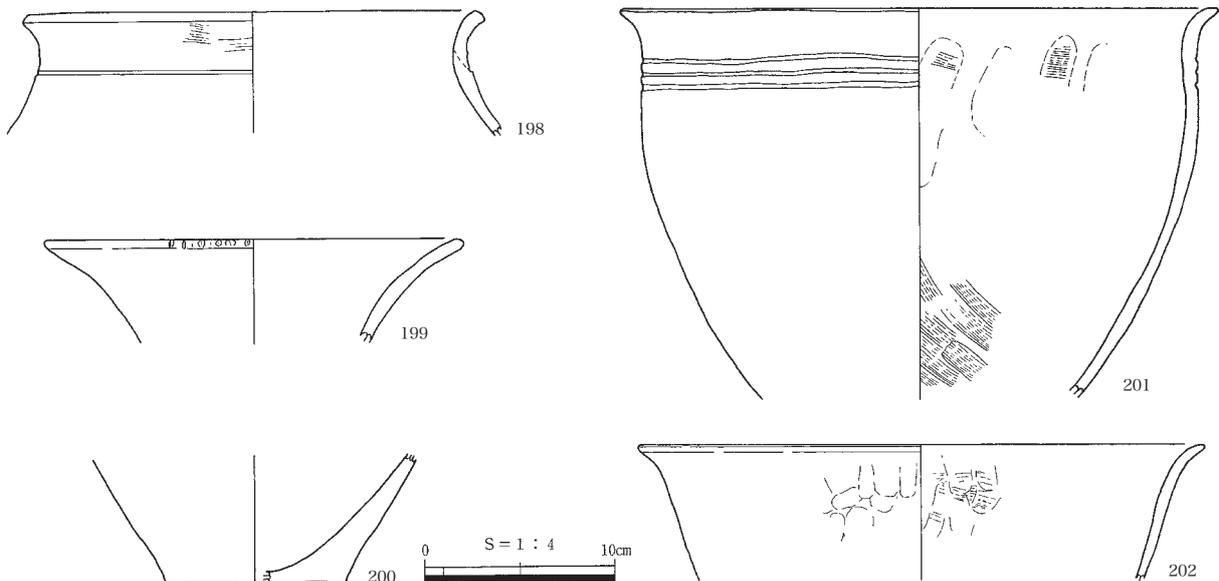
(高尾)

P56 (第117・118図、PL.58・60)

F8グリッド、標高54.3mの緩斜面に位置し、南東0.4mにSK25が隣接する。長軸70cm、短軸60cmの不整円形を呈し、深さは40cmを測る。埋土1層に伴って、甕205、扁平片刃石斧S75、砥石S76が出土した。205はおおよそ



第113図 土器溜り1



第114図 土器溜り1出土遺物

3/4 個体に復元でき、破碎した状態で投棄されたと思われる。S76 は流紋岩製の砥石で、被熱して表面の一部が黒色を呈す。出土土器の特徴から、本遺構の時期は弥生時代中期後葉 (IV - 1) と考える。
(高尾)

P89 ~ 92 (第116・118 図、PL. 58)

D6 グリッド、谷部の 48.6 ~ 49.2 m の斜面部に位置し、いずれも径 20 ~ 60 cm の不整楕円形を呈す。本来的には谷部①層中から掘り込まれており、同層が埋土として入るため 3 層上面では検出できなかった。底面付近しか検出できていないが深さ 16 ~ 24 cm を測る。P89 と P92 から出土した須恵器片は同一個体で接合した。206 は長頸瓶で、肩が張り、口縁部にかけてラップ状に開きながら立ち上がる。土器の特徴から、八橋 X 期併行、8 世紀初頭以降に埋没した遺構と考える。

(高尾)

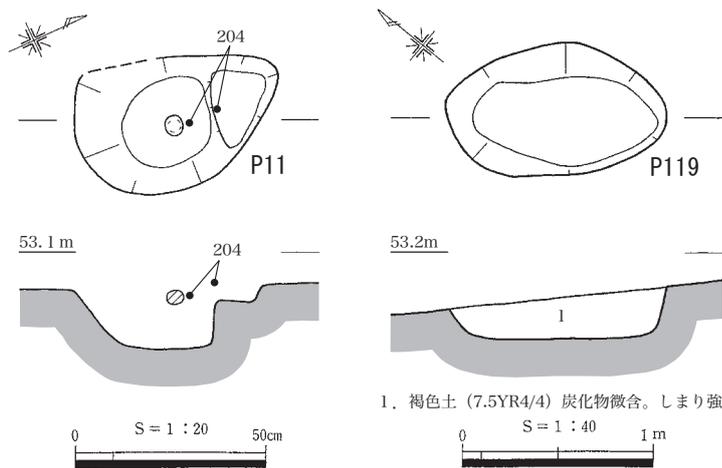
P119 (第115 図)

E7 グリッド、標高約 53.0 m の北東側に向かって傾斜する谷斜面部に位置する。SI5 の西側にある。Ⅲ層上面において、炭化物粒を含む褐色土の楕円形プランを検出した。検出規模は長軸 116 cm、短軸 70 cm、検出面から底面までの深さは約 15 cm である。

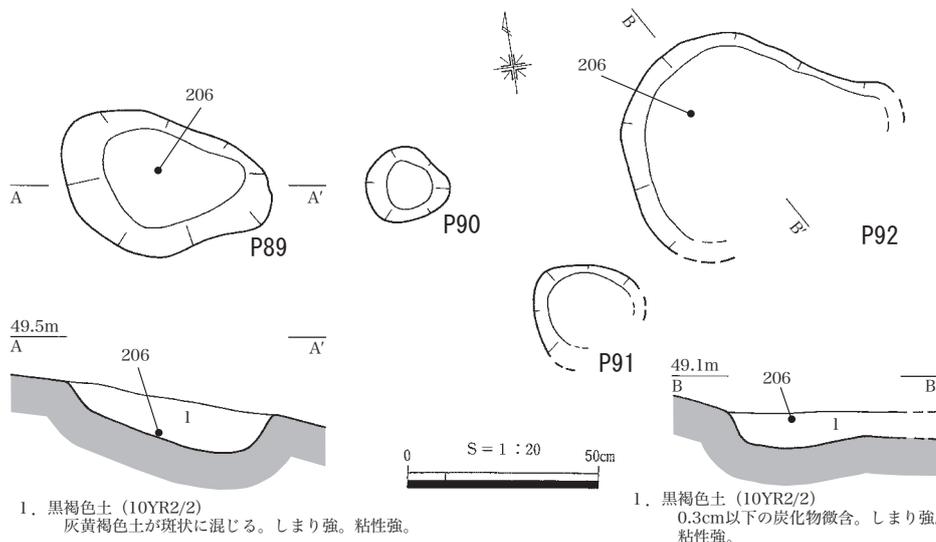
遺物は甕の口縁部 203 が出土している。口唇部に 2 条の凹線後、刻目を施す。内面調整はヨコナデである。図化できなかったがⅢ様式の甕の小片も出土している。

時期は出土遺物から弥生時代中期中葉 (Ⅲ - 3) である。用途は不明である。

(浅田)



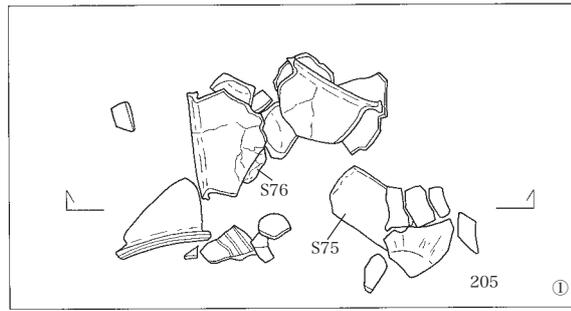
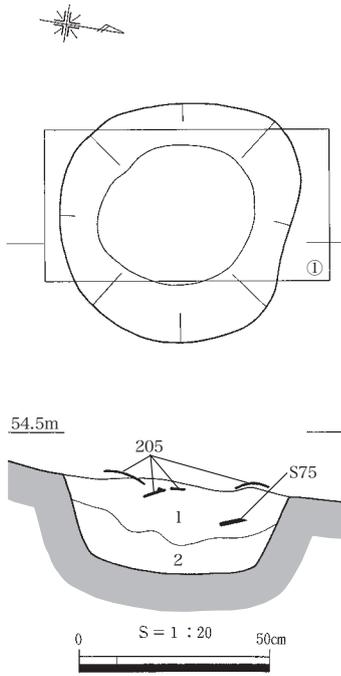
第115図 P11・119



1. 黒褐色土 (10YR2/2)
灰黄褐色土が斑状に混じる。しまり強。粘性強。

1. 黒褐色土 (10YR2/2)
0.3cm以下の炭化物微含。しまり強。
粘性強。

第116図 P89 ~ 92

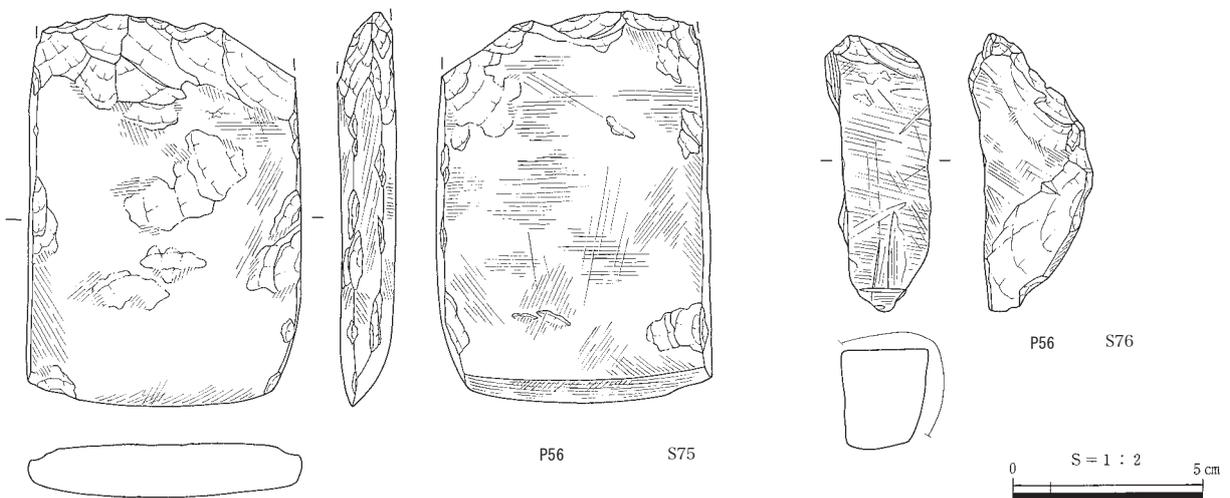
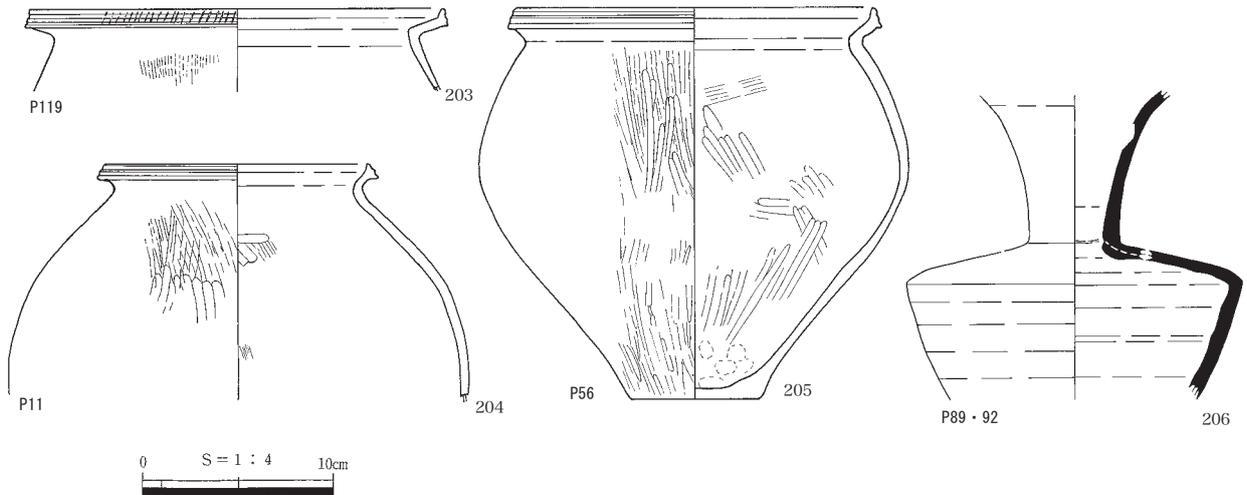


1. 暗褐色土 (10YR 3/4) 0.5~2cm大の炭化材片・0.5~1・大のホーキブロック少含。しまり弱。粘性強。(土器多量に包含。砥石・扁平片刃石斧出土。)
2. 褐色土 (7.5YR 4/4) 0.5~1cm大のホーキブロック・0.1cm大の炭化物粒少含。しまり弱。粘性強。



第117図 P56

写真12 P56遺物出土状況(北西から)



第118図 P11・56・92・119出土遺物

第3節 遺物包含層の調査

(1) 概要

尾根部では本章第1節で述べたように、表土下に堆積したⅡ層（暗褐色土）が遺物包含層となる。弥生時代中期後葉の遺物を主体とし、その時期を前後する遺物の存在はきわめて客体的である。それは検出された遺構についても同様で、弥生集落形成前後における当該尾根の利用は単発的な感がある。

また1区は北東部に浅い谷が挟入するが、今回調査対象地となった谷頭部分範囲でもまとまって遺物が出土した。谷部では大きく2枚の遺物包含層と2面の遺構面を確認しており、以下、中心ラインに設定したベルトの土層図によって基本層序を説明する。

①層：黒褐色土（Hue10YR3/2等）。本層は主に谷部でみられ、尾根上でも部分的に確認された。包含される遺物から律令期以降の堆積と推測される。①-3に伴って炭化物が集積していたが掘り込みや被熱面は無かった。また同層を埋土にもつ遺構も③-2層上面で確認した。これらの検出レベルには差があり、本来的には同層中に複数の生活面が存在すると考えるが、平面検出はできなかった。

②層：暗褐色土（Hue10YR3/3）。尾根部Ⅱ層に対応する。堆積は断続的で全面には広がらない。弥生時代中期後葉の遺物を主体とするが、微量ながら律令期の遺物を含む。

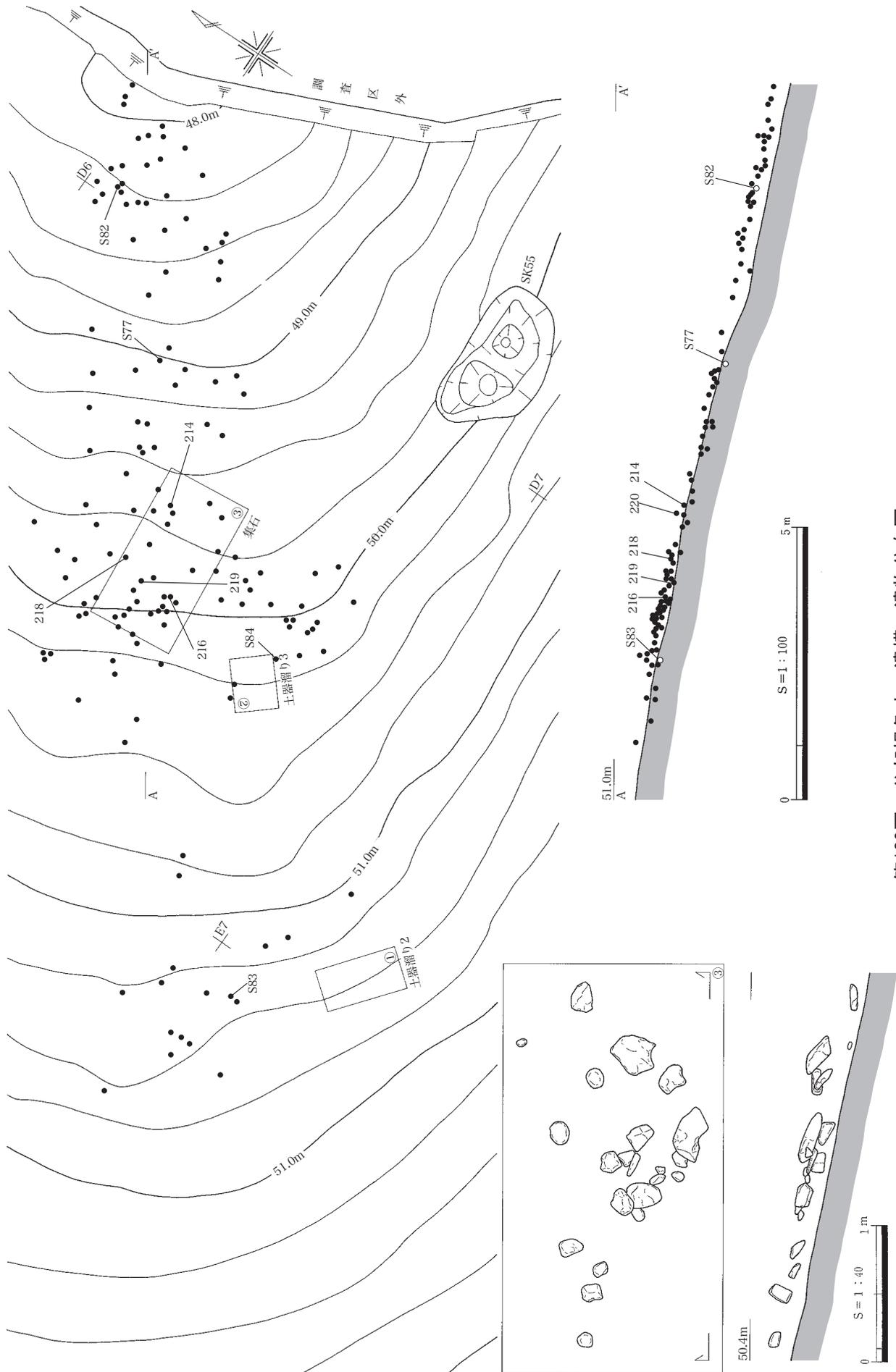
③層：褐色土。③-1層（10YR4/4）と③-2層（7.5YR4/4）に大きく分かれる。このうち、③-2層が谷部に広がる弥生時代中期中葉～後葉の遺物包含層である。遺物は主として谷筋に沿って出土しており、土器溜り2・3や集石は同層に覆われる（第120図）。③-2層上面では①・②層を埋土にもつピット群が検出され、第1遺構面とした。③-1層は尾根西側斜面部から鞍部（F4・5、G5グリッドなど）でも部分的に確認され、傾斜変換点付近の地形が低くなった箇所分布する。表土が薄い平坦面～斜面部にはみられない。弥生時代中期後葉の遺物を少量包含し、土器溜り1は同層に覆われていた。

④層：褐色土。④-1層（10YR4/6）は尾根部Ⅲ層に対応する。④-2層（7.5YR4/4）は③-2層とほぼ同色調だが粘性・しまりともに強く、炭化物や地山ブロックを含まない。④層以下が無遺物層となる。④-2層上面付近に土器溜り2・3および集石が形成されていた。

谷部・褐色土の遺構

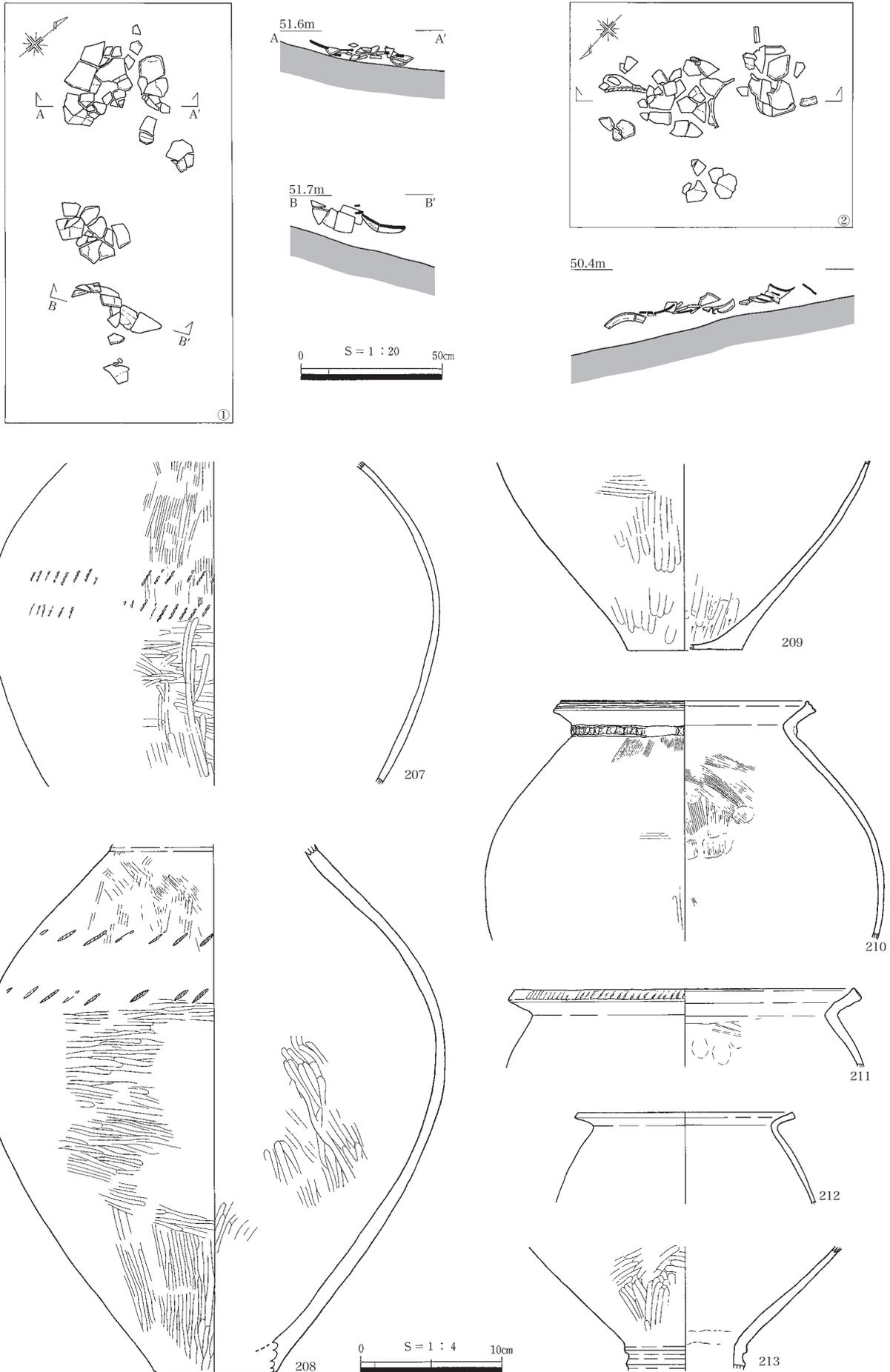
土器溜り2・3（第120・121図、PL.38・57）

土器溜り2はD7グリッド、谷の開口部に近い標高51.5mの斜面部、土器溜り3は谷筋にあたる標高50.2～50.3mの斜面部に形成されていた。どちらも③-2層に包含される。土器溜り2は幅1.3mにわたって比較的大きな破片が集まるが、土器溜り3は80×60cmの範囲に小片が集積している。別個の土器ブロックとして捉えていたが209は土器溜り3から出土した破片と接合することから、両者の形成時期はほぼ同じで、破碎した状態の土器を集めて別地点へ廃棄したものと推測する。207～209は壺の体部～底部で、外面調整は胴部最大径付近が横方向、以下を縦方向のヘラミガキという点で共通している。207・208は肩部から胴部最大径付近に貝殻腹縁、板小口による連続刺突文が施されている。208は内面をヘラミガキで調整している。210は壺で、口縁端部にめぐる凹線は細い溝状で沈線にちかい。頸部の貼付突帯には板小口による刺突が連続して施される。貼付後のナデつけはみられない。211～212は甕である。211はわずかに肥厚させた口縁端部に刻目を施す。212は薄手で、



第120図 谷部褐色土 遺構・遺物分布図

第3節 遺物包含層の調査



第121図 土器溜り2・3および出土遺物

外方へ短く屈曲して立ち上がる口縁端部には文様は施されない。213は脚付壺で、体部の底は円盤充填部分が剥落している。脚部外面には断面三角形の突帯が貼り付けられており、突帯間を凹線状にナデつけている。土器の特徴は概して弥生時代中期中葉(Ⅲ-3)を示す。(高尾)

集石 (第120図、PL.38)

D6グリッド、谷筋に近い標高49.6～50.2mの斜面部に位置し、2.7×1.5mの範囲に広がる。10～40cm大の扁平な礫が集積しており、③-2層に覆われる。標石の可能性も考えサブトレンチで断面も確認したが、下位に遺構は存在しなかった。弥生時代中期後葉の遺構と推測する。(高尾)

(2) 包含層出土遺物 (第120・122～129図、PL.58・59・61・62)

谷部・褐色土出土遺物 (第120・122図、PL.58・59・61・62)

214～217は甕である。214は上下に拡張・肥厚させた口縁部に凹線をめぐらせた後に刻目を施す。頸部には指頭圧痕貼付突帯がめぐる。215の突帯は頸部成形と同一化しており、外面に刺突文を入れた後、特に上半を強くナデつける。216・217は頸部に突帯をもたないもので、わずかに肥厚・拡張させた口縁端部に2～3条の凹線をめぐらせる。218・219は広口壺である。218は大きく開く口縁部に4条の凹線をめぐらせる。219は頸部下半に3条の断面三角形の突帯を貼り付け、突帯間を凹線状にナデつける。220は脚付壺で、脚部に突帯を貼り付けた後、やはりその間を凹線状にナデる。221は口縁を水平方向に拡張させる高坏である。口縁部はナデのみで凹線は入らない。214は弥生時代中期中葉(Ⅲ-3)～中期後葉(Ⅳ-1)、221は弥生時代中期中葉(Ⅲ-3)、その他は中期後葉(Ⅳ-1)のものとする。

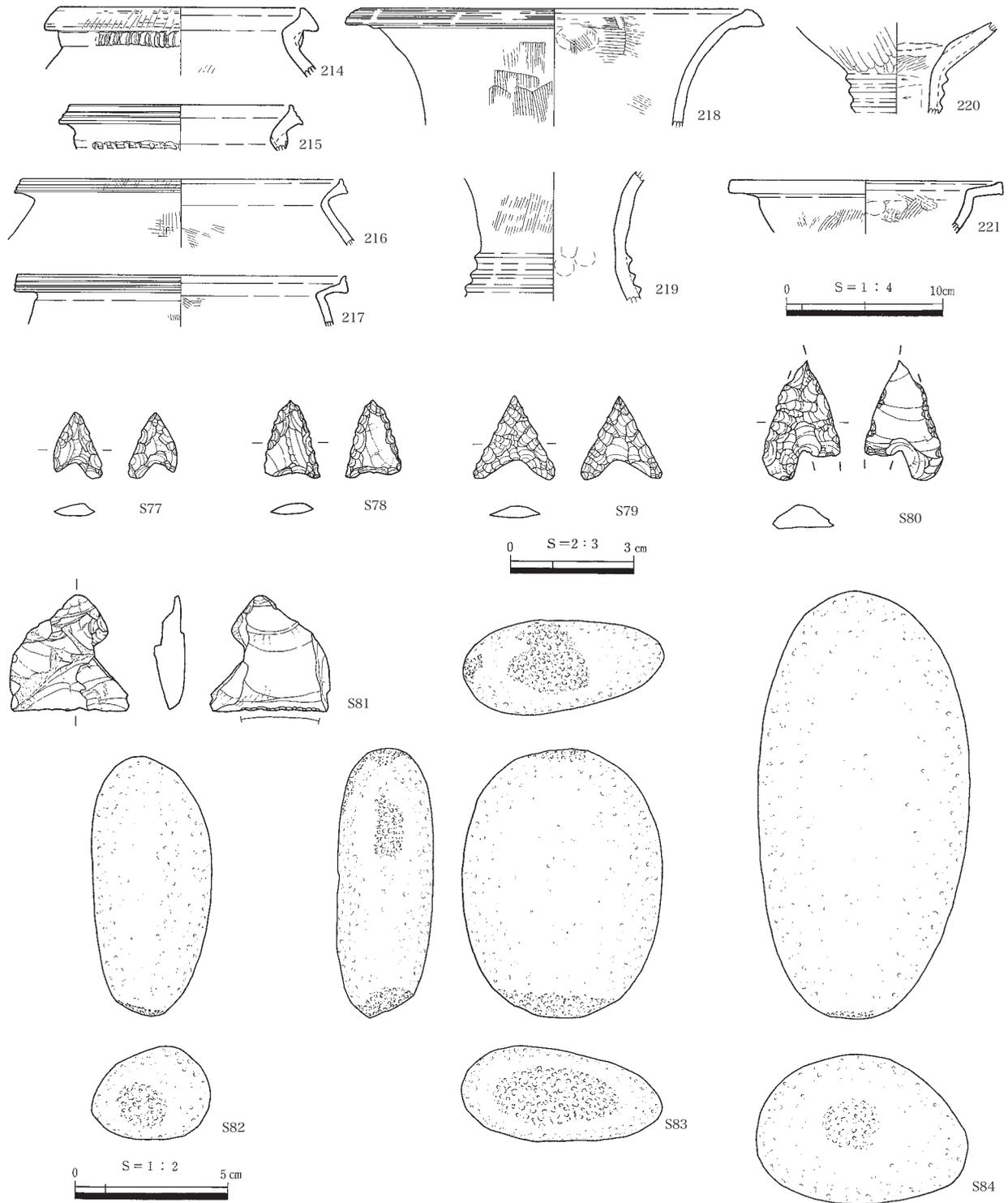
S77～79は凹基式の石鏃で、77・78がサヌカイト製、79が黒曜石製である。S79は基部の抉りが深く、ブーメラン形の平面形を呈す。S80は黒曜石製の凹基式石鏃未製品である。S81は微細剥離痕のある剥片で、石材はサヌカイトか。S82～84はいずれも敲石で、83は上下面のほか側面部にも敲打痕を有す。

谷部・黒褐色土～暗褐色土出土遺物 (第123図、PL.58・59・61・62)

222は壺で、斜め下方へ拡張した口縁部に刻目を施した後に4条の凹線をめぐらせ、3個一対の円形浮文を等間隔に貼り付ける。頸部には断面三角形の突帯を3本貼り付け、突帯間を凹線状にナデる。弥生時代中期後葉(Ⅳ-1)に比定される。223は無頸壺で水平方向に肥厚させた口唇部外面にヘラ描きの斜格子文(あるいは鋸歯文)を施す。胴部上半外面は平行する多条の沈線をめぐらせる。弥生時代中期中葉のものであろう。224・225は口縁部がくの字に立ち上がる土師器甕で、224は谷の最深部に近いトレンチ中から出土している。226・227は須恵器である。226は瓶の胴部下半とみられる。調整は内外面とも回転ナデである。227は坏底部で、風化・摩滅が著しいが底面に回転糸切り痕が確認できる。八橋X期併行、8世紀後半のものとする。S85・86はサヌカイト製の石鏃で、S85は細身の凹基式、S86は平基式である。S87は敲石で、中心部が使い込まれてくぼむ。

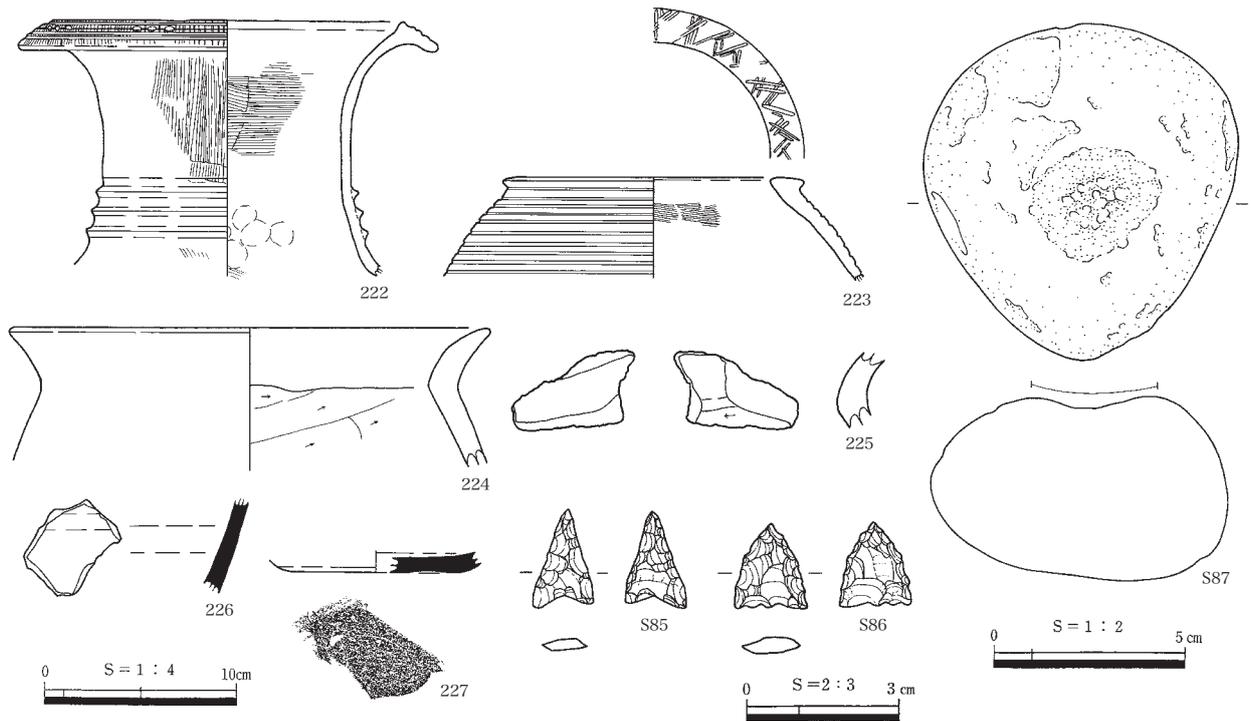
尾根部包含層出土遺物 (第124～129図、PL.58・59・61・62)

228・229は縄文土器である。228は深鉢の胴部片で、遺存状態は悪い。外面に長径約6mmほどのポ



第122図 包含層出土遺物 (1) (谷部・褐色土)

ジティヴな楕円文が縦位に密接施文される。縄文時代早期のものである。229も深鉢で、口縁端部に接するように突帯を貼り付け、浅く小さい刻目を施す。縄文時代晩期、古海式(濱田 2001)に比定されるものである。230～240は弥生土器である。230は口縁部下端に浅い刻目を施す甕で、内外面とも粗いハケ調整を行う。弥生時代前期のものである。231・232も甕で、口縁端部に刻目は施されず、外面に沈線もみられない。弥生時代前期後葉(I-3)に比定されよう。233は甕で、断面T字状に拡張した口縁部外面に4条の凹線をめぐらせる。頸部には口縁部とともに成形された突帯をめぐらせ、連続する刺突文を施した後にナデつける。234は甕より頸部の立ち上がりが長く、小型の壺と

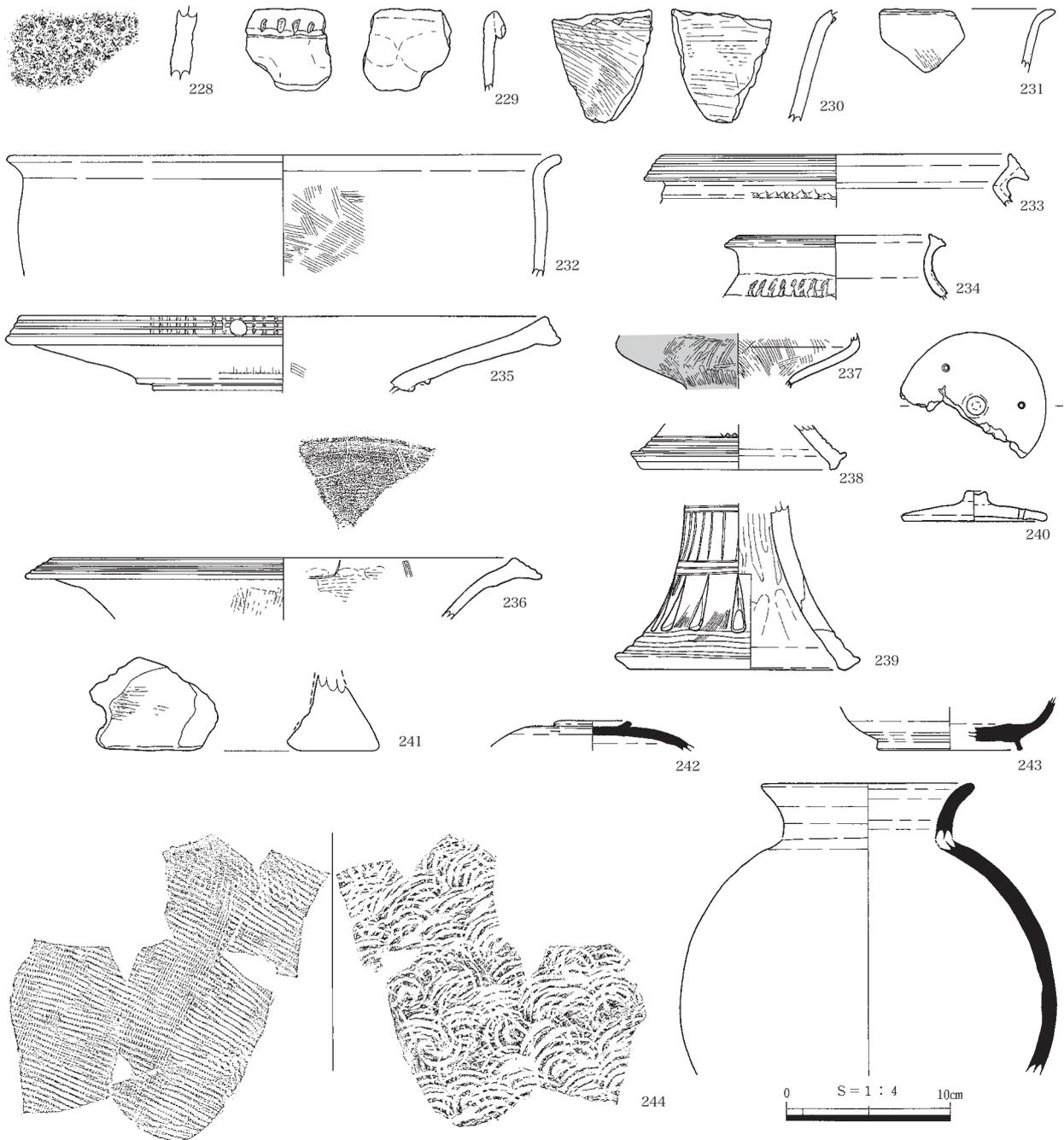


第123図 包含層出土遺物(2)(谷部・黒褐色～暗褐色)

なろうか。口縁部をわずかに拡張して3条の凹線をめぐらせ、頸部には薄く幅広の突帯を貼り付けて半截竹管状の工具による刺突文を2段に施して指頭圧痕貼付突帯状に仕上げている。235・236は広口壺である。235は頸部上端に断面三角形の突帯を貼り付けている。236は口縁部外面に4条の凹線をめぐらせ、内面にヘラ・櫛状工具による文様(記号文?)が認められる。237は台付壺の胴部で外面を赤色塗彩している。238・239は高杯の脚部である。238は外面にヘラ描きの鋸歯文を施す。239は沈線によって区画された文様帯を2段有し、下段には完全に貫通しない三角形の透孔を配し、上段には縦位の沈線を施す。上段の沈線文は透孔から意匠が変化したものと捉えられる。240は蓋で、紐綴じのための穿孔が2箇所残る。233～240は弥生時代中期後葉(IV-1～2)に比定されよう。241は移動式竈の基部片で、厚さや立ち上がりからすれば背面側にあたろうか。242～244は須恵器である。242は坏蓋で、天井部には輪状つまみがつく。接合しない微小な破片だが同一個体と思われる口縁部も出土しており、短く屈曲し、かえりをもたないものであった。八橋X期・陰田10期併行、8世紀後半のものとする。243は高台の付く坏である。八橋X期に比定されよう。244は横瓶で、口縁部と胴部は接合しないが胎土等から同一個体と判断した。短く外反して立ち上がる口縁部は内外面とも回転ナデ調整する。胴部は外面が平行タタキ後カキ目、内面が円弧文タタキの後下半を中心にユビオサエで調整している。八橋VII期・TK209型式に比定されるものとする。

S88は大半を欠失するがナイフ形石器の基部とみられ、石材は玉髓である。S89は玉髓製の楔形石器である。S90は石鏃未製品、S91～104は石鏃である。S91～98は黒曜石製、S90・99～104がサヌカイト製である。黒曜石製の石鏃は逆刺を欠失しているものもあるが概して抉りの深い凹基式で、平面形が正三角形に近いものと細長い三角形を呈すものとがみられる。S99は小型だが抉りの深いブーメラン形を呈すもので、S100～102はいずれも抉りの浅い凹基式である。S103・104は平基式で、103は正三角形に近いタイプ、104は細長いタイプである。

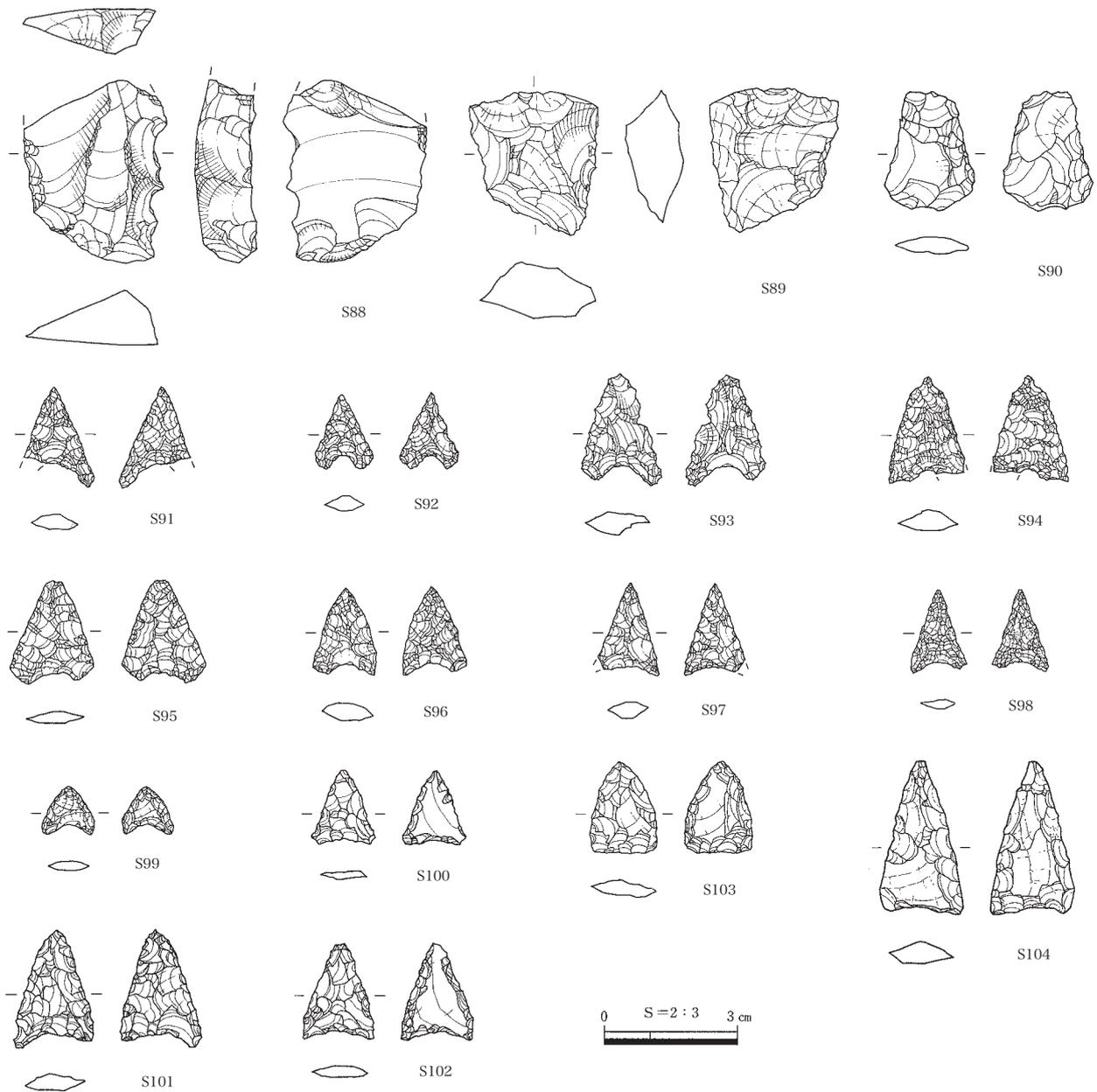
S105・106は打製石剣で、石材はいずれもサヌカイトとみられる。105は大部分を欠失しており全



第124図 包含層出土遺物 (3)

体形が窺えないが、106は両側縁が平行するタイプで大型品となろう。丁寧な整形剥離によって左右対称に仕上げられている。S107・108は石鋏である。107は小型で平面形が撥形を呈すタイプ、108は基部中央がわずかにくびれ刃部が開く大型の有肩タイプである。107はF5、108はF6グリッドから出土したが、同グリッドからG5・6にかけては突帯文土器や弥生前期の土器も少量ながらまとまって出土している。

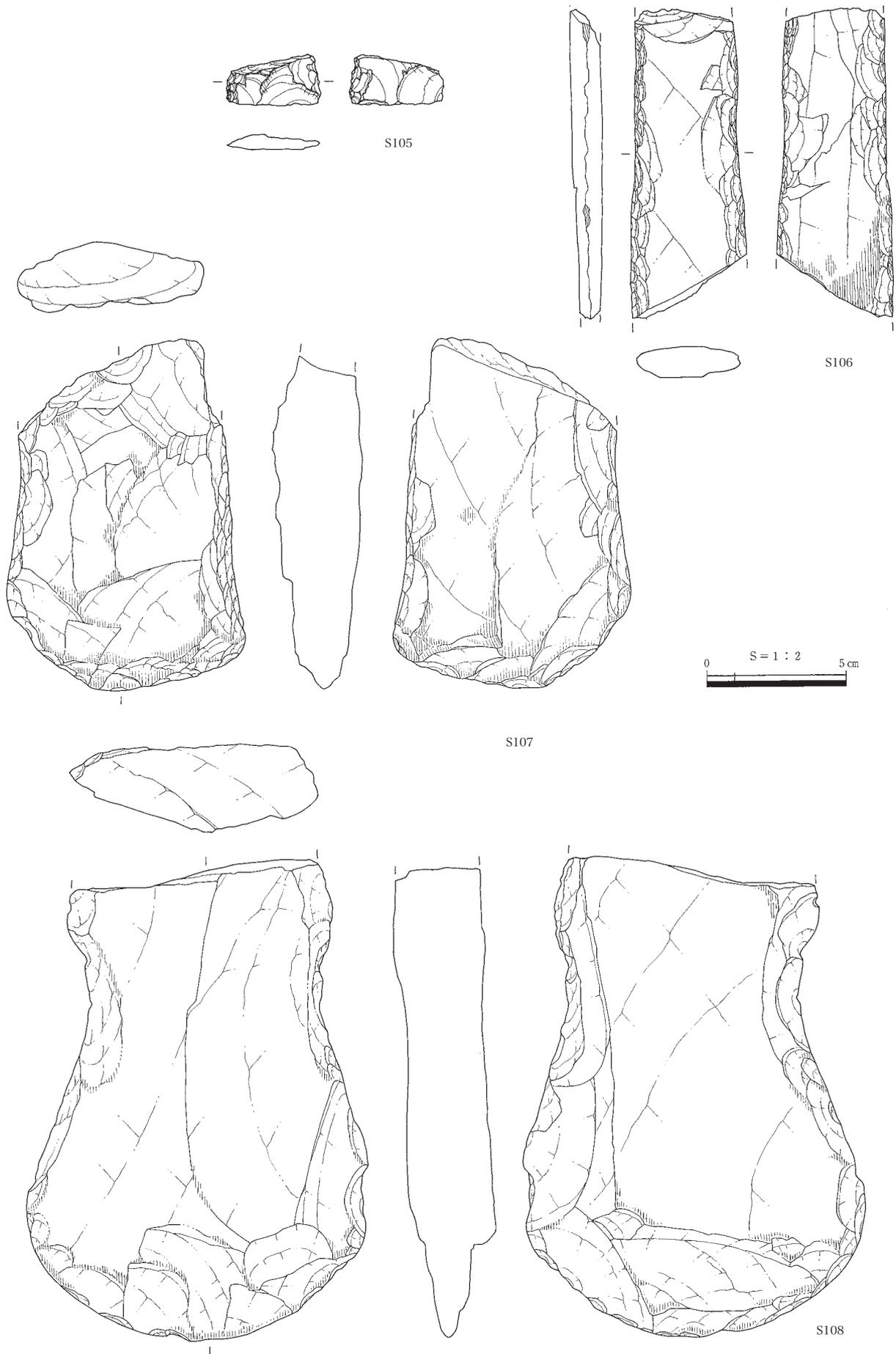
S109・118は両刃石斧で、S111も基端部・刃部を欠失しているが形状から両刃石斧と思われる。109は基端部がやや丸みをもつ平基で、研磨は完全でなく一部整形時の敲打痕を残す。刃部は潰れが目立つ。S110・112は扁平片刃石斧である。110は両側縁の中央付近を敲打し、わずかにくびれさせている。横断面形は完全な長方形とならず、凸レンズ状を呈す。112は基端部が丸みをもつ平基で、刃縁は使い込まれて偏刃となる。S113は鑿状片刃石斧である。平面形は基部がやや狭い長台形



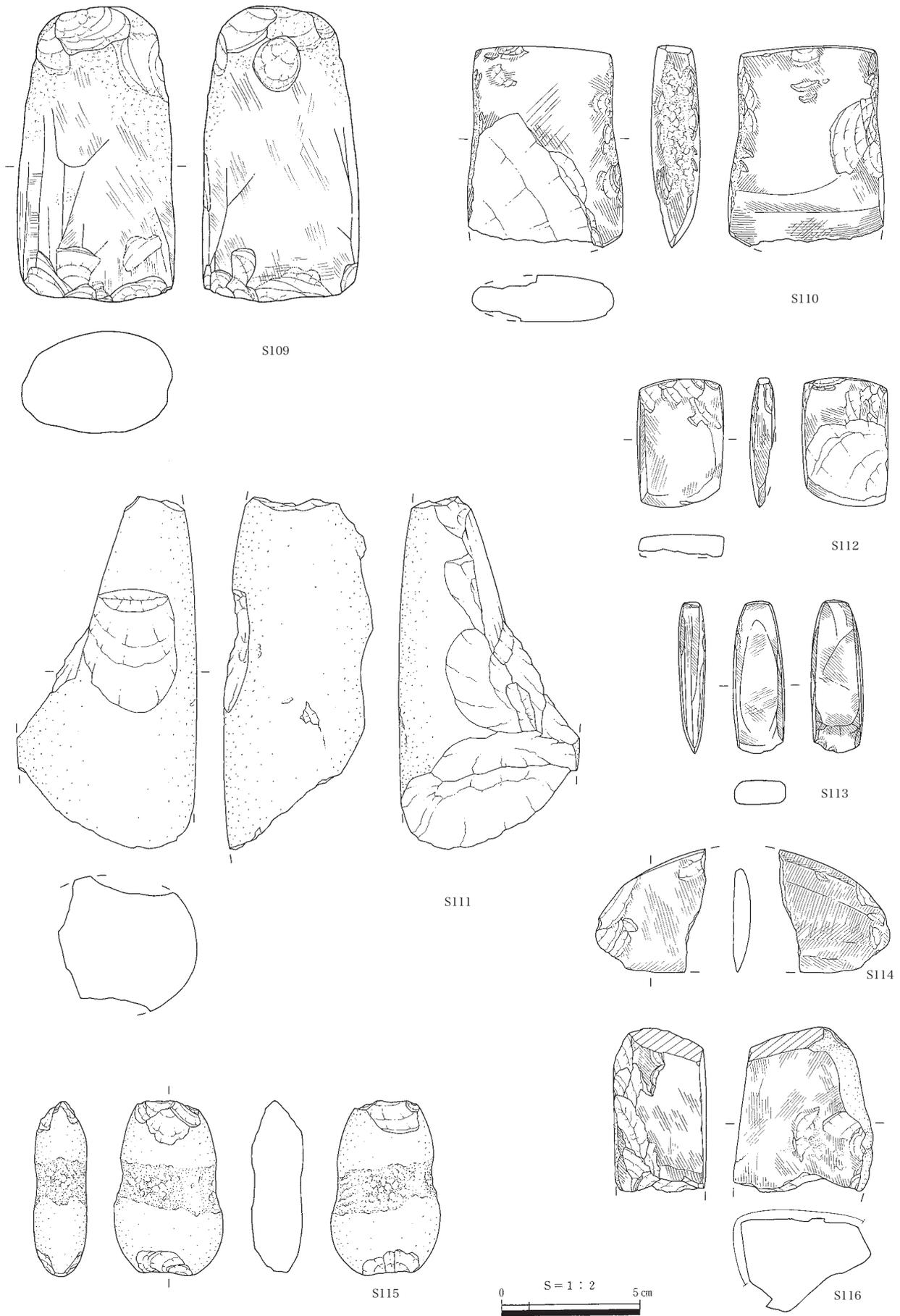
第125図 包含層出土遺物（4）

で、丁寧に研磨されて全体的に丸みをもつ。横断面形は厚みよりも幅が大きく角が丸い長方形を呈す。S114は石庖丁で、平面形は弧背直刃で端部が丸い形状となる。S115は扁平な小型礫を用いた石錘で、器体中央に幅広で浅い溝をめぐらせるとともに、上下端も打ち欠きを行う。S116は砥石、S117は凹石、S119・120は敲石である。S121は研磨痕のある礫で、金属器によるものとみられる溝が刻まれている。

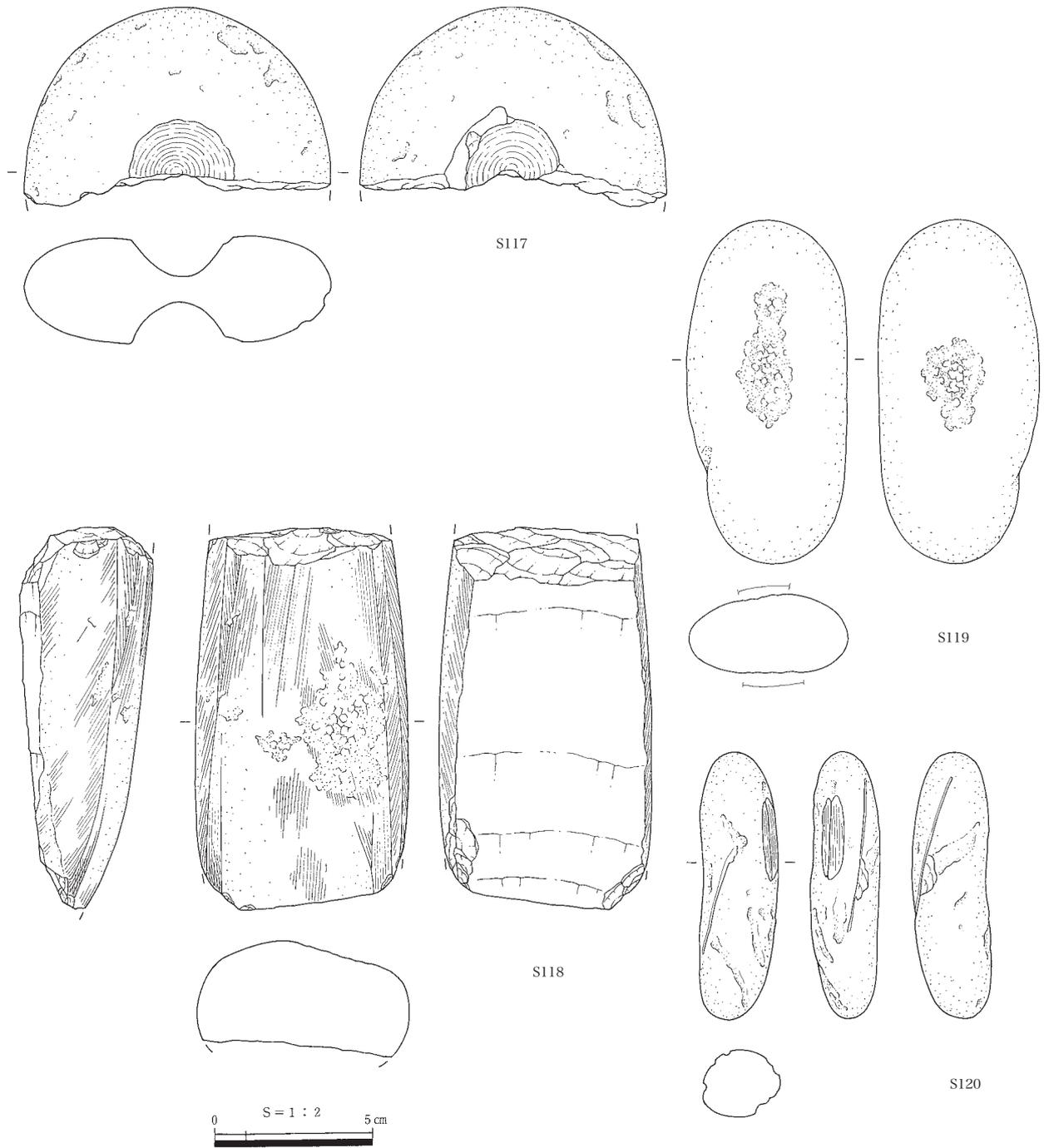
F2は錆膨れと層状剥離が著しいが板状鉄斧で、推定身部厚は6～7mmとなろう。F3・4は小型の不明鉄器片で、加工痕は認められない。（高尾）



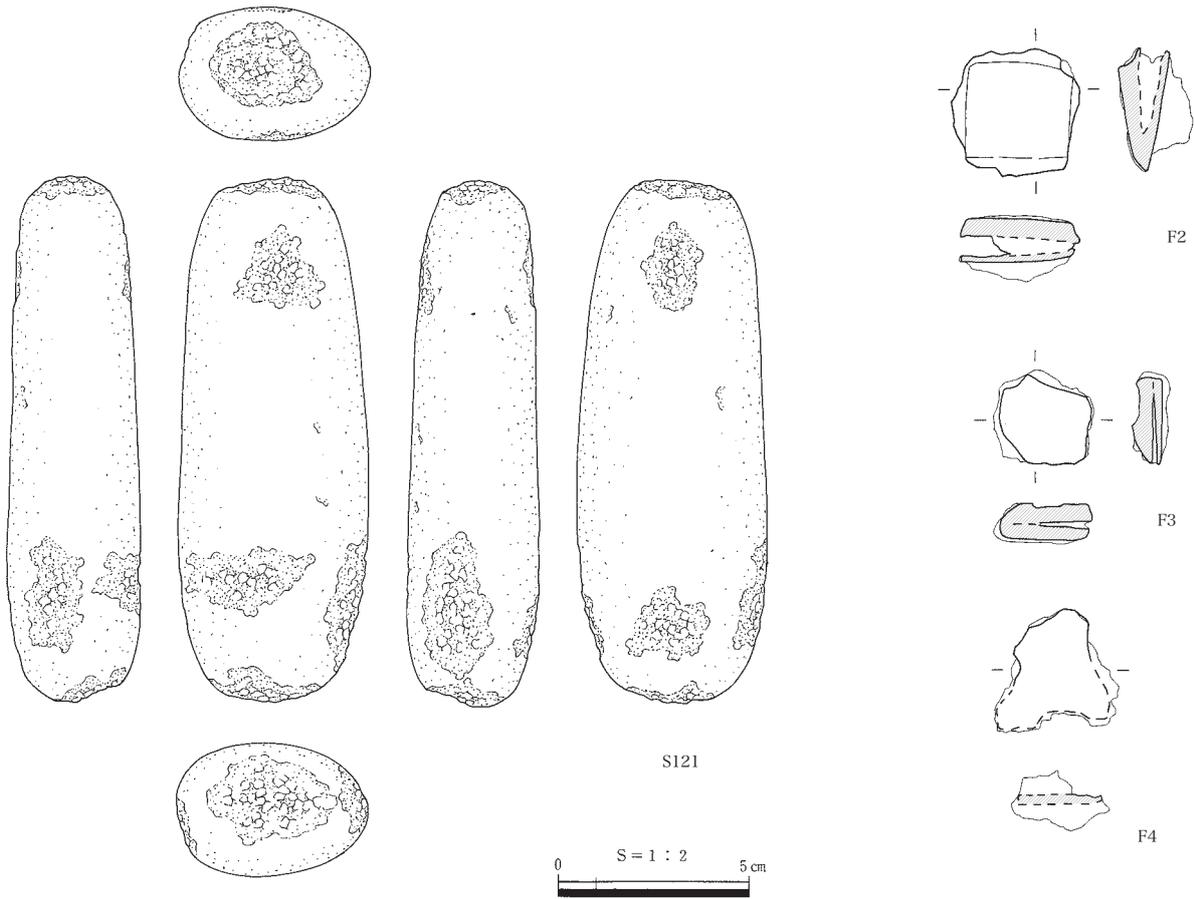
第126図 包含層出土遺物 (5)



第127図 包含層出土遺物 (6)



第128図 包含層出土遺物（7）



第129図 包含層出土遺物 (8)

表 14 出土土器観察表 (1)

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
1	SI1	弥生土器	※ 18.1	口縁~胴部	外面：口縁部2条の凹線、胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ヘラケズリ後ヘラミガキ	やや密 1~2mm 長石・石英多含	外面：橙色 内面：橙色	やや 良	
	2層	甕	△ 23.1	1/4					
2	SI1	弥生土器	※ 15.0	口縁~胴部	外面：口縁部3条の凹線、ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	密 1mm 石英・雲 母を少含	外面：橙色 内面：黄褐色	良好	胴部に煤付着
	埋土中	甕	△ 10.6	1/4					
3	SI1	弥生土器	※ 17.2	口縁~肩部	外面：口縁部3条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 1mm 長石を少 含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	外面に煤付着
	埋土中	甕	△ 6.2	1/4					
4	SI1	弥生土器	※ 8.50	全体	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部調整不明	密 1mm 白色砂粒 小含	外面：橙色 内面：橙色	良好	底径 6.5 cm
	床面	無頸壺	△ 14.6	1/2					
5	SI1	弥生土器	※ 25.0	口縁部	外面：口縁部4条の凹線後刻目、円形浮文4ヶ所 内面：ヨコナデ	密 0.5mm 雲母を 少含	外面：明黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
	埋土中	壺	△ 2.6	1/4					
6	SI1	弥生土器	※ 21.8	坏部	外面：口縁部3条の凹線、円孔 内面：調整不明	やや密 0.5mm 白色 黒色砂粒少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良	
	埋土中	高坏	△ 5.8	1/3					
7	SI1	弥生土器	—	脚部	外面：坏底部ハケ後ナデ、脚部ハケメ後ナデ、裾部ヨコナデ 内面：脚部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ	密 1mm 白色砂 粒・雲母小含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	底径 11.3 cm
	1層	高坏	△ 14.65	ほぼ完存					
8	SI2	弥生土器	※ 17.0	口縁~胴部	外面：口縁部3条の凹線、ナデ、胴部ハケメ後ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケ後指オサエ、胴部ハケメ	密 2mm 以下赤 褐色砂粒・雲母	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	胴下半に黒斑
	床面	甕	△ 14.7	1/2					
9	SI2	弥生土器	—	胴~底部	外面：成形後板状工具によるタタキ 内面：指オサエ	密 1mm の白色 砂粒	外面：淡黄褐色 内面：淡黄色	良好	底径 4.0 cm
	1層	小型壺	△ 5.9	完存					
10	SI3	弥生土器	※ 18.0	口縁~胴部	外面：口縁部2条の凹線、ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ、ナデ、指オサエ	密	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好	
	埋土中	甕	△ 10.7	1/4					
11	SI3	弥生土器	—	脚部	外面：脚部ナデ、9条の沈線、裾部1条の凹線 内面：ナデ、シボリ痕、裾部ヨコナデ	やや密	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
	埋土中	高坏	△ 6.2	1/4					
12	SI3	弥生土器	※ 16.6	口縁部	外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケメ 内面：調整不明	やや密 2mm 長 石・石英を多含	外面：橙色 内面：淡黄色	良好	
	埋土中	甕	△ 3.4	1/4					
13	SI3	弥生土器	—	口縁部	外面：口唇部刻目、頸部2条以上のヘラ描沈線 内面：調整不明	やや密 2mm 長 石・石英を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
	埋土中	甕	△ 4.6	1/10					
14	SI3	弥生土器	※ 24.6	口縁部	外面：口唇部刻目、調整不明 内面：調整不明	やや密 2mm 長 石・石英多含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
	埋土中	壺	△ 4.9	1/4					
15	SI4	弥生土器	※ 21.8	口縁~胴部	外面：口縁部3条の凹線・ナデ、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ、指オサエ	密 2mm 灰褐色砂 粒・石英を少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良	胴部中位煤付着
	埋土中	甕	△ 14.1	1/3					
16	SI4	弥生土器	※ 20.1	口縁~胴部	外面：口縁部に3条の凹線、頸部刻目貼付突帯→上半ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ、一部指オサエ 内面：ハケメ、指オサエ	密 1~2mm の長石・石英 雲母・赤褐色砂粒多含	外面：淡黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
	埋土中	甕	△ 17.6	1/4					

表 15 出土土器観察表(2)

遺物No.	遺 構 層 位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部 位	調整・文様	胎 土	色 調	焼成	備 考
17	S14 埋土中	弥生土器 甕	※19.0 △3.8	口縁部 1/8	外面：口縁部2条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面：口唇部ヨコナデ、頸部調整不明	密 2mm 長石・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
18	S14 埋土中	弥生土器 甕	16.7 △15.6	口縁~胴部 2/3	外面：口縁部2条の凹線、胴上部ハケメ、頸部穿孔 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ケズリ	密 1~4mmの長石・石英・赤褐色砂粒多含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	内面部分的に煤付着
19	S14 埋土中	弥生土器 甕	※14.4 △19.9	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部2条の凹線、調整不明 内面：調整不明、胴下部ケズリ	密 1mm 砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	内外面に点状に煤付着
20	S14 埋土中	弥生土器 壺	※13.8 △12.25	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、頸部に刺突、胴部ハケメ 内面：調整不明	密 1mm の長石・石英	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
21	S14 埋土中	弥生土器 甕	— △30.2	頸~底部 3/4	外面：胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ、底部ヘラミガキ後ヨコナデ 内面：肩部ハケメ、胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ、底部付近ナデ	密 2mm の長石・石英・雲母多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面中位、内面下半煤付着
22	S14 埋土中	弥生土器 甕	— △8.0	底~脚部 完存	外面：底部調整不明、脚部ヨコナデ、底面ナデ 内面：胴下部ハケメ、ナデ	密 0.5mm 長石・雲母を少含石英少含	外面：褐灰色 内面：黄褐色	良好	前下部外面二次的な変態による剥離? 煤付着
23	S14 埋土中	弥生土器 甕	— △17.7	胴~底部 完存	外面：胴部上段ハケメ、下段ヘラミガキ、底面ナデ 内面：胴部上段ハケメ、下段ケズリ、底面ナデ、指オサエ	密 2mm 長石・石英を少含	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好	胴下部国産底径7.6cm
24	S14 埋土中	弥生土器 甕	— △12.3	底部 ほぼ完存	外面：下半ヘラミガキ、底部ナデ 内面：ヘラケズリ、底部指オサエ・ナデ	密	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面下半に煤付着
25	S14 埋土中	弥生土器 甕	※17.3 △10.1	口縁~肩部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、ナデ、頸部貼付突帯→刺突、肩部波状文、櫛描文、胴部波状文 内面：口縁部ナデ、肩部調整不明、胴部ハケメ、指オサエ	密 0.5mm 長石を少含	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好	
26	S14 埋土中	弥生土器 脚付壺	— △12.9	底~脚部 1/4	外面：底部ハケ後ヘラミガキ、脚部ハケ後4条以上の凹線 内面：底部ハケメ、底部指オサエ、脚部シボリ痕、ナデ	密 1mm 長石・石英・雲母	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
27	S14 埋土中	弥生土器 高坏	※12.7 △4.8	坏部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、坏部ハケメ後指オサエ、ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、坏部ハケメ後ナデ	密 0.5mm 長石・雲母を少含	外面：灰白色 内面：黄褐色	良好	坏部外面黒斑
28	S14 埋土中	弥生土器 高坏	※21.2 △3.0	坏部 1/4	外面：3条の凹線 内面：ナデ	密 1mm 長石・石英を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
29	S14 埋土中	弥生土器 高坏	— △6.8	脚部 1/4	外面：上段4条以上の凹線、下段9条の凹線、凹線後三角形透孔未貫通、裾部2条の凹線 内面：ナデ	密 0.5mm 長石を少含	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	裾部外面に黒斑
30	S15 埋土中	弥生土器 甕	※17.4 △6.9	口縁部 1/2	外面：口縁部3条の凹線後ギザミ、頸部刻目貼付突帯、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後ヨコナデ	密 1mm 長石・雲母小含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
31	S15 埋土中	弥生土器 甕	※20.0 ※6.2	口縁部 1/4	外面：口縁部4条の凹線、頸部貼付突帯→刺突→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：調整不明	密 1~2mm の長石・石英	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
32	S15 埋土中	弥生土器 甕	※18.0 △6.3	口縁~肩部 1/10	外面：口縁部3条の凹線後刻目、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面：肩部斜めハケ後、縦ハケメ	密 0.5mm 白色砂粒を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
33	S15 埋土中	弥生土器 甕	※21.6 △8.2	口縁~肩部 1/8	外面：口縁部2条の凹線後刻目、頸部貼付突帯→刻目→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部工具によるナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	肩部煤付着
34	S15 埋土中	弥生土器 甕	△21.4 ※12.3	上部 1/2	外面：口縁部刻目後2条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯後ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：ナデ	密 1mm 長石・雲母	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
35	S15 埋土中	弥生土器 甕	— △21.9	下部 底部完存	外面：胴上部板状工具による刻目、下部ヘラミガキ 内面：調整不明、指オサエ	密	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
36	S15 埋土中	弥生土器 甕	— △3.9	底部 完存	外面：ヘラミガキ、底面ナデ 内面：調整不明	密 1mm 長石・石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	底径 5.6cm
37	S15 埋土中	弥生土器 甕	— △5.0	底部 1/2	外面：ヘラミガキ、底部ミガキ後ヨコナデ 内面：ヘラケズリ後ナデ、下端部指オサエ	密 2mm 以下の長石・石英・輝石	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
38	S15 埋土中	弥生土器 甕	※9.9 △6.9	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、肩部付近ヨコナデ、胴部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ、胴部ハケメ後ヘラミガキ	密 0.5mm 白色砂粒を少含	外面：黄褐色 内面：褐灰色	良好	
39	S15 埋土中	弥生土器 壺	△19.4 △6.4	口縁部 1/4	外面：口縁部3条の凹線後ギザミ、頸部に4条以上の凹線 内面：調整不明	密 2mm 以下の長石・石英	外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好	
40	S15 埋土中	弥生土器 壺	※22.9 △10.2	口縁部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、頸部ハケメ・3条以上の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ・指ナデ	密 2mm の長石・石英。砂粒を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
41	S15 埋土中	弥生土器 壺	※23.2 △8.8	口縁部 2/3	外面：口縁部3条の凹線、頸部ハケメ、1条以上の凹線 内面：調整不明、指頭圧痕	密 1mm 長石・雲母	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
42	S15 埋土中	弥生土器 脚付壺	— △7.3	底~脚部 1/3	外面：胴底部ヘラミガキ、脚部貼付突帯条以上 内面：胴底部円盤充填後ハケメ後ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ	密 1mm 砂粒を多含	外面：灰黄褐色 内面：黄褐色	良好	
43	S15 埋土中	弥生土器 高坏	※13.4 △5.1	坏部 1/10	外面：口唇部・口縁部各2条の凹線、坏部ハケメ 内面：口縁部ナデ、坏部指オサエ、ナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：褐灰色 内面：褐灰色	良	
44	S15 埋土中	弥生土器 高坏	— △8.4	脚部 1/4	外面：上端2条ヘラ描沈線、三角形透孔、3条の凹線、裾部ナデ 内面：坏底面ハケメ後指オサエ、脚部ナデ、下部ハケメ後ナデ	密 1mm 長石・雲母・微細砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
45	S15 埋土中	弥生土器 高坏	— △5.7	脚部 1/5	外面：4条の凹線→上段・下段に三角形透孔未貫通、裾部ヨコナデ 内面：調整不明	密 1mm 長石・石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
46	S16 埋土中	弥生土器 甕	※17.5 △11.6	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部1条の凹線、胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指オサエ、胴上部ハケメ、下部調整不明	密 1mm 長石・石英・雲母を少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
47	S16 埋土中	弥生土器 甕	※14.4 △14.0	口縁~胴部 1/8	外面：口縁部2条の凹線、肩部~胴部中位タキ後ハケメ、後にヘラミガキ 内面：口縁~頸部ヨコナデ、肩部ハケメ後指オサエ、下部ヘラミガキ	密 0.5mm 長石を少含	外面：褐灰色 内面：褐灰色	良好	内外面に煤付着
48	S16 埋土中	弥生土器 甕	17.0 △16.9	上部 完存?	外面：口縁部1条の凹線、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	密 細砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
49	S16 床面	弥生土器 甕	16.4 30.15	口縁~底部 ほぼ完存	外面：口縁部2条の凹線、頸部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ・一部ヘラミガキ、下部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1mm 砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	胴下部内外面煤付着
50	S16 床面	弥生土器 甕	24.9 △16.7	上部 3/4	外面：口縁部3条凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ	密 1mm 砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	胴下部内外面煤付着
51	S16 埋土中	弥生土器 甕	※21.2 △19.2	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明 内面：調整不明	密 1mm 長石・石英・雲母を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
52	S16 床面	弥生土器 甕	※14.0 △7.8	口縁~肩部 1/3	外面：調整不明 内面：調整不明	密 1mm 長石・石英・雲母	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面煤付着
53	S16 埋土中	弥生土器 壺	— △14.6	下部 1/2	外面：胴上部ハケ後ヘラミガキ、下部ヘラミガキ 内面：調整不明	密 細砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
54	S16 埋土中	弥生土器 手付土器	※7.2 △3.8	口縁~胴部 1/3	外面：指ナデ 内面：口縁部ハケメ、胴部指ナデ・指オサエ・シボリ痕	密 1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	内外面に点状に煤付着
55	S16 床面	弥生土器 壺	— △38.5	頸~底部 ほぼ完存	外面：頸部ハケメ・3条の貼付突帯、肩部ハケメ、胴部以下ハケメ後ヘラミガキ 内面：頸上部指ナデ、頸下~胴上部ハケメ後指頭圧痕	密 2mm の長石・石英、0.5mm 白色砂粒を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	外面下部煤付着 底部内面赤色化 底径7.6cm

表 16 出土土器観察表(3)

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
56	S16 埋土中	弥生土器 器台?	△ 13.5	脚部 ほぼ完存	外面：上段凹線2条以上、長方形透孔、ヘラミガキ後縁杉文、4条の凹線、ヘラミガキ後ハケ、甕面(L)、長方形透孔 内面：脚部指ナデ、裾部ヨコナデ	密 4mm長石・石英を少含	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好	底径 15.5
57	S16 埋土中	弥生土器 高坏	※ 19.0 △ 5.1	坏部 1/8	外面：口縁部ヨコナデ、坏部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、坏部ヘラミガキ	密 3mm長石・石英を少含	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好	鋤形口縁
58	S17 埋土中	弥生土器 甕	※ 19.0 △ 2.5	口縁部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文 内面：ヨコナデ	密 0.5mm長石・雲母を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
59	S17 3層	弥生土器 壺	※ 21.4 △ 7.7	口縁部 ?	外面：口縁部2条の凹線、頸部2条以上の凹線 内面：ハケメ後指オサエ	密 1mm白色砂粒	外面：淡黄橙色 内面：淡黄橙色	良好	
60	S18 3層	弥生土器 甕	※ 18.4 △ 5.7	口縁~肩部 1/5	外面：口縁部4条の凹線後刻目、頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 0.5mm白色砂粒・赤褐色砂粒を少含	外面：淡黄橙色 内面：淡黄橙色	良好	
61	S18 3層	弥生土器 甕	※ 26.6 △ 6.9	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部刻目、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 1mm白色砂粒・黒褐色砂粒・雲母を多含	外面：淡黄橙色 内面：淡黄色	良	
62	S18 3層	弥生土器 甕	※ 22.2 △ 6.5	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 2mm白色砂粒・黒褐色砂粒・雲母を少含	外面：橙色 内面：黄橙色	良	
63	S18 3層	弥生土器 台付鉢	△ 4.3	口縁部 1/4	外面：口唇部ヘラ描2本単位の斜格子文、口縁部刻目、体部貼付突帯3条以上、棒状浮文3本 内面：ヨコナデ	密 0.5mm白色砂粒・雲母を多含	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好	注口あり
64	S19 2層	弥生土器 壺	※ 24.0 △ 5.4	口縁部 1/3	外面：口縁部3条の凹線後刻目・3個一対の円形浮文、ヨコナデ 内面：ハケ後ヨコナデ	密 0.5mm白色砂粒・雲母を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
65	S19 2層	弥生土器 甕	※ 21.6 △ 6.2	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、頸~肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指オサエ、ナデ	密 5mm白色砂粒・石英	外面：暗灰黄色 内面：黄橙色	良好	
66	S19 2層	弥生土器 甕	※ 18.3 △ 29.9	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部2条の凹線、胴上部ヨコハク後タテハケ、下部ハケ後ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケ後指オサエ、下部ヘラケズリ	密 1mm砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良	胴外面下部煤付着
67	S19 2層	弥生土器 壺	△ 19.4	胴~底部 完存	外面：胴部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：胴部ヘラミガキ一部指オサエ、底部ナデ	密 1.5~2mm石英・1mm白色砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好	
68	S19 2層	弥生土器 高坏	△ 8.8	脚部 完存	外面：上段ヘラミガキ、下段10条の凹線、裾部凹線1条 内面：坏底部円盤充填、脚上段指ナデ、シボリ痕、裾部ヨコナデ	密 0.5mm白色砂粒を少含	外面：淡黄橙色 内面：淡黄橙色	良好	
69	S19 埋土中	弥生土器 高坏	※ 20.4 △ 3.5	坏部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、坏部調整不明 内面：調整不明	密 1mm白色砂粒・雲母を多含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
70	SI10 埋土中	弥生土器 甕	※ 19.2 △ 10.0	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部3条の凹線・下部ナデ、頸部貼付突帯→刻目→ナデ、肩部ハケメ 内面：口縁~頸部ナデ、肩部ハケメ後ナデ	密 2mm長石・石英・赤褐色砂粒を多含	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良	肩部黒斑
71	SI10 埋土中	弥生土器 甕	※ 16.1 △ 7.7	口縁~肩部 1/6	外面：口縁部2条の凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後指ナデ	密 1mm長石・雲母・細砂粒	外面：明黄橙色 内面：明黄褐色	良好	
72	SI10 埋土中	弥生土器 台付壺	△ 12.5	頸~底部 3/4	外面：頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、脚部ミガキ後ヨコナデ 内面：胴上部ヘラミガキ後指ナデ、胴下部ケズリ後ナデ・指頭圧痕	密 0.5mm砂粒を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
73	SI10 埋土中	弥生土器 小型壺	5.7 8.6	全体 ほぼ完存	外面：指頭圧痕 内面：口縁~胴部ナデ、底部部指頭圧痕	密 細砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
74	SS1 床面	弥生土器 壺	※ 31.2 △ 68.5	全体 1/4	外面：口縁部3条の凹線後刻目・円形浮文、頸部波状文・3条の貼付突帯・指頭圧痕貼付突帯、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口唇部指頭圧痕貼付突帯、波状文、胴部調整不明、底部指オサエ	密 3mm石英・雲母を少含	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	良	底径※ 15.6cm
75	SS1 2層	弥生土器 甕	※ 17.0 △ 6.7	口縁~肩部 1/3	外面：口縁部2条の凹線、調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 1mm白色砂粒を多含	外面：淡黄色 内面：橙色	良好	
76	SS1 床面	弥生土器 甕	△ 16.2	頸~胴部 1/4	外面：胴部上半ハケメ、下半ヘラミガキ 内面：頸部ヨコナデ、胴中位指オサエ	密 3mm長石・石英・雲母を多含	外面：黄褐色 内面：暗灰黄色	良好	胴部最大径 22.7cm
77	SS1 2層	弥生土器 高坏	△ 5.6	脚部 1/4	外面：上段3条の凹線、下段4条の凹線、凹線間ナデ後三角形透孔、裾部ナデ 内面：ナデ	密 1mm黒色砂粒	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	良好	
78	SS1 2層	弥生土器 高坏	△ 12.6	脚部 1/3	外面：凹線上段21条・下段8条、凹線間三角形未貫通透孔裾部ヨコナデ 内面：上段シボリ、ハケメ	密 1.5mm白色砂粒・石英を多含	外面：橙色 内面：明褐色	良好	
79	SS2 1層	弥生土器 甕	※ 20.3 △ 5.8	口縁~頸部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部以下調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 2mm長石・石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
80	SS2 1層	弥生土器 壺	※ 25.0 △ 7.8	口縁~頸部 1/3	外面：口縁部6条以上の凹線、頸部2条以上の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指オサエ、指ナデ	密 1mm長石・石英・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
81	SS2 1層	弥生土器 広口壺	※ 16.0 △ 8.9	口縁部 3/4	外面：口縁部刻目後2条の凹線、頸部ナデ・3条の貼付突帯・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ケズリ後ナデ	密 やや密 2mm白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：黄褐色	良好	
82	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 10.6 △ 9.5	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、下部上方向のヘラケズリ	密 0.5mm白色砂粒	外面：黄褐色 内面：淡黄褐色	良好	肩部以下被熱による剥離
83	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 13.8 △ 24.5	全体 1/2	外面：口縁部凹線、肩部ハケメ、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、肩部指オサエ、胴部ミガキ・下部ケズリ	密 0.5mm白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	やや不良	全体に煤付着
84	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 19.4 △ 10.8	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、肩部ハケメ、胴部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指オサエ、胴部調整不明	密 0.5mm白色砂粒・雲母を少含	外面：橙色 内面：橙色	良	
85	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 18.2 △ 24.4	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部2条の凹線、胴部ハケメ、下部ハケ後ヘラミガキ 内面：頸部ヨコナデ、胴部ハケ後指頭圧痕、下部ケズリ後一部指オサエ	密 2mm長石・黒褐色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良	
86	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 17.2 △ 14.1	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部2条の凹線、ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	密 1mm石英・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
87	SK3 1層	弥生土器 甕?	△ 14.0	底部 完存	外面：ヘラミガキ 内面：ケズリ後ナデ、下部~底面ナデ	密 1mm長石・雲母	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
88	SK3 1層	弥生土器 甕	※ 23.6 △ 16.2	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部4条の凹線、頸部刻目貼付突帯、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	密 1mm白色砂粒・雲母	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	胴部表面煤付着
89	SK3 1層	弥生土器 直口壺	※ 10.9 △ 27.6	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、肩部ハケメ、胴下部ハケ後ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明、底部ヘラケズリ	密 1mm赤褐色砂粒・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
90	SK3 1層	弥生土器 壺	※ 35.4 △ 10.3	口縁部 1/2	外面：口縁部8条の凹線後斜格子文・3本一対の棒状浮文・頸部ハケメ 内面：口縁部2条の貼付突帯・円孔・櫛描斜格子文、頸部調整不明	密 1mm白色砂粒・雲母を少含	外面：灰黄褐色 内面：褐灰色	良好	
91	SK4 埋土中	弥生土器 甕	※ 13.8 △ 9.0	口縁~肩部 1/2	外面：口縁部3条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	密 0.5mm白色砂粒・黒褐色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良	肩部表面煤付着
92	SK15 1層	弥生土器 甕	※ 18.0 △ 43.0	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刻目→ヨコナデ、胴部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴中位ヘラケズリ、下部ヘラケズリ後ナデ	密 0.5~2mm長石・石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
93	SK5 1層	弥生土器 甕	△ 9.1	底部 1/3	外面：胴下部ミガキ、底面ナデ 内面：胴下部ケズリ、底面指オサエ	密 2mm長石・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：橙色	良好	底径△ 8.9cm
94	SK6 底面	弥生土器 甕	※ 17.8 △ 28.9	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部1条以上の凹線、胴部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、胴下部ヘラケズリ	密 1mm白色・灰褐色砂粒を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	

第3節 遺物包含層の調査

表 17 出土土器観察表(4)

遺物No.	遺構層位	器種	口径(㎝) 器高(㎝)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
95	SK6 底面	弥生土器 甕	※23.6 △36.9	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部刻目後3条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部ハケメ、胴部ハケ後ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ケズリ	密 1mm 白色砂粒・赤褐色砂粒・雲母を多含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	肩部煤付着
96	SK6 埋土中	弥生土器 壺	※25.0 △6.75	口縁部 1/4	外面：3条の凹線、口縁部ナデ、下部ハケメ 内面：ナデ	密 2mm 長石・石英・赤褐色砂粒を多含	外面：黄褐色 内面：橙色	良好	
97	SK8 埋土中	弥生土器 甕	※14.4 △8.2	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部ハケメ後指オサエ	密 1mm 白・黒砂粒	外面：にみ黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
98	SK8 埋土中	弥生土器 壺	△3.3	口縁部 1/8	外面：口縁部3条の凹線、ナデ 内面：ナデ	密 1mm 白色砂粒・黒褐色砂粒を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
99	SK9 埋土中	弥生土器 甕	※17.0 △2.8	口縁部 1/6	外面：口唇部3条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面：ヨコナデ	やや密 0.5mm 白色砂粒を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
100	SK10 1層	弥生土器 甕	※12.0 △1.8	口縁部 1/6	外面：調整不明 内面：口唇部ヨコナデ	やや粗 1mm 石英を少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	不良	
101	SK13 埋土中	弥生土器 甕	※17.4 △10.2	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ナデ、以下調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	やや密 3mm 石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
102	SK13 埋土中	弥生土器 甕	※9.1 △11.8	口縁~胴部 1/8	外面：口縁部2条の凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後指オサエ	やや密 1mm 白色砂粒・石英を少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
103	SK13 埋土中	弥生土器 甕	※15.4 △3.2	口縁部 1/4	外面：口唇部3条の凹線、頸部指頭圧痕文 内面：ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
104	SK13 埋土中	弥生土器 壺	※11.2 △4.9	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明 内面：調整不明	密 4mm 白色~橙色砂粒・石英・雲母を多含	外面：明赤褐色 内面：橙色	良好	
105	SK13 埋土中	弥生土器 壺	※22.5 △1.8	口縁部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、ハケメ 内面：口縁部ハケメ	密 1mm 長石・雲母を多含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
106	SK13 埋土中	弥生土器 甕	△22.2	胴部 1/6	外面：上部ハケメ、下部ハケ後ヘラミガキ 内面：ハケメ、中位ヘラミガキ後一部指オサエ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：橙色~黒色 内面：浅黄褐色	良好	
107	SK14 3層	弥生土器 甕	※16.0 △4.4	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、肩部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	やや密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良	頸部に煤付着
108	SK16 埋土中	弥生土器 甕	※13.0 △7.0	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	やや密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：にみ黄褐色 内面：にみ黄褐色	良好	
109	SK16 埋土中	弥生土器 甕	※17.2 △6.3	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 1~2mm 白色砂粒	外面：暗黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
110	SK16 埋土中	弥生土器 甕	※16.6 △18.0	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部2条の凹線、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、頸~肩部ナデ、胴部ハケメ後丁寧ナデ	密 1mm 砂粒	外面：にみ黄褐色 内面：にみ黄褐色	良好	口縁部~胴部外面に煤付着
111	SK16 埋土中	弥生土器 甕	※20.0 △5.5	口縁~頸部 1/4	外面：口縁部2条の凹線、頸部指頭圧痕貼付突帯後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下調整不明	密 1mm 石英・雲母	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
112	SK16 埋土中	弥生土器 壺	※36.2 △7.2	口縁部 1/4	外面：口縁部3条の凹線後刻目、3条の貼付突帯後刻目 内面：口縁部ナデ、下部ハケメ	密 1mm 白色砂粒少含	外面：暗黄褐色 内面：暗黄褐色	良好	
113	SK16 埋土中	弥生土器 壺	※24.6 △16.6	口縁~頸部 1/3	外面：口縁部刻目後2条の凹線、頸部貼付突帯・ハケメ後5条の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ	密 2.5mm 白色砂粒少含	外面：暗黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
114	SK17 検出面	弥生土器 壺	△44.8	胴部~底部 1/4	外面：口縁部2条の凹線・3個一対の円形浮文、肩部指頭圧痕格子文・波状文・板小口による刻目、肩部ハケメ、胴部調整不明・下半部方向のヘラミガキ 内面：口縁部4条の凹線・ナデ、胴上部調整不明・下部ナデ・指頭圧痕	密 1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
115	SK18 埋土中	弥生土器 甕	※19.8 △1.8	口縁部 1/3	外面：口縁部2条の凹線後刻目 内面：ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒を少含	外面：にみ黄褐色 内面：にみ黄褐色	良好	
116	SK19 1層	弥生土器 甕	※17.0 △4.8	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ	やや密 1mm 長石・雲母を多含	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	良好	
117	SK20 埋土中	縄文土器 深鉢	△4.4	胴部 1/10	外面：粗いナデ 内面：調整不明	粗 2mm 石英を少含	外面：黄褐色 内面：浅黄褐色	良	
118	SK22 埋土中	弥生土器 甕	※22.0 △39.8	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部3条の凹線後刻目・端部刻目、頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部ハケメ、胴部ハケメ後ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1mm 長石・雲母を多含	外面：にみ黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
119	SK22 埋土中	弥生土器 甕	※18.0 △8.2	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部4条の凹線、頸部刻目貼付突帯、肩部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明	密 1mm 白色砂粒多含	外面：暗黄褐色 内面：黄褐色	良好	
120	SK22 埋土中	弥生土器 甕	※15.0 △3.8	口縁部 1/5	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突→ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部調整不明	密 0.5mm 砂粒・雲母を少含	外面：浅黄褐色 内面：淡黄色	良	
121	SK22 埋土中	弥生土器 壺	※28.2 △1.9	口縁部 1/8	外面：口縁部3条の凹線後刻目・3個一対の円形浮文 内面：ヨコナデ	密 1mm 白色砂粒・雲母多含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
122	SK22 埋土中	弥生土器 甕	△19.4	胴~底部 完存	外面：底部ヘラミガキ・端部ヘラミガキ後ヨコナデ 内面：調整不明	密 1mm 白色砂粒多含	外面：暗黄褐色 内面：黄褐色	良好	
123	SK22 埋土中	弥生土器 高坏	△6.2	脚部 1/6	外面：坏部調整不明、脚上段7条以上の凹線 内面：坏底部円盤充填、脚部調整不明	密 1.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：暗黄褐色 内面：黒褐色	良好	外面赤色塗彩
124	SK22 埋土中	弥生土器 高坏	△4.3	脚部 1/4	外面：11条以上の凹線、裾部刻目・端部ヨコナデ 内面：ハケメ後ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母多含	外面：赤色 内面：赤黒色	良好	外面赤色塗彩
125	SK23 埋土中	弥生土器 高坏	※12.8 △5.6	坏部 ほぼ完存	外面：ヘラミガキ 内面：調整不明、脚部上端シボリ痕	密 0.5mm 白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	坏底部円盤充填
126	SK23 埋土中	弥生土器 壺	△7.35	底部 ほぼ完存	外面：調整不明 内面：調整不明、底部指オサエ	密 1mm 白色砂粒・石英・雲母を多含	外面：暗黄褐色 内面：橙色	良好	
127	SK28 底面	弥生土器 甕	※23.4 △3.8	口縁部 1/4	外面：口縁部4条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ナデ、指頭圧痕 内面：ヨコナデ	密 1mm 黒褐色砂粒・白褐色砂粒・雲母少含	外面：褐色 内面：にみ黄褐色	良好	
128	SK28 1層	弥生土器 壺	※15.6 △8.6	口縁~頸部 1/4	外面：口縁部2条の凹線後板状工具による刻目、ヨコナデ、頸部ハケメ、4条の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、ヘラミガキ	密 2mm 赤色砂粒・白色砂粒	外面：にみ黄褐色 内面：灰黄色	良好	
129	SK31 埋土中	弥生土器 甕	※14.4 △22.4	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁~頸部ナデ、肩部ハケメ、胴部ハケ後ナデ、胴下半ヘラケズリ後一部ハケ	密 0.5~1.5mm 砂粒	外面：浅黄褐色 内面：暗黄褐色	良好	胴外面下部に煤付着
130	SK31 埋土中	弥生土器 甕	※16.2 △6.2	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯成形後刺突文→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 1mm 白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良	突帯の刻目は刺突による
131	SK31 埋土中	弥生土器 甕	※13.6 △5.4	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ、指オサエ	密 1mm 長石・石英少含	外面：にみ黄褐色 内面：暗黄褐色	良好	口縁部煤付着
132	SK31 埋土中	弥生土器 無頭壺	※8.0 △6.9	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部3条の凹線後穿孔、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部指オサエ・ハケメ	密 1mm 白色砂粒を多含	外面：暗黄褐色 内面：暗黄褐色	良好	穿孔は外→内
133	SK31 埋土中	弥生土器 甕	△7.0	底部 1/2	外面：ヘラミガキ、底部ナデ 内面：調整不明	密 0.5~1.5mm 砂粒	外面：暗黄褐色 内面：褐色	良好	底面に煤付着

表 18 出土土器観察表(5)

遺物No.	遺構層位	器種	調整・文様		胎土	色調	焼成	備考	
			口径(cm)	部位					
134	SK31 埋土中	甕	△ 9.5	胴~脚部	外面：胴部ヘラミガキ、脚部ヨコナデ 内面：胴部ハケメ・ヘラケズリ・下部ケズリ後ナデ、底部指オサエ、脚部ナデ	密 1mm 白色砂粒多含	外面：淡褐色 内面：褐色	良好	
135	SK31 埋土中	甕	△ 7.6	脚部	外面：上段9条以上・下段12条の沈線・下端凹線1条・裾部凹線2条・三角形透孔未貫通、ハケメ 内面：ヘラケズリ後指ナデ、裾部ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒少含	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	良好	
136	SK31 埋土中	高坏	△ 9.6	脚部	外面：上段凹線6条、中段ハケメ後三角形透孔未貫通、下段凹線7条 内面：ケズリ	密 1mm 石英・長石・雲母を少含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
137	SK33 埋土中	甕	※ 15.3 △ 3.0	口縁~肩部	外面：口縁部1条以上の凹線、頸部貼付突帯後刺突文 内面：ヨコナデ	密 0.5mm 長石・雲母を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
138	SK34 埋土中	甕	※ 14.1	口縁・胴部	外面：口縁部3条の凹線後刻目、頸部貼付突帯→刻目→ヨコナデ、肩部櫛描文・波状文、胴下半ミガキ 内面：口縁部ナデ、肩部ハケメ、胴下半ハケメ	やや密 1mm 長石・石英を少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良	
139	SK34 埋土中	甕	※ 17.0 △ 5.9	口縁~肩部	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ 内面：調整不明	密 1mm 長石・雲母を多含	外面：灰色 内面：浅黄褐色	良好	
140	SK34 埋土中	甕	※ 11.8 △ 6.2	口縁~肩部	外面：口縁部3条の凹線、調整不明 内面：頸部指頭圧痕、指ナデ	密 1mm 長石少含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
141	SK34 埋土中	甕	△ 4.1	底部	外面：ヘラミガキ、端部ミガキ後ナデ 内面：調整不明	密 1mm 長石・細砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰黄色	良好	底面外面黒斑
142	SK34 埋土中	高坏	△ 8.6	胴~脚部	外面：調整不明 内面：胴部ハケメ、底部円盤充填、脚部ケズリ後ヨコナデ、シボリ痕	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：灰黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
143	SK35 底面	甕	※ 16.1 △ 30.0	全体	外面：口縁部凹線2条、胴部ハケメ後ミガキ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部最大径指オサエ、下半ヘラケズリ	密 1mm 白色砂粒多含	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	良好	
144	SK35 底面	甕	※ 13.6 △ 14.9	口縁~胴部	外面：口縁部刻目後凹線1条、胴上半ハケメ、下半ヘラミガキ 内面：ハケメ後ナデ・指頭圧痕、下半ヘラケズリ	密 1mm 長石・雲母	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
145	SK35 埋土中	壺	※ 23.6 △ 2.7	口縁部	外面：口縁部3条の凹線・ヨコナデ 内面：口縁部ハケメ後ナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
146	SK35 埋土中	高坏	△ 5.2	脚部	外面：脚部9条の凹線後三角形透孔未貫通、裾端部2条の凹線 内面：ヨコナデ	密 1mm 赤色砂粒・白色砂粒・雲母少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
147	SK36 埋土中	甕	※ 18.8 △ 7.5	口縁~肩部	外面：口縁部3条の凹線、指頭圧痕貼付突帯後ナデ、肩部調整不明 内面：口縁部~頸部ヨコナデ、肩部調整不明	やや密 1mm 長石・石英・雲母を多含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	やや良	
148	SK37 埋土中	甕	△ 4.2	頸~肩部	外面：頸部指頭圧痕貼付突帯、肩部調整不明 内面：調整不明	密 1mm 長石を少含	外面：灰黄色 内面：灰黄色	良好	
149	SK41 埋土中	甕	※ 14.2 △ 34.0	全体	外面：口縁部3条の凹線、胴上半ハケメ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上半ハケメ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1mm 長石・石英・雲母を多含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良	胴下部煤付着
150	SK41 埋土中	甕	※ 20.0 △ 6.1	口縁~肩部	外面：口縁部1条以上の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ナデ、肩部以下調整不明 内面：ハケ後指頭圧痕	密 1mm 長石・石英	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良	口縁部風化顕著
151	SK41 埋土中	甕	△ 27.5	胴~底部	外面：胴上部ミガキ、胴中~下部ハケメ後ヘラミガキ 内面：上部ハケ後指オサエ、ヘラケズリ後ナデ	やや密 1mm 長石少含	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	
152	SK41 埋土中	甕	※ 11.0 △ 5.0	胴~底部	外面：胴部ヘラミガキ、底部ヘラミガキ後ヨコナデ 内面：胴下部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1mm 長石・石英・雲母を少含	外面：にじみ黄褐色 内面：橙色	良好	
153	SK41 埋土中	高坏	△ 8.7	脚部	外面：11条以上の櫛描文・2条の凹線、ハケメ 内面：シボリ痕	密 1mm 白色砂粒多含	外面：赤褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
154	SK41 埋土中	台形土器	※ 29.0 △ 11.5	口縁~頸部	外面：台部ハケ後ナデ、口縁部1条の凹線、頸部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部指オサエ・ナデ、頸部ナデ	密 2mm 長石・石英少含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
155	SK42 埋土中	甕	※ 19.2 △ 20.1	口縁~胴部	外面：口縁部2条の凹線、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部調整不明、胴部ハケメ、下部ケズリ	やや密 0.5mm 白色砂粒・褐色砂粒を少含	外面：橙色 内面：黄褐色	良好	
156	SK42 埋土中	甕	13.6 △ 5.0	口縁~肩部	外面：口縁部2条の凹線、肩部調整不明 内面：口縁部~頸部ナデ、肩部ハケメ	密 1mm 長石・石英・雲母	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良	
157	SK43 埋土中	甕	※ 24.0 △ 2.3	口縁部	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部調整不明	密 0.1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：橙色 内面：橙色	良好	
158	SK43 埋土中	甕	※ 20.0 △ 3.8	口縁~肩部	外面：口縁部2条の凹線、肩部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後ヨコナデ、肩部ハケメ	密 0.5mm 赤褐色砂粒・雲母少含	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
159	SK44 埋土中	甕	※ 17.0 △ 5.3	口縁~肩部	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	外面煤付着
160	SK44 埋土中	甕	※ 17.4 △ 5.9	口縁~肩部	外面：口縁部2条の凹線、肩部ハケメ 内面：口縁部調整不明、肩部ハケメ	密 1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
161	SK44 埋土中	甕	※ 17.9 △ 13.0	口縁~胴部	外面：口縁部2条の凹線、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部指頭圧痕	密 0.5mm 長石	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	風化顕著、胴部中位煤付着
162	SK44 埋土中	甕	△ 14.9	胴~底部	外面：ヘラミガキ 内面：胴部ヘラケズリ、底部指オサエ、ナデ	密 1mm 白色砂粒を含む	外面：にじみ黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	胴下部煤付着
163	SK44 埋土中	甕	△ 14.3	胴下~底部	外面：胴下部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：胴下部ヘラケズリ、底面ナデ	密 0.5mm 白色砂粒を多含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
164	SK44 埋土中	甕	△ 32.8	胴上~底部	外面：胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ 内面：胴上部ハケメ、胴中位ハケメ後指オサエ、下部ヘラケズリ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
165	SK45 埋土中	甕	※ 16.4 △ 25.0	口縁~胴部	外面：口縁部凹線3条、胴上半ハケメ、胴下半ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上半ハケ後指オサエ・下半ヘラケズリ	密 0.5mm 長石	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	外面全体に煤付着
166	SK45 埋土中	甕	※ 15.0 △ 14.2	口縁~胴部	外面：口縁部2条の凹線、胴上部ハケメ、下半ヘラミガキ 内面：口縁~頸部ヨコナデ、胴部ハケメ	密 細砂粒	外面：にじみ黄褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	外面煤付着
167	SK45 埋土中	甕	※ 14.4 △ 9.5	口縁~肩部	外面：口縁部2条の凹線、頸~肩部ハケメ後ナデ、胴部ヘラミガキ後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ後ナデ	やや密 1mm 砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にじみ黄褐色	やや良	
168	SK45 埋土中	甕	※ 3.7	底部	外面：ヘラミガキ 内面：調整不明	密 1mm 長石・雲母	外面：にじみ黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	風化顕著
169	SK45 埋土中	無頭壺	※ 10.2 △ 5.6	口縁~肩部	外面：口縁部4条の凹線後円孔、肩部ハケメ 内面：ハケメ後ナデ	密 0.5mm 長石を少含多含、1mm 石英を少含	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好	外面煤付着
170	SK46 埋土中	甕?	△ 3.4	底部	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、底面指オサエ	密 1mm 長石・雲母	外面：明褐色 内面：にじみ黄褐色	良好	
171	SK50 埋土中	甕	17.0 29.2	全体	外面：口縁部2条の凹線、肩部ハケメ、胴部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後指頭圧痕、胴下部ヘラケズリ	密 1mm 長石多含・2mm 石英	外面：にじみ黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	
172	SK50 埋土中	壺	※ 13.4 △ 5.9	口縁~肩部	外面：頸部工具によるナデ、肩部調整不明 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1~1.5mm の砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	

第3節 遺物包含層の調査

表 19 出土土器観察表(6)

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
173	SK50 埋土中	弥生土器 甕	※ 7.4 △ 8.6	口縁~胴部 1/5	外面：口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面：口縁~胴部下ナデ、下部指オサエ	密 1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
174	SK50 埋土中	弥生土器 甕	※ 18.6 △ 3.9	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部以下調整不明 内面：口縁部~頸部ヨコナデ、肩部調整不明	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：灰白色 内面：灰白色	良好	
175	SK50 埋土中	弥生土器 無頸壺	※ 12.2 △ 8.0	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部6条の凹線、胴上部ハケメ、下部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴上部ハケメ、下部ハケメ	密 2mm 長石・石英・雲母	外面：灰黄褐色 内面：淡黄色	良好	穿孔内→外
176	SK50 埋土中	粘土塊	— —	— —	外面：調整不明 内面：ナデ、調整不明	密	外面：淡黄色 内面：淡黄色	やや良	最大長 7.8cm 最大幅 5.95cm 最大径 3.2cm
177	SK51 埋土中	弥生土器 甕	※ 13.8 △ 9.35	口縁~胴部 1/8	外面：口縁部凹線1条、胴部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指オサエ、胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	やや密 1mm 長石・石英・雲母を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
178	SK51 埋土中	弥生土器 甕	※ 14.0 △ 4.3	口縁~頸部 1/4	外面：調整不明 内面：調整不明	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	やや良	
179	SK53 埋土中	弥生土器 甕	※ 18.0 △ 7.6	口縁~肩部 1/7	外面：口縁部凹線3条、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 0.5mm 長石を少含	外面：褐灰色 内面：褐灰色	良好	
180	SK53 埋土中	弥生土器 壺	※ 23.8 △ 12.0	口縁~頸部 1/4	外面：口縁部3条の凹線後刻目、頸部2条の貼付突帯、ハケメ 内面：頸部指オサエ	密 1mm 長石・雲母・輝石を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
181	SK54 底面	弥生土器 甕	— △ 6.1	底部 1/3	外面：調整不明、底面ナデ 内面：ヘラケズリ	密 1mm 石英・雲母を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
182	SX1 埋土中	弥生土器 甕	※ 18.0 △ 2.3	口縁部 1/8	外面：口縁部3条の凹線 内面：口縁部ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・褐色砂粒を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
183	SX2 埋土中	弥生土器 甕	— △ 2.5	底部 1/4	外面：ヘラミガキ 内面：調整不明	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：褐灰色 内面：褐灰色	良好	底径※ 5.8cm
184	SX5 埋土中	弥生土器 甕	※ 18.0 △ 1.8	口縁部 1/8	外面：口縁部2条以上の凹線 内面：ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・褐色砂粒を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	
185	SX7 1層	弥生土器 甕	※ 19.0 △ 2.0	口縁部 1/8	外面：口縁部2条の凹線 内面：ヨコナデ	やや粗 1mm 白色砂粒を多含	外面：黒褐色 内面：黒色	良	
186	SX11 検出面	弥生土器 甕	11.0 24.0	口縁~底部 3/4	外面：口縁部凹線4条、頸部凹線1条・ハケメ後板小口による刻目・凹線2条、胴部ヘラミガキ 内面：工具によるナデ、肩部指頭圧痕	やや密 1~1.5mm 砂粒	外面：赤色 内面：黄褐色	良好	外面全体・内面口縁~頸部上半赤色塗彩
187	SX8 埋土中	弥生土器 器台	15.05 19.15	ほぼ完存	外面：口縁部凹線3条・1層一枚円形文1ヶ所、受部ハケメ、筒部上下に各4条の凹線、脚部凹線6条、器部凹線2条、凹線ハケメ、下部に2角形孔未詳 内面：口縁部ヨコナデ、受部ヘラミガキ、筒部~脚部ヘラケズリ後上部ナデ、脚端部ナデ	密 0.5~2mm 長石・石英、3mm 砂粒	外面：赤色 内面：赤色	良好	外面全体に赤色塗彩 底径 11.7cm
188	SX8 埋土中	弥生土器 脚付壺	— △ 16.8	体~脚部 1/4	外面：体部上半ハケメ・下半ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ後凹線10条、下部凹線4条以上 内面：体部ハケメ・底部円盤充填後指オサエ後ハケメ、脚部工具痕、下部ヘラケズリ後ナデ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：赤褐色 内面：淡黄色	良好	外面赤色塗彩 底部最大径 19.6cm
189	SX8 埋土中	弥生土器 甕	※ 13.8 △ 12.0	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部3条の凹線、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指オサエ、胴部ハケメ後ナデ	密 1mm 長石・石英を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良	
190	SX8 埋土中	弥生土器 甕	※ 18.2 △ 13.3	上部 1/4	外面：口縁部凹線3条、頸部ヨコナデ、胴部ハケメ・板小口による刻目 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、胴部上半ハケメ・下半ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 1mm 長石・石英・黒褐色、赤褐色粒子	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	胴外面下部に煤付着
191	SX8 埋土中	弥生土器 壺	※ 8.6 △ 4.9	口縁部 1/4	外面：口縁部刻目後凹線4条、頸部ハケメ、1条以上の凹線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部シボリ痕	密 0.5~1mm 砂粒	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	良好	外面赤色塗彩
192	SX8 埋土中	弥生土器 高坏	※ 17.6 △ 3.8	坏部 1/3	外面：口縁部凹線3条、坏部ハケメ 内面：ハケメ後ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	坏部内面赤色塗彩
193	SX8 埋土中	弥生土器 高坏	— △ 3.9	脚部 1/8	外面：脚下部6条の凹線、凹線上部ナデ、裾部ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	密 0.5~2mm 白色砂粒	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	底径△ 8.9cm 赤色塗彩
194	SX9 埋土中	弥生土器 甕	— △ 11.4	胴部 1/4	外面：頸部ヨコナデ、肩部ハケメ、胴中位板小口による刻目、下部ヘラミガキ 内面：胴上部ハケメ、下部ヘラケズリ	やや密 1mm 砂粒・石英を多含	外面：淡黄色 内面：褐色	やや良	
195	SX9 埋土中	弥生土器 壺	— △ 5.8	底部 完存	外面：ヘラミガキ・一部指頭圧痕、底部ヨコナデ、底面中央ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 1mm 長石・石英を多含	外面：淡黄色 内面：黒色	良好	外面赤色塗彩 底径 7.1cm
196	SX15 1層	弥生土器 壺	— △ 10.4	頸~胴部 1/3	外面：ハケメ、板小口による刺突文3段 内面：ナデもしくはヘラミガキ	やや密 1.5mm の砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好	外面赤色塗彩 胴部最大径 16.0cm
197	SX15 2層	弥生土器 脚付壺	— △ 8.4	坏~脚部 1/4	外面：体部ハケメ、脚部5条以上の貼付突帯、突帯間凹線状ナデ 内面：体底部円盤充填、体部ハケメ、脚部ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面：黄褐色 内面：淡黄色	良好	外面赤色塗彩
198	土器溜り ③-1層	弥生土器 壺	※ 23.2 △ 6.4	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部ハケメ後ナデ、頸部ヘラ描沈線1条 内面：調整不明	やや粗 2mm 赤褐色砂粒・石英を多含	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好	
199	土器溜り ③-1層	弥生土器 壺	※ 21.2 △ 5.4	口縁部 1/4	外面：口唇部刻目、口縁部ヨコナデ 内面：調整不明	やや粗 2mm 石英を多含	外面：褐色 内面：褐色	良	
200	土器溜り ③-1層	弥生土器 壺	— △ 6.8	底部 1/4	外面：調整不明 内面：調整不明	やや粗 1~3mm 白色砂粒・灰白色砂粒を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	やや不良	底径※ 9.2cm
201	土器溜り ③-1層	弥生土器 甕	※ 30.9 △ 20.7	口縁~胴部 1/4	外面：口縁部ナデ、3条の凹線、胴部調整不明 内面：口縁~胴中位ハケ後指ナデ、胴下部ハケ	やや密 3mm 長石	外面：褐色 内面：褐色	良	
202	土器溜り ③-1層	弥生土器 甕	※ 28.8 △ 7.2	口縁~胴部 1/10	外面：口縁部ヨコナデ、胴部調整不明 内面：ハケ後指オサエ	やや粗 2mm 長石・石英を多含	外面：明褐色 内面：褐色	良好	
203	P 119 埋土中	弥生土器 甕	※ 21.7 △ 4.3	口縁~肩部 1/8	外面：口縁部2条の凹線後刻目、頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	密 1mm 長石・石英を少含	外面：褐色 内面：淡黄色	良好	
204	P 11 埋土中	弥生土器 甕	※ 13.6 △ 12.4	口縁~胴部 1/3	外面：口縁部凹線2条、頸部ヨコナデ、肩部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ヘラミガキ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面：淡黄色 内面：褐色	良好	
205	P 56 埋土中	弥生土器 甕	18.6 20.8	口縁~底部 3/4	外面：口縁部凹線2条、胴部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部~胴部ハケ後ヘラミガキ、底部指頭圧痕	やや密 1mm 長石・雲母	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	肩部煤付着
206	P 92 埋土中	須恵器 長頸瓶	— △ 16.3	頸~胴部 1/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	緻密 1mm 長石を少含	外面：灰~灰褐色 内面：淡黄色	堅緻	頸・胴部に自然釉
207	土器溜り ③-2層	弥生土器 甕	— △ 23.0	胴部 1/4	外面：肩部ハケメ、胴中位鼓腹線による刺突文2段・横方向のヘラミガキ、下半縦方向のヘラミガキ 内面：調整不明	密 0.5mm 白色砂粒を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良	胴部最大径※ 32.0cm
208	土器溜り ③-2層	弥生土器 甕	— △ 37.7	頸~底部 1/4	外面：頸部凹線1条以上、肩部ハケメ後ナデ・板小口による刻目2段、胴部中位横方向・下半縦方向ヘラミガキ 内面：胴中位ヘラミガキ	密 1~2mm 長石・石英を少含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	胴外面煤付着 胴部最大径※ 32.0cm
209	土器溜り ③-2層	弥生土器 壺	— △ 13.4	胴~底部 1/3	外面：胴部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：胴下部ヘラケズリ	密 0.5mm 長石・雲母を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	底径 8.2cm
210	土器溜り ③-2層	弥生土器 壺	※ 17.6 △ 17.0	口縁~胴部 1/2	外面：口縁部2条の凹線、頸部刻目貼付突帯、肩部ハケメ後ナデ、胴部調整不明 内面：胴部ハケメ後ナデ、肩部以下指オサエ	密 1~2mm 長石・石英	外面：褐色 内面：淡黄色	良好	胴部最大径 28.4cm
211	土器溜り ③-2層	弥生土器 甕	※ 24.0 △ 5.6	口縁~肩部 1/4	外面：口縁部刻目後ヨコナデ、ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部成形時の板状工具痕、指オサエ	密 1mm 長石・雲母を多含	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好	

表 20 出土土器観察表 (7)

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
212	土器溜3 ③-2層	弥生土器 甕	※15.2 △6.5	口縁~胴部 1/4	外面:口縁部ヨコナデ、胴部調整不明 内面:口縁部ヨコナデ、胴部調整不明	密 1mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
213	土器溜3 ③-2層	弥生土器 脚付壺	— △8.8	底~脚台部 2/3	外面:体部ヘラミガキ、脚部貼付突帯2条、突帯間凹線状ナデ 内面:底部調整不明・円盤充填痕跡、脚部ケズリ後ナデ	やや密 4mm 長石・石英を少含	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	やや良	底部外面黒斑
214	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 甕	※15.6 △4.4	口縁~肩部 1/8	外面:口縁部2条以上の凹線後刻目、頸部指頭圧痕貼付突帯 内面:口縁~頸部ヨコナデ、肩部ハケメ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
215	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 甕	※14.0 △3.0	口縁部 1/4	外面:口縁部4条の凹線、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:橙色 内面:橙色	良好	
216	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 甕	※20.7 △4.4	口縁~肩部 1/4	外面:口縁部2条の凹線後刻目、頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面:口縁部ナデ、肩部ハケメ	密 0.5mm 白色砂粒少含	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良	
217	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 甕	※21.2 △3.3	口縁部 1/10	外面:口縁部3条の凹線、頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好	
218	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 壺	※24.6 △7.6	口縁~頸部 1/3	外面:口縁部4条の凹線、貼付突帯1条、頸部ハケメ後ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、ハケメ後指オサエ	密 1mm 白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
219	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 壺	— △8.4	頸部 1/4	外面:ハケメ後ナデ、貼付突帯3条 内面:指オサエ	密 1.5mm 白色砂粒	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
220	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 脚付壺	— △5.9	胴下~脚部 1/3	外面:胴下部ヘラミガキ、脚部貼付突帯3条以上 内面:胴下部ハケメ、脚部ケズリ	密 1mm 石英を少含	外面:淡黄色 内面:淡黄色	良好	
221	谷部(D6) ③-2層	弥生土器 高坏	※17.2 △3.4	坏部 1/4	外面:口縁部ヨコナデ、坏部ハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、坏部ハケ後指オサエ	やや密 4mm 褐色砂粒・白色砂粒・雲母を多含	外面:明褐色 内面:明褐色	良好	
222	谷部(D6) ①~②層	弥生土器 壺	※18.2 △13.4	口縁~頸部 1/4	外面:口縁部刻目後凹線4条・3個一対の円形浮文、頸部ハケメ、貼付突帯3条後突帯間凹線状にヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ、指オサエ	密 1.5mm 赤褐色・黒褐色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
223	谷部(D6) ①~②層	弥生土器 無頸壺	※12.9 △5.4	口縁部 1/4	外面:口唇部ヘラ描の鋸歯文、口縁部10条以上凹線 内面:口唇部ナデ、口縁部ハケメ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	良好	
224	谷部 ①~②層	土師器 甕	※24.9 △7.1	口縁~肩部 1/8	外面:口縁部ナデ、頸部ヨコナデ、肩部ナデ 内面:口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
225	谷部(C6) ①~②層	土師器 甕	— △3.9	口縁部 1/10	外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
226	谷部(D6) ①~②層	須恵器 瓶	— △4.8	胴部 1/10	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	緻密 1mm 石英少含	外面:褐色 内面:灰黄色	堅緻	
227	谷部(C6) ①~②層	須恵器 坏	— △1.2	底部 1/3	外面:回転ナデ、底部回転系切 内面:回転ナデ	密 7mm 長石を少含	外面:灰褐色 内面:灰褐色	やや不良	底径※9cm
228	遺構外(F1) II層	縄文土器 深鉢	— △4.1	胴部 1/10	外面:長径6mmの楕円文を縦位に密接施文 内面:ナデ	粗 5mm 石英・礫を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	やや不良	
229	遺構外(F5) II層	縄文土器 甕	— △5.0	口縁部 1/10	外面:口縁部刻目突帯文、ナデ 内面:ナデ、指オサエ	やや粗 3mm 石英を多含	外面:褐色 内面:褐色	良	
230	遺構外(G5) II層	弥生土器 甕	— △6.9	口縁部 1/8	外面:口縁部下端刻目、ハケメ 内面:粗いハケメ	やや密 3mm 石英・礫を多含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
231	遺構外(G6) II層	弥生土器 甕	— △3.9	口縁~胴部 1/4	外面:口縁部ナデ、胴部ハケ 内面:調整不明	密 1.5mm 長石・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:浅黄褐色	良好	
232	遺構外(F6) II層	弥生土器 甕	※34.0 △7.5	口縁~胴部 1/4	外面:口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、胴部ハケ後ナデ	やや密 2mm 石英・雲母を多含	外面:褐色 内面:褐色	良好	
233	D9 II層	弥生土器 甕	※21.2 △3.2	口縁部 1/4	外面:口縁部凹線4条、頸部貼付突帯→刺突文→ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密 0.5mm 長石・雲母を少含	外面:明黄褐色 内面:褐色	良好	
234	遺構外(G9) II層	弥生土器 壺	※11.4 △4.0	口縁~頸部 1/4	外面:口縁部凹線3条、頸部半截竹管状工具による刺突文2段 内面:ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
235	遺構外(G6) II層	弥生土器 壺	※32.0 △4.6	口縁部 1/4	外面:口縁部3条の凹線後板小口による刻目・円形浮文、口縁部ハケメ、頸部貼付突帯2条以上 内面:ハケメ	密 2mm 長石・石英を少含	外面:黄褐色 内面:明黄褐色	良好	
236	D9 II層	弥生土器 壺	※28.8 △3.7	口縁部 1/4	外面:口縁部4条の凹線・ヨコナデ・ハケメ 内面:ヘラ描の記号文、口縁部ハケメ後ヨコナデ	密 0.5mm 白色砂粒・雲母を少含	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	
237	遺構外(F1) II層	弥生土器 壺	— △3.4	胴部 1/4	外面:ハケメ後ミガキ 内面:ハケメ	密 1mm 長石・石英	外面:赤色 内面:黄褐色	良好	外面赤色塗彩
238	遺構外(F4) II層	弥生土器 高坏	— △2.8	脚部 1/8	外面:脚部鋸歯文・4条の凹線、裾部ヨコナデ・凹線1条 内面:ナデ	密 1mm 長石を多含	外面:褐色 内面:黄褐色	良好	底径※11.3cm
239	遺構外(G0) II層	弥生土器 高坏	— △10.2	脚部 1/2	外面:上段縦位のヘラ描文・下段三角形透孔(部分的に貫通)→上部凹線2条以上・下部凹線3条・裾部凹線3条 内面:上段シボリ痕、下部指ナデ、裾部ヨコナデ	密 1mm 長石・雲母を少含	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	良好	底径※13.1cm
240	遺構外(E0) II層	弥生土器 蓋	※8.65 △1.9	蓋 2/3	外面:調整不明 内面:調整不明	密 0.5mm 長石	外面:黄褐色 内面:黄褐色	良好	穿孔3ヶ所以上
241	遺構外(F4) II層	③-1層 移動式竈	— 4.8	基部 1/10	外面:粗いハケメ 内面:調整不明	やや密 5mm 明褐色砂粒・雲母を少含	外面:褐色 内面:褐色	良好	
242	遺構外(G3) II層	須恵器 坏蓋	— △1.8	蓋 1/3	外面:右方向の回転ヘラケズリ後回転ナデ、つまみ部回転ナデ 内面:つまみ部~蓋部不定方向ナデ、蓋端部回転ナデ	密 0.5mm 長石を少含	外面:褐色 内面:褐色	堅緻	
243	遺構外(F4) II層	須恵器 高台坏	— △2.9	坏底部 1/8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	密 1mm 石英・雲母を少含	外面:灰色 内面:灰色	良好	
244	遺構外(F1) II層	須恵器 横瓶	※12.2 △18.0	口縁~胴部 1/4	外面:口縁部回転ナデ、肩~胴部平行タタキ後カキメ 内面:口縁部回転ナデ、胴部円弧文タタキ、一部指オサエ	緻密 0.5mm 白色砂粒を少含	外面:黄褐色 内面:黒褐色	堅緻	

第3節 遺物包含層の調査

表 21 出土石器観察表 (1)

遺物 No.	出土位置	層 位	器 種	法 量				備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S1	SI1	中層	石鏃	2.45	1.55	0.25	0.8	黒曜石製 凹基式 試料17
S2	SI1	下層	石鏃	1.8	1.5	0.35	0.8	サヌカイト製 凹基式 試料4
S3	SI1	埋土中	剥片	3.3	3.3	0.8	8.8	黒曜石製 黒色・黒灰色の縞状構造が見られる 試料13
S4	SI1	中層	剥片	3.4	1.4	0.5	2.4	黒曜石製 両側に微細な剥離痕 試料16
S5	SI1	P3下層	楔形石器	2.1	1.95	0.65	2.8	黒曜石製 試料20
S6	SI1	埋土中	剥片	2.6	3.2	0.8	5.9	黒曜石製 縞状構造が見られる、表・裏両面周縁に加工痕 試料14
S7	SI1	下層	石包丁	11.4	16.3	1.60	250	
S8	SI1	床面上	磨石	9.15	4.55	2.80	150	
S9	SI1	床面上	凹石	9.40	8.45	3.10	343	両面に凹
S10	SI1	下層	砥石	5.20	4.65	2.50	91.0	
S11	SI1	上層	砥石	6.0	3.10	1.40	33.8	
S12	SI1	P3-中層	砥石	3.75	3.0	8.5	13.4	
S13	SI1	下層	石錘	8.45	6.95	5.70	470	下端部に敲打痕
S14	SI2	埋土中	石鏃	2.2	1.7	0.3	0.8	サヌカイト製 凹基式 基端部一部欠損 黄灰白色に風化進行、全面に微細な気孔 試料3
S15	SI2	床面上	台石	22.5	26.8	7.05	6290	
S16	SI3	検出面	石鏃	2.50	1.81	0.41	1.4	黒曜石製 凹基式
S17	SI3	埋土中	石鏃	1.40	1.10	0.33	0.4	黒曜石製 凹基式未成品
S18	SI4	埋土中	磨製石剣	13.55	2.9	0.7	34.0	
S19	SI4	埋土中	台石	22.85	24.5	6.65	6540	
S20	SI4	埋土中	台石	14.3	16.65	4.5	1410	
S21	SI5	床面上	素材剥片	7.9	14.5	2.1	260	サヌカイト製
S22	SI5	埋土中	楔形石器	2.3	3.45	0.65	5.5	サヌカイト製
S23	SI5	検出面	石鏃	3.10	1.55	0.36	1.5	サヌカイト製 平基式
S24	SI5	埋土中	石鏃	2.6	1.8	0.4	1.2	サヌカイト製 平基式
S25	SI5	埋土中	被熱礫	34.0	14.85	5.7	4090	
S26	SI5	埋土中	伐採石斧	15.75	6.0	4.75	720	基部に研磨成形による滑らかさが残る、刃部に作出のための研磨面が残る
S27	SI5	検出面	石包丁	△5.25	5.30	0.70	26.4	
S28	SI5	埋土中	研磨痕礫	3.3	2.4	2.15	21.6	
S29	SI5	埋土中	砥石	5.8	5.1	3.9	150	
S30	SI5	埋土中	敲石	8.9	6.9	6.2	510	敲打痕が多く残る
S31	SI6	埋土中	石鏃	1.95	1.65	0.51	1.0	黒曜石製 凹基式 基端部一部欠損
S32	SI6	埋土中	石鏃	△2.1	1.7	0.3	1.1	サヌカイト製 先端部欠損 凹基式
S33	SI6	埋土中	石鏃	2.50	1.50	0.21	0.9	サヌカイト製 凹基式 基端部一部欠損
S34	SI6	埋土中	石鏃	3.0	1.0	0.3	0.9	サヌカイト製 凸基Ⅱ式 試料5
S35	SI7	埋土中	石鏃	2.90	1.83	0.31	1.5	サヌカイト製 凹基式 先端部欠損
S36	SI7	5層	蛤刃石斧	11.3	5.90	4.20	409.0	
S37	SI7	下層	鑿状片刃石斧	5.45	2.60	1.35	28.4	
S38	SI7	3層	敲石	10.2	8.35	5.05	608.0	
S39	SI7	埋土中	砥石	7.80	2.10	2.45	65.2	
S40	SI7	3層	砥石	18.9	11.43	9.45	333.0	
S41	SI8	埋土中	敲石	7.45	5.0	5.5	260	上下両端に敲打痕
S42	SI8	埋土中	石鏃	2.4	1.9	0.35	1.4	サヌカイト製 凹基式
S43	SI8	埋土中	石鏃	2.65	1.80	0.35	1.6	サヌカイト製？ 凹基式 基端部一部欠損
S44	SI8	P3埋土中	敲石	7.3	5.55	4.2	230	上下両端、右側縁に敲打痕
S45	SI8	埋土中	扁平片刃石斧	12.0	6.9	1.7	270	
S46	SI9	P7-2層	敲石	10.4	7.2	6.2	610	
S47	SI10	埋土中	石鏃	1.89	1.3	0.25	0.5	サヌカイト製 凹基式
S48	SI10	埋土中	砥石	4.7	3.9	3.4	93.0	
S49	SS1	埋土中	伐採石斧	11.35	5.90	3.95	409	
S50	SS2	埋土中	敲石	△9.4	6.95	4.05	310	表面中央部に弱い敲打痕 裏面被熱によると思われる割れ目
S51	SS2	埋土中	敲石	13.1	7.1	3.9	550	
S52	SS2	埋土中	敲石	13.9	5.9	3.75	470	表面中央部に弱い敲打痕
S53	SK3	埋土中	石鏃	1.91	1.50	0.24	0.8	サヌカイト製 平基式
S54	SK3	埋土中	石錐	3.4	2.7	0.65	5.1	未製品
S55	SK4	床面	石鏃	1.81	1.50	0.34	0.6	黒曜石製 凹基式
S56	SK15	埋土中	剥片	4.35	4.1	1.0	18.8	黒曜石 試料22
S57	SK6	埋土中	石鏃	2.70	1.40	0.28	1.2	サヌカイト製 平基式
S58	SK6	埋土中	石鏃	2.50	2.23	0.64	3.3	チャート製 凸基Ⅰ式
S59	SK16	埋土中	敲石	12.95	7.4	3.15	430	
S60	SK20	埋土中	伐採石斧	△9.70	5.25	3.35	267	
S61	SK28	埋土中	砥石	△8.65	△4.20	△4.5	110.9	
S62	SK28	埋土中	台石	19.1	14.65	5.10	2260	
S63	SK30	埋土中	敲石	14.9	7.85	4.40	748	
S64	SK31	検出面	敲石	7.9	6.9	5.9	480	
S65	SK33	底面	台石	21.6	24.8	6.7	5480	
S66	SK35	埋土中	石鏃	2.25	1.4	0.5	1.6	サヌカイト製 平基式？
S67	SK36	埋土中	敲石	12.1	8.1	4.1	570	

表 22 出土石器観察表 (2)

遺物 No.	出土位置	層 位	器 種	法 量				備 考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
S68	SK41	埋土中	扁平片刃石斧	△ 8.6	4.9	1.95	110	
S69	SK44	埋土中	砥石	△ 5.0	5.3	3.1	80.0	一面を除き全面使用
S70	SK47	埋土中	敲石	10.2	5.8	3.2	270	
S71	SK53	埋土中	石鏃	2.0	1.5	0.4	1.0	サヌカイト製 平基式
S72	SK53	埋土中	敲石	10.25	5.6	2.9	260	
S73	SX2	検出面	石鏃	1.35	1.50	0.41	0.6	凹基式 先端部、基端部一部欠損
S74	SX10	埋土中	敲石	△ 7.5	12.45	3.6	500	
S75	P56	埋土中	扁平片刃石斧	10.40	7.25	1.50	213.0	
S76	P56	埋土中	砥石	7.35	2.75	3.25	53.0	
S77	谷 D6 グリッド	③-2層	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.3	サヌカイト製 凹基式
S78	谷 D6 グリッド 土器集中部1	③-2層	石鏃	1.9	1.35	0.25	0.7	サヌカイト製 凹基式?
S79	谷 D6 グリッド	③-2層	石鏃	2.1	2.0	0.3	0.7	黒曜石製 凹基式
S80	谷 D6 グリッド 集石	③-2層	石鏃未製品	2.95	1.9	0.6	2.2	黒曜石製 凹基式 基端部一部欠損
S81	谷 D6 グリッド	③-2層	剥片	2.85	2.9	0.75	5.3	微細剥離痕あり
S82	谷 D6 グリッド	③-2層	敲石	8.5	3.9	3.05	140	
S83	谷 E7 グリッド	③-2層	敲石	8.75	6.5	3.15	260	
S84	谷 D6 グリッド	③-2層	敲石	13.95	6.8	4.9	670	
S85	谷 E7 グリッド	①~②層	石鏃	1.9	1.2	0.25	0.5	サヌカイト製 凹基式
S86	谷 D6 グリッド	①~②層	石鏃	1.65	1.45	0.3	0.8	サヌカイト製 平基式
S87	谷 D6 グリッド	①~②層	敲石	8.90	8.30	5.15	399.0	
S88	C11 グリッド	II層	ナイフ形石器	4.18	3.27	1.29	17.6	玉髄・瑪瑙系 ナイフの基部?
S89	F7 グリッド	II層	楔形石器	3.25	2.90	1.21	12.3	玉髄製
S90	D9 グリッド	II層	石鏃未製品	2.74	2.02	0.36	2.0	サヌカイト製
S91	G9 グリッド	II層	石鏃	2.30	1.58	0.35	0.8	黒曜石製 凹基式 基端部一部欠損
S92	G4 グリッド	II層	石鏃	1.70	1.30	0.35	0.6	黒曜石製 凹基式
S93	G4 グリッド	II層	石鏃	2.55	1.80	0.51	1.6	黒曜石製 凹基式
S94	E4 グリッド	II層	石鏃	2.40	1.70	0.48	1.6	黒曜石製 凹基式 基端部欠損
S95	F9 グリッド	II層	石鏃	2.31	1.88	0.29	1.1	黒曜石製 凹基式 両基端部欠損
S96	G6 グリッド	II層	石鏃	2.0	1.45	0.4	0.9	黒曜石製 凹基式
S97	E5 グリッド	トレンチ	石鏃	2.10	1.35	0.37	0.7	黒曜石製 凹基式 基端部一部欠損
S98	G6 グリッド	II層	石鏃	1.89	1.30	0.20	0.4	黒曜石製 凹基式
S99	F3 グリッド	II層	石鏃	1.10	1.19	0.20	0.2	サヌカイト製 凹基式
S100	C12 グリッド	II層	石鏃	1.70	1.45	0.20	0.4	サヌカイト製 凹基式
S101	E9 グリッド	II層	石鏃	2.68	1.80	0.36	1.3	サヌカイト製 凹基式
S102	D9 グリッド	II層	石鏃	2.15	1.60	0.25	0.9	サヌカイト製 凹基式
S103	E8 グリッド	II層	石鏃	2.05	1.52	0.30	1.2	サヌカイト製 平基式
S104	G7 グリッド	II層	石鏃	3.45	1.9	0.5	2.7	サヌカイト製 平基式
S105	G6 グリッド	II層	打製石剣	1.85	3.38	0.57	4.5	
S106	不明	I層	打製石剣	△ 11.2	4.20	1.10	73.1	
S107	F5 グリッド	II層	石鏃	△ 12.20	8.60	3.30	429.0	
S108	F6 グリッド	II層	石鏃	17.50	12.25	3.60	850.0	
S109	D11 グリッド	II層	伐採石斧	10.8	5.7	3.75	380	尾部裏面に剥離面、被熱によるハジケ、尾部側を中心に整形時の敲打痕
S110	D12 グリッド	II層	扁平片刃石斧	7.40	5.70	1.75	111.0	
S111	D5 グリッド	II層	伐採石斧	△ 12.90	6.55	—	446	
S112	不明	排土中	扁平片刃石斧	4.70	3.0	0.90	19.2	
S113	G9 グリッド	II層	柱状片刃石斧	5.60	1.89	0.82	17.2	
S114	F12 グリッド	II層	石包丁	4.50	△ 4.0	0.70	13.9	
S115	D9 グリッド	II層	石錘	6.40	3.95	1.90	68.7	
S116	D9 グリッド	II層	砥石	6.0	5.10	3.35	139.0	
S117	D5 グリッド	II層	凹石	6.35	9.64	3.30	260	両面に凹
S118	E8 グリッド	II層	伐採石斧	12.18	6.78	3.30	520.0	
S119	E5 グリッド	II層	敲石	10.95	5.05	2.55	217.0	
S120	G5 グリッド	II層	敲石	8.5	2.50	2.10	59.5	
S121	不明	I層	敲石	13.9	5.0	3.50	364	

表 23 出土鉄器観察表

遺物No.	出土位置	層 位	種 類	備 考
F1	SK45	埋土⑥層	鈍	切先、身部下半欠損。作業部裏面にかすかに裏すきを有する。
F2	E10	II層	板状鉄斧	錆ぶくれによる層状剥離。推定身部厚6~7mm。刃部は片刃状。
F3	E2	II層	鉄器片	錆ぶくれによる層状剥離、亀裂あり。
F4	F7	II層	不明	

第4章 自然科学分析の成果

第1節 梅田萱峯遺跡1区の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

梅田萱峯遺跡は、大山北麓の黒川左岸尾根上に位置し、東側に谷を挟んで笹津乳母ヶ谷第2遺跡が立地する。今回の発掘調査では、弥生時代中期後葉の住居跡、土坑と同時期と考えられる土坑墓等が検出されている。今回の分析調査では、住居跡の構築年代と構築材等の木材利用を検討するために、出土炭化材について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。また、住居内のピットおよび土坑堆積物について植物珪酸体分析を実施する。

1. 放射性炭素年代測定

(1) 試料

試料は、SI3, 6, 8 から出土した炭化材5点（試料番号4-8）である。試料番号4, 7, 8の3点は液体シンチレーションによるβ線計数法、試料番号5, 6の2点は加速器質量分析法（AMS法）で測定する。

(2) 分析方法

a) 液体シンチレーション法

試料を乾燥、粉砕したものを水に入れて、浮上してきたものを除去する。水酸化ナトリウム溶液で煮沸し、室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返す。濃硝酸を加えて煮沸し、室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素を捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成し、最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとする）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とする。

測定は、1回の測定時間50分間を20回繰り返す、計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定する。測定後、同じ試料を $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を測定する。

測定結果から年代値を算出する。なお、この際に、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,568年を使用する。

b) AMS法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当

する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用いる。

(3) 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表 25 に示す。試料番号 4 は 2,450 ± 230BP、試料番号 5 は 2,050 ± 40BP、試料番号 6 は 2,190 ± 25BP、試料番号 7 は 2,290 ± 140BP、試料番号 8 は 2,100 ± 130BP を示す。

暦年較正結果を表 25 に示す。暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。いずれも北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ、2 σ 双方の値を計算する。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ とし計算させた結果、試料番号 4 は calBC821-212、試料番号 5 は calBC105-AD2、試

表 24 梅田萱峯遺跡1区の放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺構名	取上番号	種別	測定方法	補正年代 BP	δ ¹³ C (‰)	Code No.	Measurement No.
4	SI3	炭 22	炭化材	β線	2,450 ± 230	-26.48 ± 0.004	9056-5	PAL-1120
5	SI3	炭 124	炭化材	AMS法	2,050 ± 40	-23.91 ± 0.93	9056-6	IAAA-52819
6	SI6	炭 14	炭化材	AMS法	2,190 ± 25	-28.41 ± 0.10	9056-2	PLD-5477
7	SI6	炭 47	炭化材	β線	2,290 ± 140	-26.91 ± 0.005	9056-7	PAL-1122
8	SI8	炭 1	炭化材	β線	2,100 ± 130	-30.05 ± 0.006	9056-8	PAL-1123

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 25 梅田萱峯遺跡1区の暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)								相対比	Code No.		
		σ	2 σ	σ	2 σ	σ	2 σ	σ	2 σ				
4	2,446 ± 230	σ	cal BC 821	- cal BC 353	cal BP 2,771	- 2,303	0.907	9056-5	cal BC 294	- cal BC 229	cal BP 2,244	- 2,179	0.084
			cal BC 219	- cal BC 212	cal BP 2,169	- 2,162				0.009			
		2 σ	cal BC 1,114	- cal BC 1,097	cal BP 3,064	- 3,047	0.003						
			cal BC 1,091	- cal AD 20	cal BP 3,041	- 1,930			0.997				
5	2,046 ± 36	σ	cal BC 105	- cal AD 2	cal BP 2,055	- 1,948	1.000	9056-6		cal BC 168	- cal AD 26	cal BP 2,118	- 1,924
			cal AD 43	- cal AD 47	cal BP 1,907	- 1,903			0.007				
		2 σ	cal BC 354	- cal BC 291	cal BP 2,304	- 2,241	0.708						
			cal BC 231	- cal BC 201	cal BP 2,181	- 2,151			0.292				
6	2,191 ± 24	σ	cal BC 362	- cal BC 269	cal BP 2,312	- 2,219	0.607	9056-2		cal BC 265	- cal BC 185	cal BP 2,215	- 2,135
			cal BC 719	- cal BC 695	cal BP 2,669	- 2,645			0.044				
		2 σ	cal BC 540	- cal BC 174	cal BP 2,490	- 2,124	0.956						
			cal BC 766	- cal BC 51	cal BP 2,716	- 2,001			1.000				
7	2,294 ± 135	σ	cal BC 355	- cal BC 287	cal BP 2,305	- 2,237	0.188	9056-7		cal BC 233	- cal AD 24	cal BP 2,183	- 1,926
			cal BC 404	- cal AD 180	cal BP 2,354	- 1,770			0.990				
		2 σ	cal AD 187	- cal AD 214	cal BP 1,763	- 1,736	0.010						
			cal BC 404	- cal AD 180	cal BP 2,354	- 1,770			0.990				
8	2,100 ± 134	σ	cal BC 355	- cal BC 287	cal BP 2,305	- 2,237	0.188	9056-8		cal BC 233	- cal AD 24	cal BP 2,183	- 1,926
			cal BC 404	- cal AD 180	cal BP 2,354	- 1,770			0.990				
		2 σ	cal AD 187	- cal AD 214	cal BP 1,763	- 1,736	0.010						
			cal BC 404	- cal AD 180	cal BP 2,354	- 1,770			0.990				

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95% である
- 5) 相対比は、σ、2 σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

料番号6は calBC354-201、試料番号7は calBC719-174、試料番号8は calBC355-AD24 である。

(4) 考察

弥生時代中期後葉の住居跡から出土した年代測定値は、SI13の炭22でやや古い値を示した以外、概ね2100年前前後の値を示した。鳥取県における弥生時代中期の年代値は少なく、弥生時代後期の放射性炭素年代測定値が青谷上寺地遺跡で得られている(国立歴史民俗学博物館, 2004)。青谷上寺地遺跡の弥生時代後期の炭化米と植物繊維の年代値は、炭化米が $2,140 \pm 40\text{yBP}$ ・ $2,110 \pm 40\text{yBP}$ ・ $2,150 \pm 40\text{yBP}$ 、植物繊維が $1,990 \pm 40\text{yBP}$ ・ $2,010 \pm 40\text{yBP}$ を示している。今回の年代測定値は、青谷上寺地遺跡の結果と比較して、やや古い値を示していることになる。現時点で弥生時代中期の年代に関する情報が少ないため、今後の年代測定結果の蓄積を待って、今回の結果について再評価する必要がある。

2. 樹種同定

(1) 試料

試料は、SI3・6・8から出土した炭化材22点(試料番号19-40)である。このうち、試料番号21, 25, 31, 35, 39は、放射性炭素年代測定を実施した試料と同一試料から分割されたものであるが、確認のため放射性炭素年代測定試料(試料番号4-8)についても樹種同定を実施する。

(2) 分析方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を表7に示す。炭化材は、針葉樹1種類(イヌガヤ)、広葉樹6種類(スダジイ・クスノキ科・ツバキ属・カラスザンショウ・ムクロジ・ニガキ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イヌガヤ科イヌガヤ属
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早・晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1-2個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属
環孔性放射孔材で、孔圏部は4-5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は基本的に単穿孔であるが、小道管に稀に階段穿孔が認められることがある。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では角張った円形、単独または2-3個が主として放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

表 26 梅田萱峯遺跡1区の樹種同定結果

番号	遺構	取上 番号	種別	樹種名	
				和名	学名
4	SI3	炭 22	炭化材	クスノキ科	<i>Lauraceae</i>
5	SI3	炭 124	炭化材	ニガキ	<i>Picrasma quassioides (D. Don) Benn.</i>
6	SI6	炭 14	炭化材	ツバキ属	<i>Camellia</i>
7	SI6	炭 47	炭化材	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
8	SI8	炭 1	炭化材	イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch f.</i>
19	SI3	炭 1	半截丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
20	SI3	炭 5	板?	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
21	SI3	炭 22	半截丸太	クスノキ科	<i>Lauraceae</i>
22	SI3	炭 33	丸太	ニガキ	<i>Picrasma quassioides (D. Don) Benn.</i>
23	SI3	炭 65	板状	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
24	SI3	炭 66	丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
25	SI3	炭 124	丸太	ニガキ	<i>Picrasma quassioides (D. Don) Benn.</i>
26	SI3	炭 138	丸太	ツバキ属	<i>Camellia</i>
27	SI3	炭 145	丸太	ニガキ	<i>Picrasma quassioides (D. Don) Benn.</i>
28	SI6	炭 1	半截丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
29	SI6	炭 9	半截丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
30	SI6	炭 12	半截丸太	ニガキ	<i>Picrasma quassioides (D. Don) Benn.</i>
31	SI6	炭 14	半截丸太	ツバキ属	<i>Camellia</i>
32	SI6	炭 15	半截丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
33	SI6	炭 32	半截丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
34	SI6	炭 33	丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
35	SI6	炭 47	丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
36	SI6	炭 50	丸太	ツバキ属	<i>Camellia</i>
37	SI6	炭 56	丸太	スダジイ	<i>Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai</i>
38	SI6	炭 69	丸太	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.</i>
39	SI8	炭 1	丸太	イヌガヤ	<i>Cephalotaxus harringtonia (Knight) K. Koch f.</i>
40	SI8	炭 7	板状	ムクロジ	<i>Sapindus mukorossi Gaertn.</i>

・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、年輪のはじめにやや大きな道管が1列配列した後、やや急激に管径を減じて単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。放射組織には結晶細胞が認められる。

・カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

散孔材で、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。年輪界を挟んだ道管径の変化は比較的大きい。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

・ニガキ (*Picrasma quassioides* (D. Don) Benn.) ニガキ科

環孔材で、孔圏部は2-3列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～角張った円形、単独、小道管は、横断面では円形～多角形で単独～塊状となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

(4) 考察

炭化材が出土したSI3, 6, 8は、いずれも弥生時代中期後葉の住居跡であり、SI3, 6は焼失住居、SI8は焼失住居の可能性があるとされる。いずれも床面がほぼ円形を呈する。SI3, 6では住居のほぼ全面で床面上から炭化物あるいは焼土塊が検出されている。樹種同定を実施した炭化材は、SI3が住居の

中央部から西側にかけての床面上から出土しており、丸太や半截丸太の形状を呈するものが多いが、板状の炭化材もある。SI6では、住居の北側、西側、南側の床面上から出土した炭化材が中心で、一部南側では壁際から出土したたんか材もある。いずれも丸太あるいは半截丸太である。SI8では、住居の中央部付近の床面と、南側の壁際付近から出土した2点を試料とした。住居中央部付近の炭化材が丸太、南側の壁際付近の炭化材が板状である。

これらの炭化材には、針葉樹1種類と広葉樹6種類の合計7種類が認められた。点数の多い2軒についてみると、種類構成は多少異なるものの、いずれもスダジイが多く、各4種類の炭化材が認められている。この結果から、住居構築材にはスダジイを主とした種類構成が推定される。スダジイに関してみると、丸太、半截丸太、板のいずれにも利用されており、形状による利用状況の違いは認められない。

針葉樹のイヌガヤは、針葉樹としては比較的硬で強度や耐水性が高い材質を有する。スダジイは、比較的硬であるが、耐朽性は低い。ツバキ属とムクロジは、硬で比較的強度が高い部類に入る。カラスザンショウとニガキは、広葉樹材としてはそれほど硬ではなく、加工も容易である。クスノキ科には多くの種類があり、木材の材質も様々であるが、今回の試料は樟脳を溜める油細胞が比較的多く見られることから、耐水性が高い可能性がある。スダジイ、ツバキ属、ムクロジ、イヌガヤは暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、クスノキ科にも構成種が多く含まれる。とくにスダジイは尾根筋等の乾いた環境に多いことから、遺跡周辺の丘陵尾根上にスダジイを主とした常緑広葉樹林がみられ、そこから木材を得たことが推定される。

本遺跡周辺では、茶畑六反田遺跡で弥生時代中期の住居跡から出土した炭化材の樹種同定が実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004）。その結果では、柱材にアカガシ亜属、ツバキ属、ヤマグワ、板材にモミ属、ヤマグワが認められているが、スダジイは1点も認められず、本遺跡の結果とは異なる。こうした違いは、遺跡周辺の地形環境等に起因する局地的な植生の違い等を反映している可能性がある。今後、弥生時代中期の木材利用に関する資料を蓄積することで木材利用の地域差や古植生との関係等を検討したい。

3. 植物珪酸体分析

(1) 試料

分析試料は、SI4中央ピットP5の埋土下層（試料番号45）、SI9中央ピットP7の埋土5層（試料番号46）、貯蔵穴の可能性が指摘されるSK33の埋土22層（試料番号47）の合計3点である。

(2) 分析方法

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすいう濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

なお、燃料材に関する調査では珪化組織片の産状に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

(3) 結果

分析結果を表8に示す。SI4中央ピットP5の埋土下層（試料番号45）およびSI9中央ピットP7の埋土5層（試料番号46）では、珪化組織片が全く認められない。いずれも植物珪酸体の検出個数が少なく、クマザサ属を含むタケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

また、SK33の埋土22層（試料番号47）ではイネ属などのイネ科作物に由来する植物珪酸体は検出されない。タケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

(4) 考察

弥生時代中期後葉とされる住居跡SI4とSI9の中央部で検出されたピットでは珪化組織片が検出されず、燃料材として利用されたイネ科植物の痕跡は認められない。ただし、燃焼後の灰を住居の外へ廃棄した場合には、中央ピットの埋土内に珪化組織片が残留しにくいと考えられる。そのため、今回の産状だけで燃料材としてイネ科植物が利用されていた可能性を否定することは難しい。また、植物珪酸体として検出されたクマザサ属などのタケ亜科は、燃料材として利用される場合もある。当該期の燃料材については、今後さらに同様なピットについて調査例を蓄積して検討する必要がある。貯蔵穴の可能性が指摘されるSK33の埋土22層では、イネ属などのイネ科作物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。そのため、SK33が埋積した頃にイネ科作物が埋積していたとは考えにくい。ただし、SK33が埋積する以前に内容物が外部へ持ち出された場合には、土坑内に内容物の痕跡が残りにくいと考えられる。そのため、今後さらに同様な貯蔵穴について調査例を蓄積して検討する必要がある。

表27 梅田萱峯遺跡1区の植物珪酸体分析結果

種 類	和名	学名	試料番号・遺構名・層位		
			45	46	47
			SI4:P5 下層	SI9-P7 5層	SK33 埋土22層
イネ科葉部短細胞珪酸体		<i>Short cell opal phytoliths of Gramineae</i>			
タケ亜科クマザサ属		<i>Pleioblastus</i>	1	-	-
タケ亜科		<i>Bambusoideae</i>	-	1	1
不明ダンチク型		<i>Arundoid(unknown)</i>	2	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体		<i>Moter cell opal phytoliths of Gramineae</i>			
タケ亜科クマザサ属		<i>Pleioblastus</i>	2	4	-
タケ亜科		<i>Bambusoideae</i>	2	3	1
ウシクサ族		<i>Andropogoneae</i>	1	-	-
不明		<i>fan-shaped(unknown)</i>	3	-	1
合 計		<i>total</i>			
イネ科葉部短細胞珪酸体		<i>Short cell opal phytoliths of Gramineae</i>	3	1	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体		<i>Moter cell opal phytoliths of Gramineae</i>	8	7	2
総 計		<i>total numbers</i>	11	8	3

引用文献

- 古川 郁夫・船橋 晃,2004, 笠見第3遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種.「鳥取県教育文化財団調査報告書86 一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 鳥取県東伯郡東伯町 笠見第3遺跡 本文編」,財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所,488-497.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 近藤 鎌三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.
- 国立歴史民俗学博物館,2004,学術創成研究費「弥生農耕の起源と東アジアー炭素年代測定による高精度編年体系の構築ー」.研究結果,炭素14年代測定データ一覧表(1)～平成15年度まで.(但しPDFファイルによる:http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/katudoh/sousei/yayoinoukou/data_01.pdfによる).
- パリオ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析からみた人々の生活(1).慶應義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」,慶應義塾,347-370.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2004,茶畑六反田遺跡から出土した炭化材の樹種.「鳥取県教育文化財団調査報告書94 一般国道9号(名和淀江道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 鳥取県西伯郡名和町 茶畑六反田遺跡(0・5区)」,財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省鳥取工事事務所,124-125.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

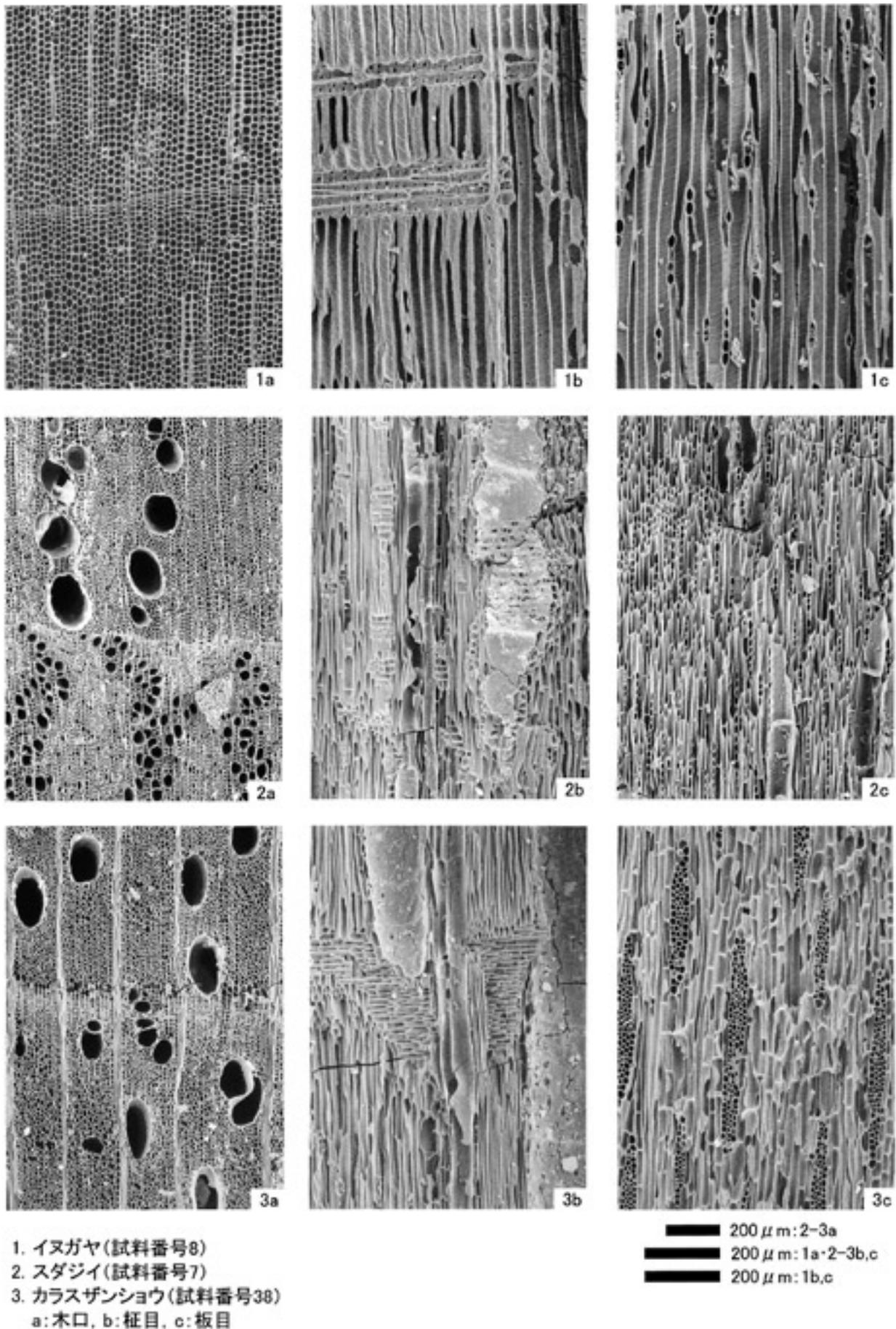
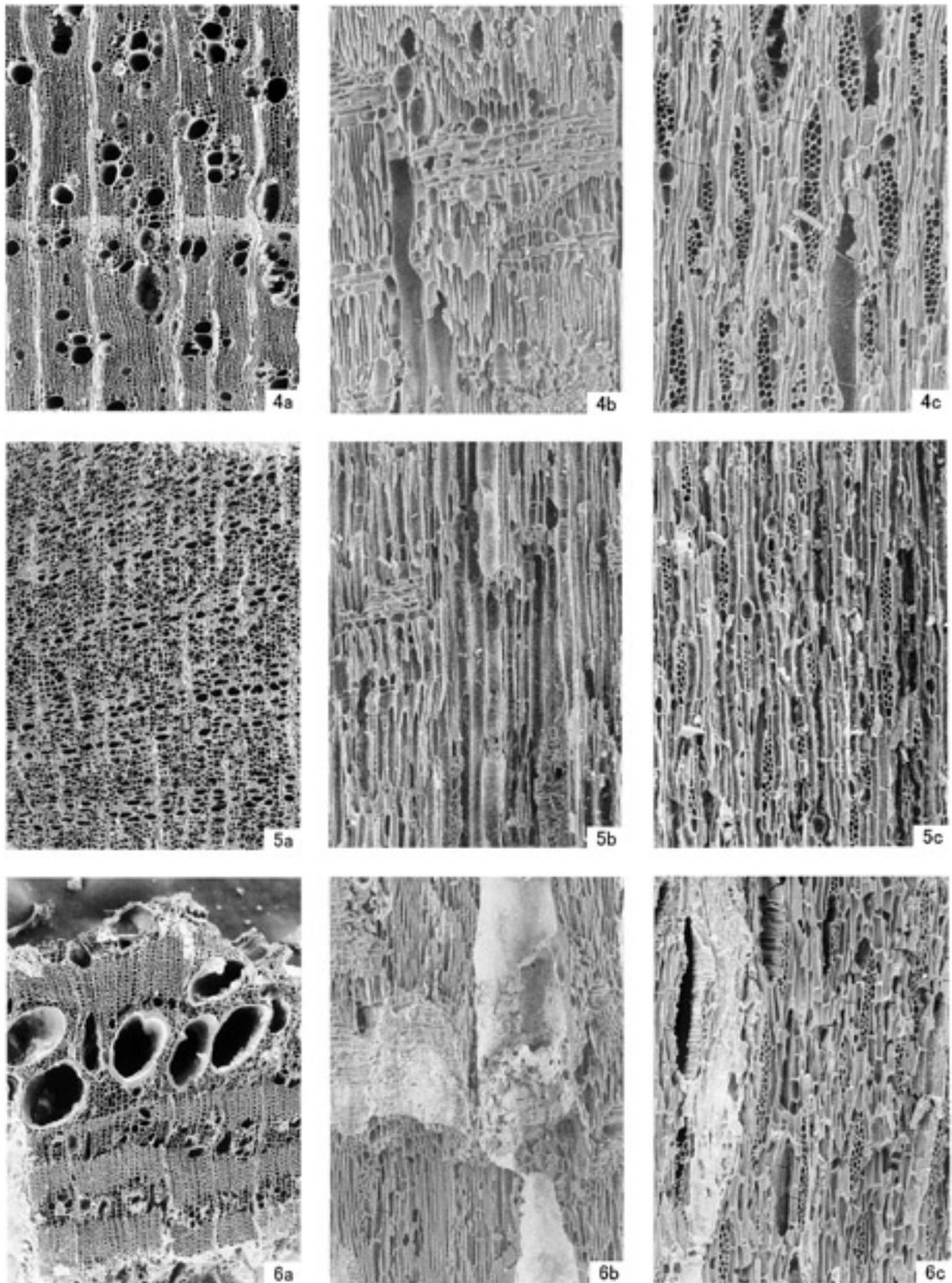


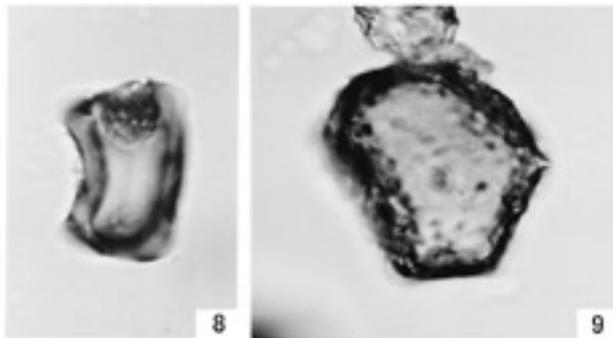
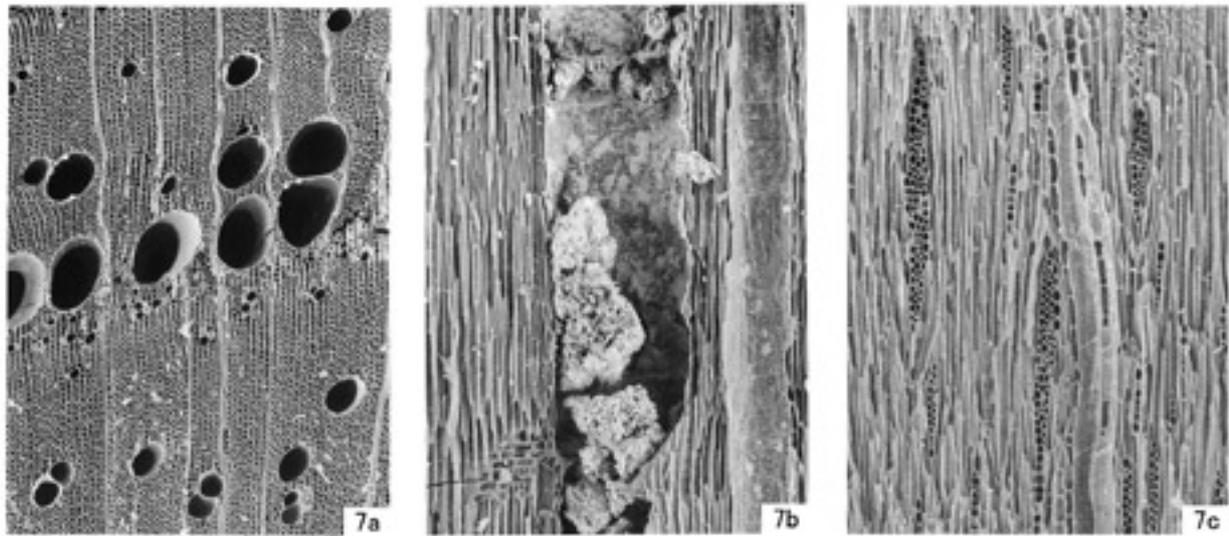
写真13 梅田萱峯遺跡1区の炭化材 (1)



4. クスノキ科(試料番号4)
5. ツバキ属(試料番号6)
6. ムクロジ(試料番号40)
a:木口, b:柱目, c:板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

写真14 梅田萱峯遺跡1区の炭化材 (2)



7. ニガキ(試料番号5) a:木口, b:柁目, c:板目
8. クマザサ属短細胞珪酸体(試料番号45)
9. クマザサ属機動細胞珪酸体(試料番号46)

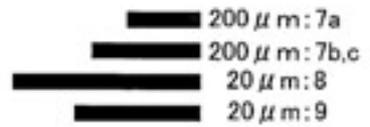


写真15 梅田萱峯遺跡1区の炭化材(3)・植物珪酸体

第2節 梅田萱峯遺跡出土黒曜石の産地推定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

梅田萱峯遺跡出土黒曜石について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

2. 試料と方法

対象試料は梅田萱峯遺跡より出土した黒曜石の剥片 16 点である（表 1）。

分析装置は、（株）セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA - 2110L を使用した。装置の仕様は、X線管はロジウム Rh ターゲット、X線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間 240sec、照射径 10 mm、電流自動設定（1-63 μ A、デッドタイムが 20% 未満になるよう自動的に設定）、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（望月 2004）を用いた。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps ; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1). Rb 分率 = $\text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$
- 2). Sr 分率 = $\text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$
- 3). Zr 分率 = $\text{Zr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$
- 4). $\text{Mn 強度} \times 100 / \text{Fe 強度}$
- 5). $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$

これらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度 \times 100 / Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$ の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定する。別表と別図に産地原石判別群と産地位置を示した。

3. 分析結果

表 28 に産地推定結果を示す。第 130 図および第 131 図に黒曜石原石の判別図と梅田萱峯遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、試料 11～18、21～23、25、26 の 13 点が隠岐久見群の範囲に収まった。このことから、これら試料はいずれも隠岐地方産の黒曜石である可能性が高いと判断される。なお、試料 19、20、24 の 3 点は風化が激しく測定不能であった。

4. まとめ

梅田萱峯遺跡より出土した黒曜石について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、測定がきた13点すべてが隠岐久見群産と推定され、いずれも隠岐地方産の可能性が高いと判断された。

表 28 梅田萱峯遺跡出土黒曜石製石器産地推定結果

1. 判別図法・判別分析からの最終推定結果

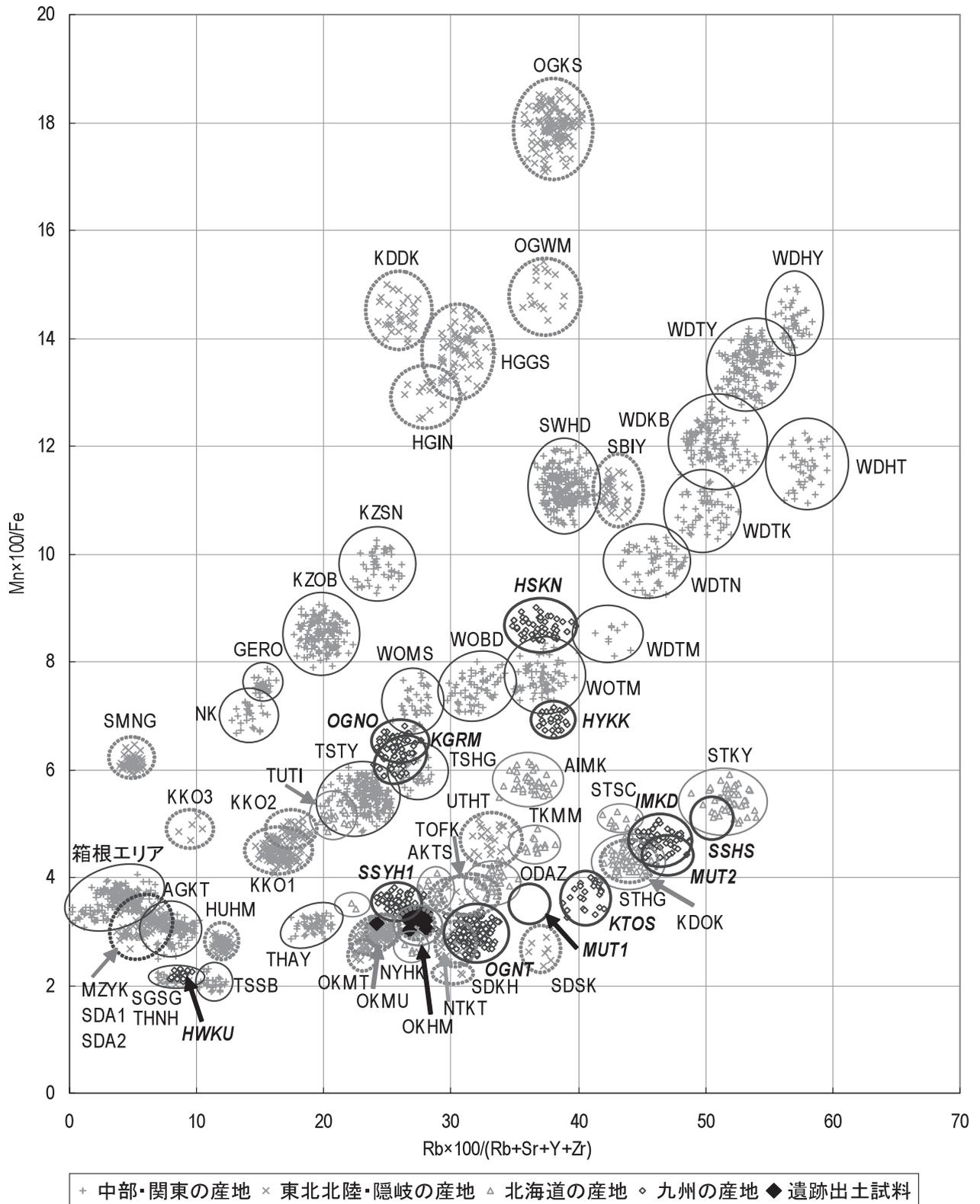
試料番号	遺跡	推定産地
11	梅田萱峯	隠岐久見群
12	梅田萱峯	隠岐久見群
13	梅田萱峯	隠岐久見群
14	梅田萱峯	隠岐久見群
15	梅田萱峯	隠岐久見群
16	梅田萱峯	隠岐久見群
17	梅田萱峯	隠岐久見群
18	梅田萱峯	隠岐久見群
19	梅田萱峯	風化推定不可
20	梅田萱峯	風化推定不可
21	梅田萱峯	隠岐久見群
22	梅田萱峯	隠岐久見群
23	梅田萱峯	隠岐久見群
24	梅田萱峯	風化推定不可
25	梅田萱峯	隠岐久見群
26	梅田萱峯	隠岐久見群

2. 判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

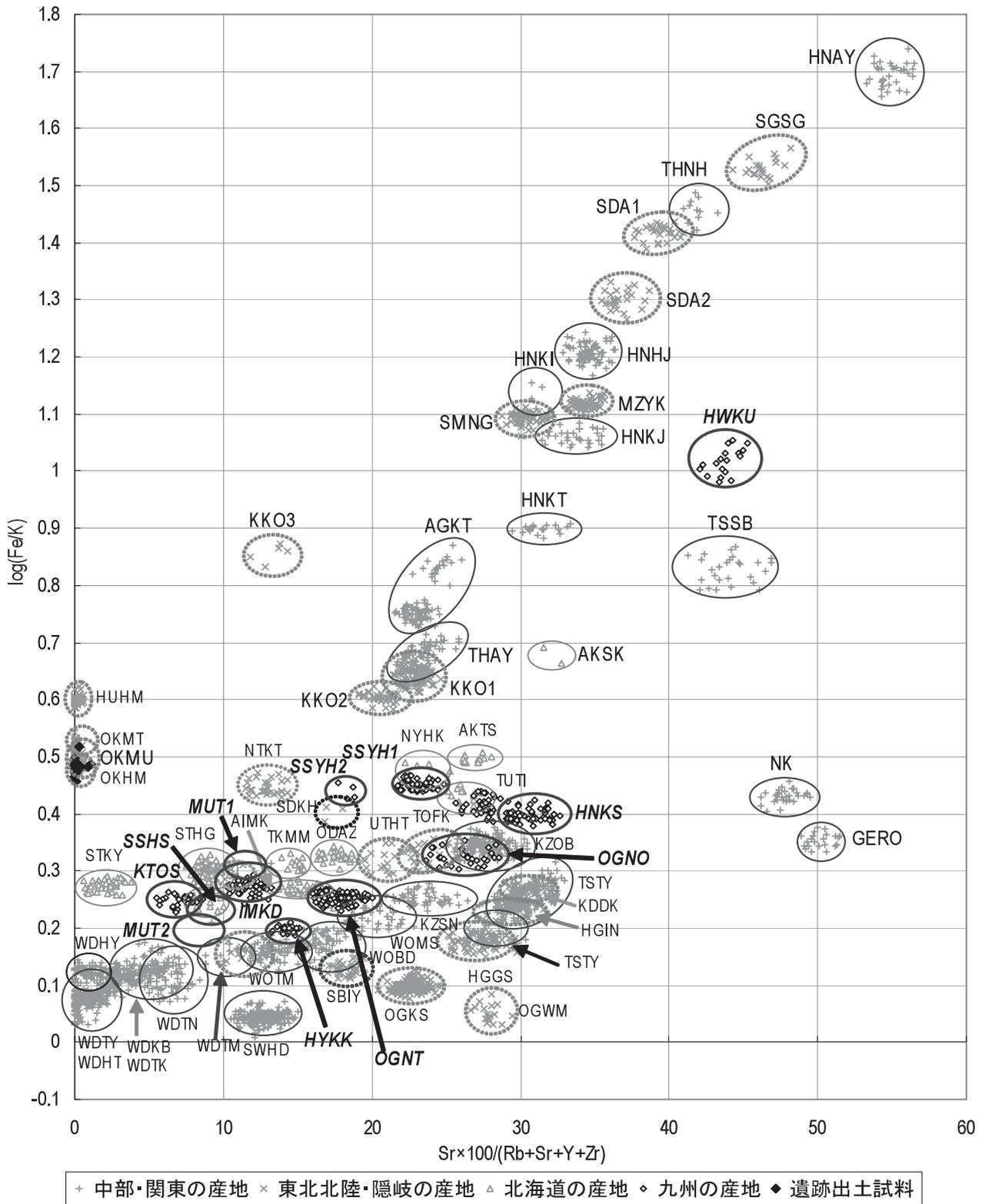
判別図 判別群	判別分析					
	第1候補産地			第2候補産地		
	判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
OKHM	OKHM	1.41	1	OKMU	23.55	0
OKHM	OKHM	0.5	0.100	OKMU	19.14	0.000
OKHM	OKHM	1.39	0.100	OKMU	21.59	0.000
OKHM	OKHM	0.93	0.990	OKMU	11.27	0.010
OKHM	OKHM	2.67	0.998	OKMU	16.71	0.002
OKHM	OKHM	3.39	0.100	OKMU	20.07	0.000
OKHM	OKHM	3.35	1	OKMU	28.21	0
OKHM	OKHM	1.52	0.100	OKMU	21.38	0.000
風化推定不可	風化推定不可			風化推定不可		
風化推定不可	風化推定不可			風化推定不可		
OKHM	OKHM	1.07	0.100	OKMU	18.73	0.000
OKHM	OKHM	1.58	0.998	OKMU	15.59	0.002
OKHM	OKHM	0.87	1	OKMU	25.98	0
風化推定不可	風化推定不可			風化推定不可		
OKHM	OKHM	2.1	0.100	OKMU	19.99	0.000
OKHM	OKHM	0.54	0.999	OKMU	16.5	0.001

引用文献・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定. かながわ考古学財団調査報告 167 用田大河内遺跡, 511-517, 財団法人
かながわ考古学財団



第130図 梅田萱峯遺跡出土黒曜石判別図 (1)



第131図 梅田萱峯遺跡出土黒曜石判別図（2）

表 29 産地原石判別群 (SEICO SEA-2110L 蛍光X線分析装置による)

都道府県	地図番号	エリア	判別群		原石採取地 (分析数)
北海道	1	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂 (19)、八号沢露頭 (31)、八号沢 (79)、黒曜の沢 (6)、幌加林道 (4)
			黒曜の沢群	STKY	
	2	上士幌	三股群	KSM	十三ノ沢 (16)
	3	置戸	安住群	ODAZ	安住 (25)、清水ノ沢 (9)
	4	旭川	高砂台群	AKTS	高砂台 (6)、雨紛台 (5)、春光台 (5)
			春光台群	AKSK	
	5	名寄	布川群	NYHK	布川 (10)
	6	新十津川	須田群	STSD	須田 (6)
7	赤井川	曲川群	AIMK	曲川 (25)、土木川 (15)	
8	豊浦	豊泉群	TUTI	豊泉 (16)	
青森	9	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸 (34)
	10	深浦	八森山群	HUHM	八森山公園 (8)、六角沢 (8)、岡崎浜 (40)
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉 (37)、脇本海岸 (98)
			脇本群	OGWM	脇本海岸 (16)
山形	12	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前 (30)
			今野川群	HGIN	今野川 (9)、大網川 (5)
新潟	13	新津	金津群	NTKT	金津 (29)
	14	新発田	板山群	SBIY	板山牧場 (40)
栃木	15	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢 (50)、桜沢 (20)
			七尋沢群	THNH	七尋沢 (9)、自然の家 (9)
長野	16	和田 (WD)	鷹山群	WDTY	鷹山 (53)、小深沢 (54)、東餅屋 (36)、芙蓉ライト (87)、古峠 (50)、土屋橋北 (83)、土屋橋西 (29)、土屋橋南 (68)、丁字御領 (18)
			小深沢群	WDKB	
			土屋橋北群	WDTK	
			土屋橋西群	WDTN	
			土屋橋南群	WDTM	
			芙蓉ライト群	WDHY	
	和田 (WO)	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢 (36)、ブドウ沢右岸 (18)、牧ヶ沢上 (33)、牧ヶ沢下 (36)、高松沢 (40)	
		牧ヶ沢群	WOMS		
		高松沢群	WOTM		
	17	諏訪	星ヶ台群	SWHD SWhd	星ヶ塔第1鉱区 (36)、星ヶ塔第2鉱区 (36)、星ヶ台A (36)、星ヶ台B (11)、水月霊園 (36)、水月公園 (13)、星ヶ塔のりこし (36)
18	蓼科	冷山群	TSTY	冷山 (33)、麦草峠 (36)、麦草峠東 (33)、渋ノ湯 (29)、美し森 (4)、八ヶ岳7 (17)、八ヶ岳9 (18)、双子池 (34)	
		双子山群	TSHG	双子池 (26)	
		播鉢山群	TSSB	播鉢山 (31)、亀甲池 (8)	
神奈川	20	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯 (34)
			畑宿群	HNHJ	畑宿 (71)
			黒岩橋群	HNKI	黒岩橋 (9)
静岡	21		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋 (30)
			上多賀群	HNKT	上多賀 (18)
22	天城	柏峠群	AGKT	柏峠 (80)	
東京	23	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島 (100)、長浜 (43)、沢尻湾 (8)
			砂糠崎群	KZSN	砂糠崎 (40)、長浜 (5)
島根	24	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中 (30)、久見採掘現場 (18)
			箕浦群	OKMU	箕浦海岸 (30)、加茂 (19)、岸浜 (35)
			岬群	OKMT	岬地区 (16)
その他	-	不明	NK群	NK	中ッ原 1G、5G (遺跡試料)、原石産地は未発見
大分	25	姫島	観音崎群	HSKN	観音崎
佐賀	26	伊万里	腰岳群	IMKD	大河内 - 竜門線、牧川
長崎	27	松浦	岳崎免1群	MUT1	岳崎免
			岳崎免2群	MUT2	岳崎免
	28	佐世保	淀姫1群	SSYH1	淀姫神社
			淀姫2群	SSYH2	淀姫神社
29	佐世保	針尾	SS, SX	中町、古里など	
熊本	30	川棚	大崎群	KTOS	大崎海岸
	31	小国	西小国群	OGNO	西小国
宮崎	32	球磨	白浜群	KMSH	白浜林道
	33	人吉	桑ノ木群	HYKK	桑ノ木津留
鹿児島	34	大口	日東群	OGNT	日東
	35				五女木 A, B, C, D 地点
	36				猩猩 A, B 地点
	37	樋脇	上牛鼻群	HWKU	上牛鼻 A, B, C 地点
	38	市来	平木場群	IKHK	平木場
	39	鹿児島	竜ヶ水群	KGRM	三船神社、竜ヶ水
	40	根占	大根占群	NGON	大根占 A, B, C, D 地点



第132図 黒曜石産地位置図

第3節 梅田萱峯遺跡出土サヌカイトの産地推定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

梅田萱峯遺跡出土サヌカイトについて、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

2. 試料と方法

対象試料は梅田萱峯遺跡より出土したサヌカイトの遺物 14 点である（表 31）。各試料とも風化層に覆われていたため、エアブラシを用いて試料の一部分の新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、（株）セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA - 2001L を使用した。装置の仕様は、X線管はロジウム Rh ターゲット、X線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300sec、照射径 10 mm、電流自動設定（1-63 μ A、デッドタイムが 20% 未満になるよう自動的に設定）、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月 2004）を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1). Rb 分率 = $Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2). Sr 分率 = $Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3). $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4). $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そしてこれらの指標値を用いた 2 つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$ の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表 30 に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

表 30 原石採取地と試料数

二上山	春日山	12
讃岐	国分台自衛隊演習場横	12
讃岐	国分台下みかん畑	12
讃岐	神谷神社	12
讃岐	雄山	6
讃岐	雌山	6
讃岐	金山	12
讃岐	城山南側	6
讃岐	城山北側	6
讃岐	高産霊神社	12

3. 分析結果

図 1 および図 2 に、サヌカイト原石の判別図と梅田萱峯遺跡出土試料 14 点をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

試料No. 3、No. 8、No. 13を除く試料が金山の範囲に収まり、このうち試料No. 4は金山と城山の重複範囲に収まった。このことから、これら11点の試料は讃岐地方産のサヌカイトである可能性が高く、少なくとも二上山系の春日山産ではないといえる。ただし、未知の産地のサヌカイトである可能性は否定できない。

試料No. 8とNo. 13は、図136においては金山と城山の範囲に収まったが、図137においてはいずれにも当てはまらない位置にプロットされた。試料No. 3は図136、図137ともに、サヌカイト原石の判別群から大きく離れた位置にプロットされた。

表31に各試料の一覧と産地推定結果を示す。

表31 分析対象試料及び推定結果一覧

試料No.	器種	地区	出土地点	取上番号	判別群	エリア
2	碎片	1区	SI1	206	金山	讃岐
3	石鏃	1区	SI2	253	?	不明
4	石鏃	1区	SI1	640	金山 or 城山	讃岐
5	石鏃	1区	SI6	1225	金山	讃岐
6	打製石包丁	3区	SI1	452	金山	讃岐
7	石鏃	3区	SI1	470	金山	讃岐
8	石鏃	3区	SI1	482	?	不明
9	剥片	3区	SI2-P2	683	金山	讃岐
10	剥片	3区	SI2	826	金山	讃岐
11	剥片	3区	SI2	828	金山	讃岐
12	剥片	3区	SI2	828	金山	讃岐
13	剥片	3区	SI4	825	?	不明
14	剥片	3区	SI1	33	金山	讃岐
15	剥片	3区	SI1	34	金山	讃岐

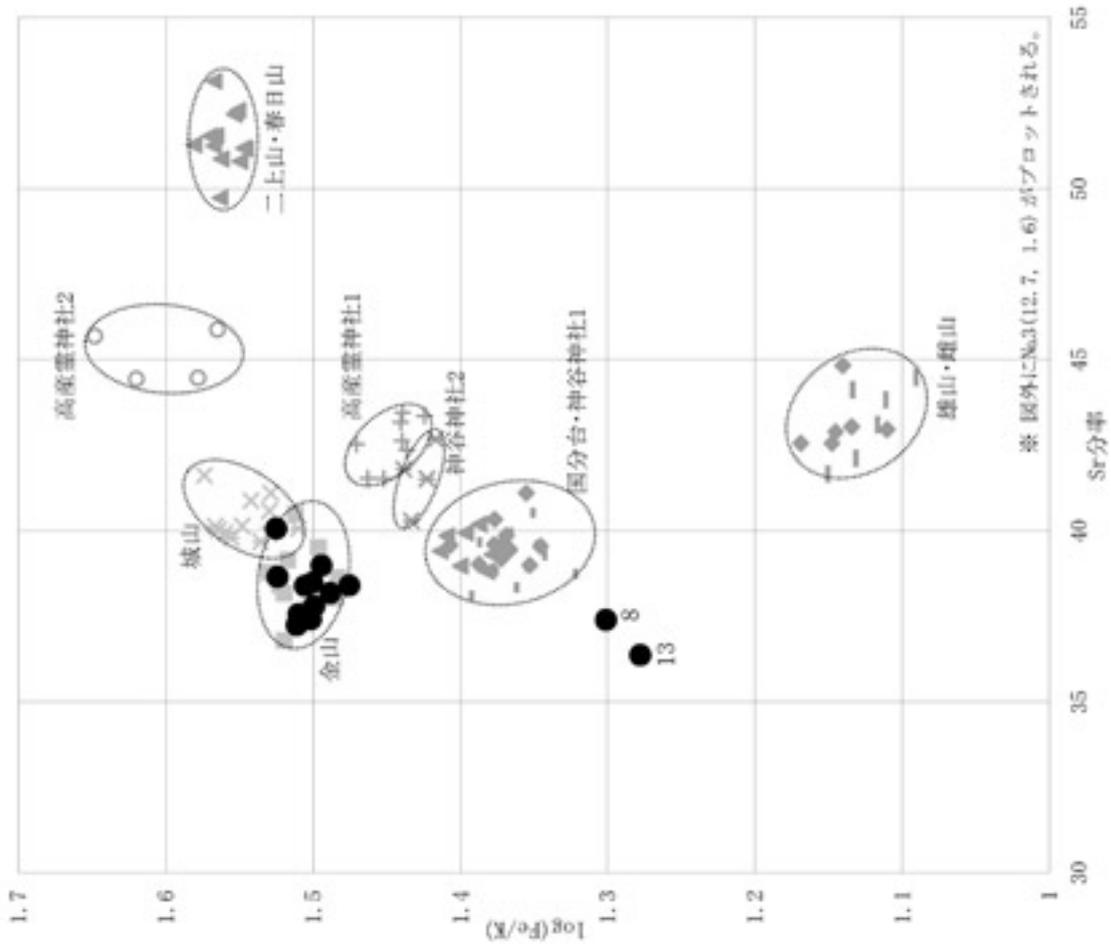
4. まとめ

梅田萱峯遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、11点の遺物が讃岐地方産の可能性が高いと推定された。ただし、未知の産地である可能性もある。残り3点は不明であった。

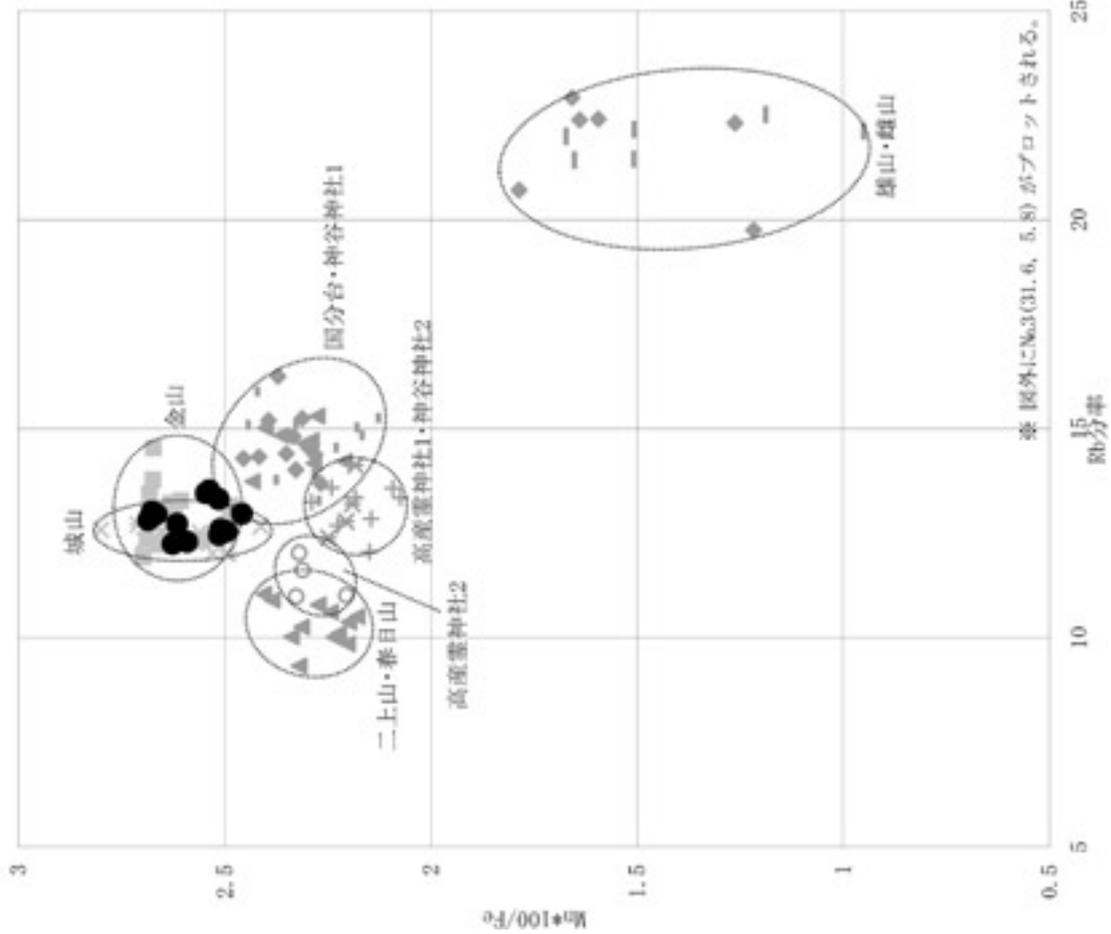
引用文献・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団調査報告167 用田大河内遺跡，511-517，財団法人

かながわ考古学財団



第134図 梅田萱峯遺跡出土サスキイト判別図(2)



第133図 梅田萱峯遺跡出土サスキイト判別図(1)

第4節 梅田萱峯遺跡1区における炭化種実同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 試料

試料は、1区SI1・P5（中央ピット）の1試料、SI4・P5（中央ピット）の1試料、SK6・最下層の1試料の計3試料である。いずれも水洗選別済みの炭化物である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

草本3分類群が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

[草本]

・イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科 長さ×幅・4.27mm×2.36mm、4.04mm×2.27mm、4.09mm×2.31mm、4.31mm×2.36mm、4.40mm×3.00mm

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

・アワ *Setaria italica* Beauv 果実 イネ科 長さ×幅・1.42mm×1.22mm、1.11mm×1.20mm、1.33mm×1.20mm、1.18mm×1.18mm、1.18mm×1.24mm

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。胚の部分がくぼむ。

・ササゲ属 *Vigna* 子葉 マメ科 長さ×幅・4.80mm×3.30mm

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

(2) 種実群集の特徴

1) SI 1・P 5（中央ピット）

イネ1が同定された。

2) SI 4・P 5（中央ピット）

同定されなかった。

3) SK 6・最下層

イネ6、アワ14、ササゲ属2が同定された。

5. 考察とまとめ

梅田萱峯遺跡における炭化種実同定の結果、栽培植物のイネ、アワ、ササゲ属が認められた。イネに加え、アワ、ササゲ属の畑作が行われていたとみなされ、本遺跡の重要な生業の1つであったと考えられる。ササゲ属については縄文時代からの検出例があるが、弥生時代については分布および伝播に不明な部分が多く、アワなど伴にイネと伝播する系統である可能性もある。本遺跡の調査結果は良好な資料となる。

表 32 梅田萱峯遺跡における炭化種実同定結果

分類群		部位	SI1	SI4	SK6
学名	和名		P5	P5	最下層
<i>Herb</i>	草本				
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実	1		6
<i>Setaria italica Beauv.</i>	アワ	果実			14
<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子（半形）			1
		（破片）			1
Total	合計		1	0	22
Unknown	不明炭化物片				23
	備考		炭化材片 +	炭化材片 +	炭化材片 +

参考文献

- 笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131-139.
- 南木睦彦（1991）栽培植物。古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165-174.
- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実。月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.18-22.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナルNo.355，ニューサイエンス社，p.2-14.



9 アワ果実

10 アワ果実

11 ササゲ属子葉

12 同左

— 1.0mm

— 1.0mm

写真 16 梅田萱峯遺跡の炭化種実